
独裁者の姫君

夢想花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独裁者の姫君

【Nコード】

N3396R

【作者名】

夢想花

【あらすじ】

貧しいメイドの娘メレッサはじつは残虐非道な皇帝の娘だった。いきなり豪華な暮らしが始まり、次々ともものすごい権力が転がり込む。

故郷の星を攻めている軍隊が彼女のものになってしまう。戦争を止めさせようと攻撃停止命令を出す……
信じられないほどの幸運に恵まれた、出世物語です。

1・皇帝の娘

もうすぐ、ここが戦場になりそうだった。もちろん、人々は逃げ始めた。飛行車と呼ばれる空を飛ぶことができる自家用車みたいな飛行機に必要なものを積み込んで逃げていく。

「まだ、やってないの」

セシルがメレッサを怒鳴っていた。セシルは自分では荷造りするわけではなくメレッサに全部やらせていた。メレッサはさっきまで食料の荷造りをしていて、セシルの荷物は今始めたばかりでだった。「すみません。すぐやりますから」

言い訳はしないことにしていた。どうせ事情を説明してもセシルはもつと腹をたてるだけだった。

セシルは荷造りの箱を蹴飛ばした。箱の中の荷物が飛び散った。彼女はなぜかこんな事をする、メレッサを見ているといらいらするらしい。

「いらぬ物も入れてるでしょう。必要なものだけにして。わかった」

もう一度やり直さなければならぬがもう時間がない。自分の荷物も準備しないといけないのに、これでは自分の荷物の準備する余裕がない。

「すみません、やり直します」

しかたない。まずこつちをやるしかない。急いで転がった品物を拾い集めた。不要と思える物を横にどけた。だいたい全部必要とは思えないものばかりだった。

メレッサは16才、母とここにメイドとして住み込みで働いている。メレッサも中学を卒業してからは母を手伝ってメイドとして働いているが、ここには同じ年代の子供がいるので彼らの下で働くのは辛かった。ここには4年いるが、幼い時から似たような生活だった。

「さあ、急いで積み込んで」

タラントさんが大声で叫ぶ。今にもドラールの宇宙船が攻撃を始めるのではないかと思うとあせってしまう。ドラールの宇宙船はこのはるか上空にすでに展開を終えているらしい。

セシルの荷物を詰め込むと両手に抱えて飛行車に運んだ。タラントさんがそれを飛行車に押しこむ。もう車の中はいっぱいだ。

「すみません、私の荷物がまだなんです、待つてもらえますか？」

「ばか、早く持つてこい」

タラントさんに怒鳴られた。ぼやぼやしていて遅くなったわけではないのに、でも、本当に必要なものしか持つていけそうにない。あわてて自分の部屋に駆け込んだ。やっと自分の荷物の準備ができる。

ドラールの攻撃が始まるのではないかと気ばかりがアせる。古いカバンに自分とお母さんの着替えを入れた。やっと、母もやってきた。母も一日中こき使われてくたくたになっていた。

「かあさん、着替えは入れたから。他に何を持つていく？」

一番大切な写真を入れたメモリーはポケットに入れていた。しかし、母は急ぐ様子がない。

「メレッサ、私たちはここに残るから」

メレッサはビックリした。

「ここは戦場になるんですよ」

「大丈夫よ。戦争になったらどこにいても同じことなの」

母は戦争の経験がある。若い頃、やはり、ことと同じようにドラールに攻撃された星に住んでいたのだ。戦争の経験があるから確かに母の言うことが正しいのだろうが、逃げないと言うのは不安だった。

「でも。10キロ先に、ルビル防衛軍が展開しているのよ」

ルビル軍から付近の住民に逃げろと連絡がきたのは今朝のことだった。もっと早く教えてくれたら、こんなに慌てなくてもいいのに。それに、なんでこんな所でドラール軍を迎え撃つのかもわからない。

ここには何もないのに。

母は落ち着いている。

「ここにいましょ」

その方がいいかもしれない。あの一家と狭い車内で顔を付き合わせるのはいかたがた。あんなに気がしなかった。

「さあ、いくぞー」

タラントさんが怒鳴っている。

タラントさん一家はもう全員飛行車に乗っていた。

「はやく乗れ」

タラントさんが険しい顔で怒鳴る。

「私たちはここに残ります」

タラントさんはびっくりしている。

「ここは戦場になるんだぞ」

「ちょうどいいじゃない、食料が助かるわ」

セシルが言う。

「大丈夫です」

母がそう言うと、タラントさんはそれ以上二人を誘わなかった。

タラントさんは飛行車を発進させた、飛行車がスーと飛んでいく。

「家の中の物に勝手にさわらないでね」

車の中からセシルの怒鳴り声が聞こえた。

二人は飛んでいく飛行車を見送ったが、二人は乗り物など持っていないからもう逃げるすべはなかった。

空にはたくさんの飛行車が飛んでいく。みんな逃げだしているのだ。

飛行車の数もだんだん少なくなり、逃げるのに手間取った最後の一機が飛んでいった後は、静かな空が戻ってきた。

家族が逃げ出していった後の家の中は驚くほど静かだった。窓からは広い草原が見え、これから戦争になるなど想像も出来ないほどのんびりとした景色だった。

母は家の中に入ろうとはせずに、外でじっと空を見ていた。あま

りに母が家に入らないのでメレッサは母の所へいった。

「家に入ろう。外は危ないよ」

それでも母は空をみている。メレッサが空を見ると、恐ろしくらいたくさん黒い点が浮かんでいる。あれが全部ドラール軍の宇宙船だ。

「ねえ、地下室に隠れた方がよくない？」

母は何かを探しているように空を見ている。

見ると、黒い小さな点に混じって、かなり大きな点が一つあった。他の点が宇宙戦闘機なのにたいしてそれは母艦クラスの大きな宇宙船だった。それがまっすぐこっちへやってくる。

「ねえ、こっちに来てるみたいよ」

「ここを知らせてあるの」

母は意外な事を言う。

「何を知らせたって？」

母はメレッサを見た。滅多に見せないきつい目をしている。

「メレッサ、これから大事な事を話すから、驚かないでね」

母の言葉は緊張で張り詰めていた。

「メールを送ったけど、届いたのか分からなかったし、返事もなかったから、はつきりするまで黙っていたの。ドラール皇帝にこの場所を教えるわ」

「誰に教えたって？」

貧乏なメイドの母が天下のドラール皇帝にメールなんか送れるはずがない。

「私が、若い時に住んでいた星がドラールに占領されたの。その時、私は捕まってドラール皇帝の所に連れていかれ、その時に生まれたのがあなた」

母の顔は何の表情もない。

「そう、だから、あなたのお父さんはドラール皇帝なの」

意味がほとんど分からなかった。母は何を言っているのだ。

「驚いたでしょうけど、本当よ」

母は父の事を決して話さなかった。なにか深い事情がありそうだなとは思っていたが、あの極悪非道なドラール皇帝がお父さん。どこか他人ごとのように思えた。

「私はあなたが生まれてすぐに逃げ出してここに来たの、ここならドラール皇帝に見つからないと思って。でも、ドラールがここまで来たらもう逃げる所はないわ。ドラールがここを攻めるならこの星のどこにいても安全な所はない。あなたの居場所を教えれば少なくともあなたは助かると思ったの。いくらなんでも我が子を殺すようなことはしないと思うわ」

今まで何度も父の事を考えたことがあった。母を捨てた人かもしれないとも思っていた。母を捨てたのなら憎い奴なのだが、でも会って見たかった。

「あなた、お父さんのこと、何度も聞いたわね。ドラール皇帝だと知ったらショックだと思って教えられなかったの」

まだ、ぴんと来なかった。今まで敵だと思っていた人が父なんてでも、父とわかったらやっぱり会ってみたい。

宇宙船は急速に近づいてきた。

「あの宇宙船はあなたを迎えにきたのよ」
私を迎えに？　ほとんど信じられなかった。

宇宙船が頭上すぐ上に来て止まった、近くに来るとその巨大さに圧倒される。頭の上に屋根ができたみたいで下は暗くなってしまうた。

宇宙船の下に通路が開いて、そこから、ぱらぱらと兵士が飛び出してきた。その中を一人の男が足早にこちらにやってきた。

「ルニー・テルトンさん？」

「はい」

母がうなづく。

「では、この子が」

「そうです」

「では、急いで、いつルビル軍の攻撃が始まるかわかりません」

その男に急かされて二人は足早に宇宙船の中に駆け込んだ。今の今までドラール軍の宇宙船に逃げ込むことがあるなんて考えたこともなかった。

中に入るとすぐに床が揺れるのを感じた。離陸したみたいだ。

「あの、全部、家に置いたまま……」

家から、何一つ持ってきていない。

「姫君、ご安心ください。あの家の品物はあとで全部運んでおきます」

一瞬、誰に言ったのか分からなかった。姫君がこの近くにいてその人に言ったと思った。

『姫君』が自分のことだとわかると、ちょっとこそばい気分だ。

ドラール皇帝の娘なら姫君になるのか。

「ルビル軍の攻撃を受けると危険なので、緊急に離脱中です。もちろん姫君が御乗艦なので千機の戦闘機が本艦を護衛しています」

『御乗艦』とか『護衛』とか言われると不思議な気分になってしまふ。私を守るために千機の戦闘機が護衛している。どこか偉くなったような気がする。

「申し遅れましたが、私は艦長のミルと申します」

ミル艦長はキチツと姿勢を正すと敬礼した。

「では、お部屋にご案内します」

ミル艦長について艦内の通路を歩いた。途中何度も角を曲がって進む。一人で歩いたら絶対に迷子になりそうだ。やがて、広い部屋に案内された。

「ここが姫君のお部屋です。少し狭いですが何せ本艦は軍艦ですのでご辛抱をお願いします」

これで狭い？ 今まで住んでいたタラントさんの家の居間の何倍も広い。

部屋の中に駆け込んだ。すばらしい部屋だ。大きな窓からはルビル星が見える。ルビル星はどんな小さくなっていた。

「ここは、軍艦に賓客をお載せした時に使う特別の部屋です」

ミル艦長が説明してくれる。

部屋の中をぐるっと見回した。豪華な家具があつて、壁には絵がかかっている。

どれもものすごく豪華でうきうきしてしまう。

「こちらが侍女です」

ミル艦長が侍女を紹介した。

侍女は4人いて、やさしそうな感じのほっそりとした女性が歩み出た。

「私、姫君のお世話をさせていただく侍女のミルシーと申します。どうぞなんなりと御用をお申し付けください」

驚きだ、侍女までいるのだ。いままでメイドとして働いていたが、これからは逆に世話をしてもらえる。食事の後片付けも部屋掃除もしなくていいのだ。

「セダイヤワに着くまで3日ほどかかります」

ミル艦長が事務的に説明する。

「セダイヤワって？」

「ドラール皇帝の居城がある星です」

「じゃあ、父はそこにいるんですか？」

思わず父と言ってしまった。

「はい、そこにおられます」

自分でも驚くほど簡単にドラール皇帝が父だと受け入れていた。ついさつきまで敵だと思っていたのに。

メレッサは、自分の奇跡のような運命に今にも叫びだしい気持ちだった。この私が皇帝の娘。巨万の富と強大な権力を持つ皇帝の、その娘がこの私。父の富があればこれからは優雅な暮らしができる。もうセシルにいじめられなくてすむのだ。

メレッサは豪華な部屋をぐるっと見回した。これが私のものだ。

2・脱出

窓からは、もう、ルビル星は見えなくなっていて、かなり小さくなったルビルの太陽が見えていた。無数の星が輝いている。

今頃、ルビルでは戦争の最中なのだろうと思うと心が痛んだ。自分分は絶対に安全な宇宙船の中で、これまた、信じられないくらい豪華な部屋にいるのが後ろめたかった。親しい人たちの顔が浮かぶ、みんな無事ならいいのだが。

メレッサは不思議な思いにかられた。私がドラール皇帝の娘なら、父に頼んだらこの戦争をやめてくれるのではないだろうか。

「おかあさん、私、この戦争のこと父に頼んでみようと思うんだけど」

いい考えだと思ったが、母は静かに口を開いた。

「メレッサ、皇帝にあまり期待しない方がいいわ。彼は残忍で冷たい人なの。あなたに会うことすらしてくれないかもしれない」

会ってくれないかもしれないなんて予想していなかった。こんな豪華な宇宙船で迎えにきてくれたくらいだから、当然、父に会えると思っていた。

「でも、このすごい待遇はなに？」

「今の待遇はセダイヤワに着くまでだと考えていた方がいいわ。ミル艦長は皇帝があなたにどんな態度をとるか分からないので、念のため最高の待遇にしてあるの。もし、皇帝があなたに冷たくすれば、この待遇はいつぱんでなくなるわ」

この話しにはちょっとショックだった。姫君だと思って喜んでいたのに。

「それに、私は宮殿では身分が低い。すごい美人がいるということんでもない噂がたちあってね、それで、捕まって皇帝の所へ連れていかれたの。だから、私の身分は囚人か品物なの」

始めて母の過去を知った。自分が生まれた事情も、そんなひどい

話だったのか。それなら父は私のことを何とも思っていないかもしれない。

「皇帝にはあなたの他に7人子供いて、みんなそれぞれ母親が違う、だけどみんな側室なの。だから、あなたとは身分が違うと考えていた方がいいわ」

お姫様などと浮かれている場合じゃない、兄弟からひどい差別を受けるかもしれない。

「メレッサ。侍女たちに絶対に威張ってはだめよ。いつ、立場が逆転するかもしれないわ」

「わかった。今までと同じだと思えばいいのね」

姫君などと、そんなうまい話がそうそうあるわけがない。ドラール皇帝が母にひどいことをしたのなら、その子供にも同じだろう。でも、父には会いたかった。一目会えるだけでいい。遠くから顔を見ることができたらそれで満足しよう。

窓から見えるルビルの太陽はもう、ほかの星と区別ができないくらいに小さくなった。宇宙船は既に光速を越えて飛行している。

侍女がかいがいしく世話をしてくれる。今までメイドだったので人の世話をしていたのに、逆に世話をしてもらうなんて妙な気分だ。「お菓子」と言えば、

「はい、ただいま」と言って侍女がすぐにお菓子を持ってきてくれる。

お菓子を食べて手が汚れたら、困った顔をしているだけですぐに侍女が手ふきを持ってきてくれる。そして手まで拭いてくれる。まるで幼児に逆戻りしたみたいだ。

退屈なので、部屋の中を歩いてみた。やはり、侍女がついてくる。立派な鏡台があったので引き出しを開けてみたら、中にはたくさんの宝石が綺麗に並べて入れてあった。一つを取り出してみた。小指の先くらいの大きさのダイヤらしきものが数十個着いた首飾りだ。「着けてみられますか？」

ミルシーがやさしく聞く。

「これ、本物のダイヤなんですか？」

「もちろんです。姫君さまの宝石が、まさかガラス玉などということはありません」

多分、ものすごく高価な物に違いない。こんなもの触っていて何かあったら大事だ。メレッサは首飾りを丁寧に元に戻した。

「お気に召しませんか？」

ミルシーは心配そうだ。

「いえ、きず付けたりしたら大変だと思って」

「お好みが変わらなかったで、宝石商にいい物を持ってこさせたのですが……。でも、宮殿に着いたらすぐ宝石商を呼びますので、お好みの宝石をお求め下さい」

ミルシーは申し訳なさそうに言う。

今の言い方を聞いていると、この宝石は私のために準備したように聞こえる。

「この、宝石は私のものの？」

「もちろんです。宮殿に着いたときにそれなりの身なりが必要です。準備してきました」

この宝石が私のもの、驚くほかなかった。

「姫君さま、衣装部屋をご覧くださいか？ ドレスをたくさん準備してきております」

ミルシーはうれしそうにメレッサを誘う。彼女について衣装部屋に入ると、そこにはものすごい数のドレスが掛けてあった。

「これが全部、姫君さまのドレスです。サイズなどが分かりませんでしたので各種準備しております」

圧倒されて呆然としていた。

「よろしかったら、お召しになつてはいかがですか」

ミルシーはメレッサが着ているよれよれの普段着を申し訳なさそうに見た。メレッサはこの服で仕事をしていたし、元々こんな服しか持っていなかった。

「ルニーさまの分も準備してきております」

ミルシーは母にもつと奥の方を案内した。母はメレッサよりもつとひどい物を着ていた。

着替をした。普段着として準備されていたものだが、それでもすごい豪華な服だ。

肩が広く開いていてスカートも広がっているので着こなしが難しい、どこかしっくりこない。しかし、母は当たり前のように着こなしていた。母にはこの服がよく似合っていてハットするほど高貴な感じがする。それに、今まで気がつかなかったが、母はものすごい美人だ。綺麗な服を着るとそれが際立つ。

「これで、やっと姫君らしくなれましたね」

ミルシーは自分のことのように喜んでくれる。

「宝石も着けてみませんか？」

ミルシーは宝石をたくさん取り出してきた。宝石はよく分からないがどれもすごいものばかりの様だ。一つを手にとってみた。

「これ、いくらするんですか？」

ミルシーは首をふる。

「姫君さまは、値段など気になさる必要はありません。着けてみませんか？」

貧乏人としては値段が気になるがミルシーも知らないみたいだった。

宝石を着けると金持ちになった実感が湧いてきた。この宝石が全部私のものなのだ。いや、こんなものなどいくらでも買えるくらいの大金持ちなのだ。父にどんな風に扱われるかが少し不安だったが、今までよりはましな生活ができそうだった。

3・宇宙船（前書き）

すみません、書き直していたのでアップが遅くなりました。
徐々に書き進めていきますので、よろしく願います。

3・宇宙船

宇宙船の中で次の日を迎えた。

窓からは無数の星が見えていた。宇宙船は光速の1億倍のスピードで飛んでいるので、星が流れているように見える。宇宙船は過去に向かって進むことによって相対論に矛盾せずに光速を超えることができる。

メレッサは宇宙船に乗ったのは始めてだった。タラントさん一家は年に一回は宇宙旅行に出かけていたがメレッサ親子が旅行に行けるはずはなかった。こんどの宇宙船の旅は超豪華個室での宇宙旅行と同じなので、メレッサはしゃいでいた。

ミル艦長が宇宙船の中を案内してくれた。メレッサの後を何人もの侍女と士官がついてくる。操縦室に案内してくれた。真つ暗な広大な部屋で上と前面が透明になっていて、星々が正面から向かってくるように流れていく。

メレッサが行くと何人かの士官がやって来て彼女に敬礼をした。

「姫君、ここが操縦室です」

ここで一番偉いらしい士官が説明してくれる。一般の人は通常は操縦室などに入れないが姫君はすべて特別扱いらしい。

「正面に見えている星の集団がプレアデス星団です。セダイヤワ星はその中にあります」

彼は説明してくれたが、どれがプレアデス星団かわからない、ともかく、わかったふりをしてうなずいた。

「ルビル星はどこなんですか？」

何か質問しないとまずい雰囲気なので、聞いてみた。

彼はちよつと困っている。

「ルビルは後方なので、操縦室からは見えないのですが、ちよつとお待ち下さい」

彼は操舵手になにやら指示している。操舵手がハンドルを動かす

と、窓の外の星が流れる方向が変わり始めた。

「今、宇宙船を180度回転させていますので、すぐに、真後ろが見えるようになります」

宇宙船がぐるっと回って、正面の一点に向かって星が流れて行くようになった。宇宙船は後ろ向きに飛んでいるような形になっている。

彼は窓の外を指差しながら。

「あの中心付近にルビル星があります。残念ながら、かなりの距離なのでルビルは見えません」

「そうですか」

メレッサが何か言うと、とんでもなく大変な事をやってくれる。

恐縮するばかりだった。

彼は計器盤を見せてくれた。

「本艦は今、光速の1億倍の速度で飛行中です。過去に向かっては時の流れる早さの99.99%で時間を遡っています」

彼はさも当然と言うように難しい説明をする。メレッサは学校でこんな話を習ったことがあったがまったくわからなかった。

操縦室のすぐ後ろにはブリーフィングルームがあった。案内されて入ると30人くらいの人が座ってしていたが、メレッサを見ると全員が一斉に立ち上がった。

全員がメレッサを見ている。どうしたらいいか分からなくて戸惑ってしまう。

「姫君、いきなりで申し訳ありませんが、ここにこの艦の主だった士官を集めております。姫君に拝謁できるような機会はまず一生ないと思われる者ばかりです。ぜひお言葉をかけていただけないでしょうか？」

ビックリである。この私に『拝謁する』、この私が「お言葉をかける」、など、とんでもない話だ。姫君として祭り上げられているが私はそんなに偉くない。それに、父から冷たくあしらわれたら後が怖い。

「あの、私はメイドだったんです。そんなに偉くありません」

小さな声でミル艦長に言った。

「謙遜なさらないで下さい。皇帝のお子様なのですから、通常でしたら私などこうやってお顔を拝見することすら出来ないようなお方です。ぜひ、一言お願いします」

ミル艦長はメレッサを前に押し出した。

「あの、いえ、私はそんなんじゃないありません」

みんなの前に立ってしまった。全員が自分を見ているので、何か言わない訳にはいかない様になってきた。

母を見た。母も何か話せと言うようにわらって頷いている。ひとことだと思つて勝手な事を言う。

すこしもじもじしていたが、思い切つて口を開いた。

「あの、みなさん。頑張つて下さい」

なんとか言つたが、何を頑張るのかなんて考えていなかった。全員が敬礼で返礼をした。

「姫君、ありがとうございます」

ミル艦長はうれしいそうに頭を下げた。

メレッサはやつと部屋の外に逃れることができた。自分がそんなにすごい人間だなんてとても信じられない。姫君として祭り上げられると、その反動が心配になってくる。こんなことがいつまでも続くとは思えなかった。

4・宮殿

宇宙船ではお姫様としての生活が続いた。侍女達が何から何までやってくれる。それにそんな生活にも少し慣れた。コツは何もしないことだ。全部侍女がやってくれる。そのうち、ご飯も食べさせてもらうことになりそうだった。

しかし、セダイヤワが近づくにつれて不安が広がってきた。父は会わなければならぬ。父は会ってくれるだろうか。それに兄弟が自分のほかに7人いるという。兄弟達と会えるのだろうか。

母に聞いてもまったく予測がつかないらしい。

「最悪の事を考えていた方がいいわ」

母は悲しそうに言う。

「皇帝とどんなことがあったの？」

「ひどいこと。だから私は耐えきれずに逃げ出したの。捕まったら何されるか分からない」

そんな事情なのに私を連れてきてくれたのだ。

「殺されるの？」

母はわらった。

「あなたを連れてきたから、大丈夫よ」

本当に大丈夫なのだろうか。母の身に何かあったら耐えられない。

「大丈夫よね？」

「殺されることはないと思うけど、何かの処罰は受けるわね」

「処罰？」

「そう、牢屋に入るとかね」

母はそれを覚悟の上で、私を助けようとしてくれているのだ。

「お母さん、そんな事なら、ルビルに残った方がよかったのに」

「ルビルは今頃戦場よ。戦場がどんなものかあなた知らないでしょう。生き残るためにはこの方法しかなかったの」

「でも、お母さん、牢屋なんて、いや」

「我慢しなさい。生きていればそのうち会えるわ」

メレッサは母の首に抱きついた。

「これが戦争なの。あなたを助けるにはこれしか方法がなかったの。わかって」

不安が広がってきた。母が牢屋に入れられる、あの辛かったメイドの生活が夢のように思えるくらいひどい所に違いない。母はそんな所で耐えなければならぬのだ。それも自分を助けるために、分かっているここに連れてきてくれた。母に感謝しても感謝してもしたりない。

メレッサは、しばらく母に抱きついていて。明日、セダイヤワに着く。母に抱きつけるのも今日までかもしれない。

「皇帝の事を少し教えて、会う前に知っておきたいの」

母は遠くを見るように考えている。悪い思い出しかないのだろう。

「冷酷な人だから注意して。逆らうようなことを言ちゃだめ」

「わかった」

「何かを聞かれるまで、話してもだめ。彼が話すのを聞いていて、聞かれたら返事するの」

「わかった」

「つらいことがあっても、我慢してじっと耐えるの、決して決して彼に何かを要求してはだめよ。たとえ誰かが殺されるとわかってるね」

母は涙声になった。それ以上先が言えなかった。殺されるって母のことだろうか。

次の日、宇宙船はセダイヤワに到着した。

眼下に、ドラールの宮殿が見えてきた。広大な庭園があつて、その中にたくさんの建物が建っている。庭園は森や湖があつて川も流れている。度肝を抜くような広大さだ。高度が下がるにつれて建物の一つ一つが巨大な建物だと分かってきた。それぞれが宮殿みたいな豪華な建物だ。

宇宙船はその庭園のやや端の方にある、他の建物に比べるとやや小柄な建物に向かって降りていく。その建物は小柄といっても宮殿のような建物で他の建物に比べると小さいのであって充分に大きな建物だった。

建物の周囲には広大な庭があるが、宇宙船はその建物の前の庭に降りた。降りたと言っても地上から1mくらいの所に浮いていて庭を痛めないようにしている。

ミル艦長に案内されて宇宙船を降りた。玄関には大勢の人が整列して立っている。

先頭に立って歩いていくと、みんな頭を下げしてくれる。

「この人たちは？」

ミルシーに聞いてみた。

「下男や下女たちです」

すごい、100人くらいいる。まさか、この人たちが私の世話をするためにいるんだろうか。

「何をする人ですか？」

ミルシーが驚いてメレッサを見る。

「もちろん、このお屋敷で働くためです」

なるほど、屋敷全体での使用人なのだ。少し安心した。建物の中に入り、廊下を進んで広い部屋に案内された。

「申し訳ありません。ここが姫君様のお部屋です」

ミルシーが申し訳なさそうに言う。

この部屋が私の部屋。天井が高く、広い窓がある。綺麗なカーテンがかかっていて、信じられないような立派な部屋だった。しかし、ミルシーの態度が気になった。なにか勘違いがあるのかもしれない。「ミルシー、どうしたの。ここは私の部屋なんですよ？」

「いえ、この建物全体が姫君様の屋敷になります」

建物全体が私の家！驚きだ。この部屋だけでなく他の部屋も使えるのだ。では、さっきにの人たちは、やはり私の世話をするためにいるのだ。100人も。

でも、ミルシーは気の毒そうに頭を下げている。

「なにか、問題でもあるの？」

「この建物はずいぶんと貧弱でございます」

「これで、貧弱？」

ルビルで住んでいた家を見せてやりたかった。

「ご兄弟の屋敷はもつと大きくて立派なものでございます。ここはかなり見劣りが致します」

なるほど、兄弟と比較すると貧弱と言うのか。でも、それは最初から分かっていたことだ。ちよど、この家が兄弟との立場の違いを表しているのだらう、自分は兄弟より一段格下なのだ。

「大丈夫よ。すごい部屋」

「今、係の者に事情を問いたしております。急な話で屋敷の空きがなかったと申しておりますが、このような粗末な屋敷ではメレッサ姫に対する重大な侮辱だと、きつく抗議しております」

「そんな抗議をする必要はないわ。この家がちょうど合っていると思う」

むしろ、この程度の格差でよかった。もっとひどい可能性だってあったのだ。

それより、いつ父に会えるのか知りたかった。

「父に会えるのはいつになりそうなの？」

「今、面会を申し入れています。多分、そのうちに呼び出しがあると思います」

父とはすぐに会える。でもあまり期待しない方がいい、冷たくあしらわれるだけかもしれない。いや、会ってくれないかもしれない。思っていたのだ。会ってくれるならそれだけでいい。

屋敷の中を少し歩いてみた。広い部屋がたくさんあって、その一部屋一部屋がどれもすごい。豪華な家具がおいてあり、大きな絵画が掛けてある。宇宙船の部屋が豪華だと思っていたが、あの部屋が粗末だと感じてしまう。

窓からは庭が見えていて、植え込みが綺麗に手入れされているし、

気持ち良さそうな吾妻屋がある。

豪華な椅子があつたので座っていたら、下女がお茶とお菓子を持ってきてくれた。メレッサが母とどこかに座ったら、必ずお茶を出してくれる。このような待遇に少しは慣れたが、世話をする人達が大変だろうなと思うと、落ち着かなかつた。

5・父との面会

父からの呼び出しを待っていた。お昼になり夕方近くになったが呼び出しはなかった。長年会っていない娘が戻ってきててもそれほど関心がないらしい。ひよつとしたら今日は会えないかもしれない。

やきもきしていたら、ミルシーが駆け込んで来た。

「お父上からお呼び出しです」

やっとだ。やっぱりうれしかった。

宮殿の中を移動するための小型の飛行車に乗って、皇帝の宮殿に向かった。正面に巨大な建物が見えてきた。飛行車でそのまま入って行くが、ものすごく巨大な建物だ。

飛行車を降り、真っ赤な絨毯が敷いてある通路を進んでいく。大きな部屋に入ると彼女を待っていた人がいて、その人に案内されてさらに奥へ入っていく。いったいどこにいるのかわからなくなったころ、やっと最後の部屋の前に着いた。

ここで父が待っているという。

メレッサは深呼吸をした。いよいよ、夢にまでみた父に会うのだ。どんな人でもいい。どんなに冷たくされてもいい。会えばそれでいい。メレッサは覚悟を決めた。

母と二人で部屋に入った。

正面に大きな机があつて、男がその机の前に座っていた。

がっしりした身体つきで背が高く精悍な顔をしていた。彼はじつとメレッサを見つめているが、その目は意外に穏やかだった。

「メレッサ？」

静かな声だった。

メレッサは男の方に進んだ。この人がおとうさん。

長年夢に見てきた瞬間が今なのだ。

「お前が、メレッサか？」

父はメレッサをじつと見ている。

メレッサに再会できて喜んでくれているのだろうか。

「はい」

『おとうさん』と言いたかったが、その言葉は口から出てこなかった。

父はそういう感傷的な事を受け入れてくれそうには見えなかった。「ずいぶん探した。どこにもいなくて、もう死んだと思っていた。見つかってよかった」

意外だった、父が自分を探していたのか。もつとにこやかな顔をしたかったが、父の態度はどこか近寄りがたい所があった。

「どんな生活をしていたんだ？」

問い詰めるような感じの質問だった。今まで、何か悪いことでもしていたのではないかといった感じだった。

「母が住み込みでメイドをしていて、その家に住んでいました」

「そうか」

父の顔が急に曇った、なにか気に障ることでも言ったのだろうか。

父は母を見た。

「なぜ逃げた？」

急に怖い声で聞く。

「すみません」

母は小さな声で答えた。謝るしか方法がない。きのうの母の話を思い出した。できるだけ穏便に済むといいのだが。

「俺に逆らって、ただで済むと思っているのか」

「すみません。もう決して逃げません」

母は必死で謝っている。怒らせたら殺されるかもしれない。

父は椅子から荒々しく立ち上がった。

「俺の娘にメイドのまねなんかさせやがって、今度逃げたら殺すぞ」「はい」

母は小さくなっている。でも、よかった。今回は殺さないということだ。

父はイラついて机にペンを放り投げた。

「もういい、いけ」

母は頭を下げると出て行こうとする。母について行くつもりで、メレッサも慌てて頭を下げた。

「お前は残ってろ」

父に怒鳴られた。怖かった。一人で父の所に取り残されてしまう。母は部屋をでていった。メレッサは恐怖におののく目で父を見ていた。

「怖がらなくていい」

と怖い声で言う。

「ここにいれば何不自由のない生活ができたものを」

父はそうだろうと言うようにメレッサを見た。おもわずうなづいてしまう。

「メレッサ、今までの生活は忘れる。お前は俺の娘だ。そのつもりでいろ」

「はい」

意味がよく分からなかったが、はいと答えるしかなかった。

「お姫様だ、お前にできないことは何一つない。わかったな」

「はい」

やっぱり意味がわからない。

父は少し落ち着いてきたようだった。

「今夜、子供たちと食事をする。お前の歓迎会だ。いいな」
「はい」

今日、兄弟と会えるのらしい。会ってみたかった。メレッサは幼いときから母と二人で暮らしていたから兄弟に憧れていた。それが兄弟が7人もいるのだ。どんな人たちなんだろう。

父はいらいらした様で椅子に座った。

「わかったら、もう行け。俺は忙しいんだ」

父はメレッサと合えてもそれほどうれしくないみたいだった。すぐにメレッサから興味を失い仕事を始めた。

メレッサは頭を下げるとすぐに部屋を出た。父に会えてうれしい

というより、やっと父から開放されたといった感じだった。

父が何をいらついているのか分からなかったが、普段から機嫌の悪い人らしい。そんな風だと人が寄り付かなくなるから本人が一番不幸なのだ。

6・食事会

メレッサは母と一緒に飛行車で自分の屋敷に向かった。

落ち着いてくると、メレッサはそれなりに満足していた。感激の対面ではなかったが、会ってくれたし、やさしい言葉もかけてくれた、これ以上は望めないだろう。それに、子供の頃から考えていた父との対面とほとんど同じだった。父と会えることが出来ても父が優しくしてくれるはずがないと考えていた。期待しすぎると辛くなってしまうからだった。

それに母が無事だったのがうれしかった。

「お母さん、よかったね。これで無罪放免なの？」

「たぶんね、皇帝の機嫌が良くてよかったわ」

「あれで、機嫌がいい方なの」

父の言葉が気になっていた。メレッサが貧しい暮らしをしていたことを怒っていたように聞こえたからだ。

「おとうさんは、私の事をどう思ったと思う？」

「あなたの事を心配していたみたいね。ちょっと意外だった」

見かけより優しいのかもしれない。私の事がどうでもよければ迎えないかよこさないだろう。

自分の部屋に戻ってきた。

今夜の食事会の連絡はミルシーに届いていて、急いで準備が始まった。

「ご兄弟に負けないように着飾ってください」

侍女には不思議な対抗意識があるらしい、ほかの兄弟に負けないようにとミルシーは頑張っている。すごいドレスを着て、これまた大粒のダイヤの首飾りやらイヤリングを着けた。

ミルシーは私が他の兄弟と対等と思っているみたいだ。私が他の兄弟から差別されたらミルシーがっかりするだろうなと思うと、

そちらの方が辛かった。

少し悪趣味なくらいたくさんの宝石を身に着けて、すごいドレスを着てしずすと歩く。

準備ができると宮殿の食堂に向かった。

食堂は豪華な部屋で、正面にテーブルがありその両側にテーブルが並んであった。大勢の給仕が壁際に立っている。

メレッサが行くとさっと給仕がやってきて左側の2番目の椅子に案内した。メレッサは16才、兄弟の中で4番目だった。すでに何人か座っていて、メレッサの左にも女の子が座っていた。握りこぶしくらいの大きさのダイヤを首にかけている。

「あたし、ルシール。よろしくね」

気の強そうな子だ、メレッサは侍女に教えてもらった事を素早く思い出す、ルシールは18才、兄弟の中で2番目の子だった。

「メレッサです。よろしくお願いします」

「俺は、ジョル。よろしくな」

向かいの席の左端の男の子が声をかけた。ジョルは19才で一番上だ。そうか、この席順は年齢の順になっているんだ。だったらほかの兄弟と対等なのだろうか。

「メレッサです。よろしくお願いします」

「あたしは、ミリー。今まであたしがそこだったんだけど、あんたが割り込んだんで、こっちへ下がっちゃった」

みんな笑った。冗談みたいだ。

「割り込んでごめんなさい。メレッサです」

また笑いが起きた。自分にこんなに兄弟がいたなんて、しかもみんなやさしそうだ。

次々と集まって来て賑やかになってきた。みんなと話をしたが、みんな優しくていい人たちばかりだ、兄弟ってこんなにいいものか。しかし、雑談に混じって驚く話が聞こえてきた。

「ジェル兄さん。この前の生意気な下女はどうした？」

横にいるルシールが聞く。

「ああ、殺したよ。鞭打ちでね」

平然と言う、思わず持っていたコップを落としそうになった。
ルシールがメレッサを肘でつついた。

「あんた、下女とか持つのは始めて？」

「はい」

ルシールは世話好きみたいだ。

「だったら、まず一人殺すの一番トロそうなやつをね。そしたら目の色を変えて仕えてくれるよ」

メレッサはあいた口がふさがらなかった。人の命を何だと思っ
ているの。

「驚いているみたいね。でも、やってごらん絶対に効果があるって」
「みんな、すごくよくしてくれます」

ここへ来る時の宇宙船の侍女達のことか頭に浮かんだ。メレッサ
が眠っている間も起きて待機している侍女がいた。

「ならいいけどね」

ルシールは冷たく言った。

右隣は弟だった。

「あたし、メレッサ。あなたは？」

「僕は、ニラス」

「歳は？」

「14」

彼はほかの兄弟に比べ寂しそうに見えた。彼はまったく雑談に参
加しようとしなない。

「あたし、今までメイドやっていたの。メイドってわかる？」

無理に話しかけてみた。

彼は首を振る。

「そう、ここで言う下女かな。掃除したり、お茶を入れたり、大変
だった」

「そんなの、下女にさせればいいじゃん」

そうか、環境があまりに違うから理解出来ないのだ。

「いえ、そうじゃなくて、私自身が下女なの。だから下女にさせるわけにいかないの」

彼の顔を見たが、理解していないみたいだった。

突然、静かになった。あんなに騒がしかったのに、ピタッと話が止まった。

父が入ってきた。

みんな父が怖いのだ。みんな姿勢を正し、じっと父を見ている。父はなぜか機嫌が悪そうな顔をしている。なにに腹を立てているのだろう。

「ロディー、教練はやったか？」

いきなり怒鳴りつける。ロディーは7番目で10歳。みんなロディーを見た。

「い、いえ、まだです。すぐやります」

ロディーは大声で叫んぶ。

メレッサはすくみ上がってしまった。こんなの怖すぎる。家族での食事がこれじゃあ、たまったもんじゃない。

父はガタンと音を立てて椅子に座った。みんなを睨みつける、父がこつちを見た、目を合わさないようにそれとなく目をそらす。

「メレッサ…」

「はい」

メレッサは飛び上がってしまった。

父は、勘違するなどでも言うようにじろつとメレッサを見た。

「メレッサが、やっと見つかって、今日からここで暮らすことになった」

父が言う。なんだ、あたしを呼んだんじゃなかったのか。

「メレッサが見つからないので、ずいぶんと心配したんだが、やっと見つかった。これで一安心だ」

父がメレッサを見た。

「メレッサ」

「はい」

今度は間違いなく呼ばれた。

「お前には、苦勞をかけたな。この埋め合わせはするからな」
意外に優しい言葉だ。父は本当は優しいのかも。

食事が始まった、が、誰も一言も話さない。

「ジョル。アミタテはどうしてる」

いきなり、怖い声で聞く。

「今、資料を取り寄せています、調査が済んだら報告します」
ジョルは落ち着いて答えた。さすが長男だ。あの父に普通に話せるとは。

「ルシール。なんだ、そのダイヤは。みつともない、はずせ」

ルシールがつけている大きすぎるダイヤの事を言っているのだ。
確かに大きすぎてみつともない。

「はい」

ルシールが嫌そうにしていると。

「ルシール」

父が怖い声で一喝した。

「はい」

ルシールはダイヤを握ると紐を引きちぎり、それを後ろへほおり
投げた。ルシールは父に反抗的みたいだ。

父はさらにみんなを見回す。次は誰が犠牲になるのか、みんな戦
々恐々だ。

「メレッサ！」

「はい」

メレッサはビクツとして答えた。

「もっと胸をはれ」

「はい」

メレッサは肩を引いた。緊張で生きた心地がしない。

「お前も宝石のつけすぎだ。少し外せ」

「はい」

父に逆らうなんて考えられない、父に言われたのに嫌そうにしていたルシールが豪傑に見えた。ネックレスを一つ外そうとしていると。

「今日はいいい、次から気をつける」

「はい」

ルシール、メレッサときたので、席の順番なら次はニラスだ。父はニラスを見る。

「ニラス」

隣でニラスがビクツとしたのがわかった。

「おまえ14になったんだな。よし、星をやるう。どこがいい」

父は急に穏やかな声になった。ニラスは怒られるわけではないみたいだ。星をやるって、なんだろう。

「ジェレンデをお願いします」

ニラスが答えた。ジェレンデは聞いたことがあった。ルビルの前にドラールに占領された星だ。まさか、星をまるごともらうのか。

「よし、ジェレンデはお前のものだ」

父が言う。

「ニラス、よかったな」

ジョルがニラスを力づけた。場の空気が少し和らいだ。

ルシールがメレッサを肘で突つついた。

「あんたの年なら、3つももらえるよ」

「星をもらってるの？」

メレッサは小さな声で聞いてみた。

「そう、みんなもらってるよ」

星をもらう、途方もない話だ。でも、もし、もらえるならルビルが欲しいかった。ルビルをもらえばルビルの戦争を止めさせることができるかもしれない。しかし、自分はみんなより格下だから星などもらえるわけがない。

「メレッサ。お前は16だな」

突然、父がメレッサを呼んだ。

「星を3つやる。どこが欲しい？」

自分にもくれるらしい。胸がときどきしてきた。ほかの兄弟と同じに扱ってくれるのがうれしかった。

「ルビル」

と言ってみた。

「ルビルはまだ占領が終わっていない」

「戦争を終わらせたいんです」

必死で言った。興奮して手が震えた。

「今、戦争中だ、どうする気だ」

「ルビルでの犠牲を少しでも減らしたいんです」

「占領を任せて欲しいということか？」

そんな大それた考えじゃなかった。

「占領は大変だ、お前には荷が重い」

「何とか犠牲を減らせませんか？」

ルビルが自分のものになれば、どうにかなるような気がした。

父は考えている。

「わかった。ルビル攻撃軍をお前にやろう。占領をやってみろ、お前に任せる。占領できたらルビルはお前のものだ」

占領なんかするつもりはない。早く攻撃を止めさせないとみんながどんどん死んでいる。

「占領は大変だぞ、情けをかけてはいかん、どんどん殺すんだ。100万人くらい殺せば抵抗しなくなる」

100万人！ メレッサは思わず首をふった。

「まあ、心配するな、お前が失敗したら俺が占領してやる。ルビルはお前のものだ」

ルビルの占領をまかせてもらえそうだ。ルビルを攻撃している軍隊が私のものになる。私が攻撃の中止を命令すれば攻撃が止まるのだ。すぐにでも中止しなくては、後のことはそれから考えればいい。「ほかにどこが欲しい？」

父が聞く。

どこと聞かれたもまったくわからない。黙っていたら。

「わかった。ルビルのほかに、タン、ミダ力をやろう」

そう言われても、どこか分らない、名前すら覚えられなかった。

「よかったじゃない」

ルシールが喜んでくれる。

ルビルをもらえたら、あとの星はどうでもよかった。ルビルでの戦争を止められる。自分の権限で攻撃を止めることができる。

夕食はそのまま進んだ。誰もほとんど話をしない。時々、気まぐれに父が怒鳴る。

「メレッサ。胸をはれ！」

怒鳴られた。食事をしているからどうしても下向きになるだけなのだが……。怒鳴られても、最初の時ほど驚かなくなった。兄弟たちも、年下の子は父に怯えているが、年上の子は適当にやり過ごしているだけだ。みんな怒鳴る父を嫌っているようだった。

しかし、メレッサは父が自分の事を怒鳴ってくれるのがうれしいとさえ感じ始めていた。今までは怒鳴ってくれる人すらいなかったのだ。

7・攻撃停止命令

食事が終わって自分の屋敷に戻ってきた。

侍女達がドレスの着替えを手伝ってくれる。本当にみんなよくしてくれる。こんな人を殺すなど、そんな恐ろしい考えがどこから浮かんでくるのだろう。

父は怖かったが、他の兄弟と公平に扱ってくれたのがうれしかった。

お姫様はここに着くまでと思っていたのが、これからお姫様でいられる。この大きな屋敷が自分の屋敷なのだ。屋敷どころか、星を3個もらった。その星がまるごと全部自分の物なのだ。

「どうだった？」

母が聞く。

「怖い人だったけど、そんなに怖くなかった」

母はわらった。

「どっち、怖かったの」

正直よくわからない。怖いのは怖いのだが、でもその中に愛情を感じる。

ところで大ニユースがある。

「ルビルとルビルを攻撃している軍隊をもらった」

母には意味がわからないらしい。

「私がルビルへの攻撃止められるのよ」

「なに、バカな事を言っているの」

「お父さんから、軍隊をもらったの、ルビルを攻撃している軍隊が私のものなの」

「皇帝がそんなものをくれるわけないでしょ」

考えてみればすごい話だ。玩具じゃあるまいし、そんなものをよくれたものだ。

「ルビルだけじゃない。あと2つ星をもらった」

メレッサは自慢げに言った。母も喜んでくれると思ったのだが、母の表情が変わった。

「殺りくの限りを尽くして奪い取った星をもらったのね」

母にぶん殴られたように感じた。そんな風には考えていなかった。星なんかもらちゃだめ。返しなさい」

この星はルビルと同じ様に攻撃して占領した星だ。戦争の時にはすごい犠牲が出たに違いない。そんな星をもらって喜んではいけないのだろうか。しかし、心のどこかで返したくなかった。

メレッサが黙っていると。

「わかってるの、返すのよ」

メレッサは無然として母から目をそらした。父がほかの兄弟と公平になるようにとくれた星だ。これは自分がほかの兄弟と対等であることの証のように感じた。確かにひどい事をして奪い取った星には違いはない。しかし、それは終わったことで、どうせ同じことなのだ。

「返しなさい。星を持つことの意味が分かっているの？」

メレッサは黙ってじっとしていた。

「あなたに、ここの悪に染まってほしくないの。あなたのお父さんは鬼のような人よ」

父のことを鬼と言われて抵抗を感じた。もともと、宇宙は十ヶ国ぐらいに分かれて戦争をしていたのだ。それを父が統一しようとしているだけじゃない。

侍女がやってきた。

「コリンス参謀がお見えです」

ちようよかった。母との話はこれで終わらせたかった。

「誰なの？」

「ルビル攻撃軍の参謀をされているそうです」

私がもらったはずの軍隊だ。父がさっそく手配してくれたのだ。「隣の部屋でお待ちです」

隣の部屋は正面に一段高くなった所があつて、そこに立派な椅子が置いてある。その椅子の左右にも少し小さな椅子があつた。

立派な軍服を着た3人の男が立っていたが、メレッサが行くと3人は直立で敬礼をした。

ミルシーが中央の椅子に座るように手で合図する。姫君なので、そこに座るべきなのだろうが、まだ、慣れない。こんな所に座つていいんだろつかと思ひながら座つた。

「私は、ルビル攻撃軍の参謀を努めています、コリンスです」

真ん中にいた男が口を開いた。彼は端整な顔立ちをした背の高い男で身体にぴつたり軍服を着ていた。

本当にこの軍隊が私の物になったのだ。ありえないようなことだけど、星をまるごと子供に与える父なら軍隊だってくれるかもしれない。でも、実際にその軍隊の人が目の前に現れるとどうしたらいいかわからない。母だけが頼りだった。母も一緒にいてもらった方がいい。

「おかあさん、ここに座つて」

メレッサは自分の横にある椅子に手を伸ばした。

しかし、母はあわてている。

「姫君さま。そこは私がすわれる場所ではありません」

メレッサは母が自分のことを『姫君さま』と言つたのに驚いた。なにか、どんどん母と距離ができていく。戸惑っていたが、コリンスが口を開いた。

「皇帝から、我が軍は姫君様の下に編入されたと伺いました。しかも、占領作戦の変更もあるとのこと」

彼は事務的な口調で話し表情を変えない。

「ああ、そうなんです。すぐ攻撃を中止してください」

どう言つたらいいのか、分からなかった。

コリンスはしばらく黙っていた、苦笑いしているようにも見えた。「姫君さま、もう少し全体の方針を説明していただけませんでしょうか」

「ルビルでは、今でも人が殺されているのよ。それをやめて欲しいの」

「ルビルでの占領作戦の事をおっしゃっているのですね」

「そうです、それをすぐにやめて欲しいんです」

「やめるのは無理ですが、犠牲者をもつと減らすことはできます」

「すこし話を通してきたみたいだ。犠牲者が減らせるなら減らして欲しい。」

「それを、やってください」

「それには現在の占領作戦を見直す必要があります。占領計画を作り直すことになります」

「のんびりした話だ。いま人が死んでいると言っのに。」

「今すぐ、なんとかする方法はないの？」

「姫君の権限で攻撃の一時停止を命じることができます。しかし、作戦に大きな支障をきたすことになります」

「では、すぐ停止して」

メレッサはきつい口調で言った。作戦がどうなってもかまわない。分かりましたと言うようにコリンスは丁寧に頭を下げた。バカな小娘にとんでもない難題を押し付けられてしまった。と思っているようだった。

彼は部下に何か指示している。やがて部下が持っていたカバンのようなものから紙が出てきた。

「攻撃一時停止の命令書です。サインをお願いします」

コリンスの部下がメレッサの前の机に命令書とペンを置いた。

命令書！ 体が震えた。自分にこんな権限があるなんて今でも信じられない。

命令書にサインをした。部下が命令書をコリンスの所へ持っていた。つた。

コリンスは頭を下げた。

「では、直ちに手配いたします。それと、新しい占領計画書は徹夜で作成いたしますので、明日の朝にはお持ちできます」

新しい計画？ 犠牲者を少なくできる占領方法のことか、攻撃の停止を今命令したのだから、もう必要ない。メレッサは単純にそう思っていた。

メレッサの考えを察したのか。

「姫君、占領はやる必要があります。占領の放棄は皇帝が納得されないと思います」

確かにそうだ。父からは占領をやってみろと言われて軍隊をもらったのだから、占領しないのはまずいかもしれない。それに占領できなかった父がやると言っていた。父がやったら今までと同じ殺りくが起きる。

「その計画だと、犠牲者を減らせるんですか？」

「はい、劇的に減らせると思います」

コリンスは自信があるみたいだ。彼はにこやかにメレッサをみている。

できれば戦争を止めて、このまま終わりにしたいが、それだと父が納得しない。しかし、まさか自分が占領をやるなんてそんなこと出来るわけがない。

「明日の朝、お時間を頂けますでしょうか？」

迷っていると分かったのか、コリンスが声をかけてくれた。そう、ともかく明日の朝コリンスの話を聞いてみよう。

「わかりました」

小さな声で答えた。コリンスは安心したように微笑む。彼はメレッサのわがママをなんとかうまく収めたいと思っているようだ。

「失礼ながら、意見を申し上げてよろしいでしょうか？」

コリンスが言う、バカな小娘のすることに言いたい事があるのだろう。内心、私をぶん殴りたいと思っているかもしれない。セシルも何も知らないのに偉そうにしていたから、いつかぶん殴ってやると思っていた。

「なんですか？」

ぶん殴られるのは困るが、言いたいことがあるならいくら言っ

もかまわない。バカにされるのはセシルで慣れている。

「姫君さまのお考えは正しいと思います。現在の占領方法はひどい殺りくです。私もこのような作戦に疑問を持っておりました。メレッサ姫のような方がおいでになるとは信じられません。ぜひ、新しい占領方法でやらせていただきたく思います」

ひと文句言われるのかと思ったら、予想外の意見だった。ドラール軍の中にもコリンスのような人がいるんだ。

コリンスの話は終わったらしく、彼はメレッサの指示をじっと待っている。

メレッサはルビルがどうなったか知りたかった。あれから4日たっている。

「ルビルはどうなっていますか？」

「ルビル防衛軍は一撃で粉砕しました。現在は敗残部隊の掃討をやっております」

やはりルビル防衛軍は壊滅した。防衛軍に入っていた人たちの顔が浮かんだ。タラント家の長男ジョンも防衛軍に入っていた。どうなっただろう。

「戦死者はどのくらいなんですか？」

「50名弱と聞いております」

壊滅したのに戦死者が50人？ いや、これはドラール軍の戦死者のことだ。どうしてもルビル軍が味方だと考えてしまう。ここではドラール軍が味方なのだ。いや、味方どこるか自分の軍隊だ。自分の軍隊を敵だと思ってしまう。

「ルビル側の戦死者の数はわかっていません」

メレッサの気持ちを察したのか、コリンスが付け加えた。

どのくらい死んだのだろう。多分ジョンも死んだかもしれない。コリンスはじっと立っている。勝手に退室するわけにいかないのだ。

「もう、帰ってもいいですよ」

メレッサは憂鬱な気持ちで言った。

「計画書は明日の朝お持ちします」
コリンスは敬礼すると足早に出ていった。

8・提督

テラスからは夜の庭が見えていた。照明がついていてとても綺麗だった。テラスの椅子に座って母と二人で星空を眺めていた。

「ルビルはどうなっているかな？」

心配だった。

「この前の時は死体の山だった」

母がため息のように言う。

「絶対に戦争を止めなくちゃ」

「あなた、本当に軍隊をもらったのね」

「おとうさんから、ルビル攻撃軍をもらったから、ルビルを攻めている軍隊を私の思い通りに動かせるわ」

「信じられない。皇帝がそんな事を、あなたまだ16よ。それで軍隊を……」

「だから、戦争を止めるの、絶対に止めて見せる」

ルビルでは今頃、戦闘が止まったかもしれない。

「私の停戦命令、届いているかな」

戦闘がやんでみんなホットしているかもしれない。

「メレッサ、あなたはルビルの占領を自分でやるつもりなの？」

母は心配そうに聞くが、メレッサにも、どうしたらいいかわからない。

「やはり、占領なんて無理よ。皇帝に返した方がいいと思うわ」

ルビルを助けるために、無理を言って父からもらった軍隊だ。これを返すと、元に戻るだけだ。

「でも、このままだと大勢殺されるわ、私が軍隊を持っていればそれを防げるかもしれない」

母も悩んでいる。

「あす、コリンズの計画を聞いてみましょう。コリンズが何か考えているかもしれない」

母にまかせておけば、すべてうまくいく。この軍隊は母にバトンタッチしよう。メレッサは母に頼り切っていた。

テラスから星が綺麗に見えた。雲一つなくて空は満天の星空だった。

母は星を見上げている。

「あなたは、そのうち、雲の上の人になってしまっわね」
母は寂しそうに言う。

「おかあさん。なぜ、さっきは『姫君さま』って呼んだの」

「あの場所じゃ、『メレッサ』って呼ぶわけにはいかないでしょ」
母はわらっている。

「それに、あのような場所では私のことは『ルニー』と呼びなさい。『おかあさん』ではおかしいわ」

それから、母は座っている椅子を見た。

「あなたと話すのに座って話すなんて、出来なくなるかもね」

「そんなこと絶対じゃないよ」

母をそんな風に扱うなんてありえなかった。

「タイレム家は由緒ある家柄よ。そこのお姫様だもの」

「タイレム家って？」

知らないことがたくさんある。それに母がこのことに詳しいのにも驚きだ。ここにいたのだから詳しいのは当然かもしれないが、そんな母をまったく知らなかった。

「知らないの、あなたの名前は『メレッサ・タイレム』よ。タイレム家は100個ほどの星を束ねる豪族だったの。それがドラールの代になって力を伸ばしているのね」

それは、学校で習ったことがあった。元々宇宙は10ぐらいの勢力に分かれて対立していて、タイレム家はその中の一つだった。あの時は、私がタイレム家の一員だなんて考えもしなかった。

真夜中に侍女に起こされた。

「セラブ提督からお電話です。姫君さまはお休み中だから明日の朝にと何度も言っただのですが、緊急だそうです」

急に起こされて、頭がはつきりしない。

「セラブ提督って、だれ？」

「ルビル攻撃軍の司令官です」

司令官？ 何の用なんだろう。時計を見ると2時だった。司令官とか提督とか何のことかまったくわからない。

侍女が立体テレビ電話のスイッチを入れた。

「向こうは見えますが、こちらは見えなくなっています」
すぐに目の前に軍服を着た大男の姿が現れた。太っているが肩幅が広く老練な感じの男だ。

彼は電話の前をいらいらして歩き回っていたらしく、映った時は後ろを向いていた、

「姫君さま」

彼はカンカンに怒っていて、手に持っていた紙を振り上げた。

「この命令書はなんです」

こちらを睨みつける。

「一方的な停戦がどのような結果を招くかご存知なんですか」

メレッサは頭が混乱していた。この男は誰なんだろう。なぜ自分にこのような文句を言うのだろう。

「今までの掃討作戦が全部無駄になる。分かっておられるのですか？」

ものすごいけんまくで怒る。どうやら、さっきコリンズに渡した命令書のことらしい。

「停戦の命令はコリンズに言っています」

「コリンズに？ あいつに何がわかる」

彼は噛みつかんばかりに怒っている。コリンズを呼び捨てにした。言うことはコリンズより偉いのだろうか。そもそも私とどっちが上なんだろう。

「あなたは、誰なんですか？」

そつと聞いてみた。

「私を知らんですか」

彼はあきれたような顔でこっちを見る。

「ルビル攻撃軍の司令官、あなたの直属の部下です」

私の部下。でもコリンスも部下なのだが。

「コリンスは？」

彼はあぜんとしている。

「軍隊の組織を知らんですか？」

向こうには見えないが、メレッサはうなずいた。父からいきなり軍隊をもらったけど、そんなこと知っているわけがない。

「コリンス参謀はあなたを補佐するのが仕事です。あなたが命令を下すのはこの私にです。このような命令は紙一枚ではなくて直接私に命令してください」

彼は命令書を床に叩きつけた。学校の先生に怒られているようで涙がでてきた。

「今、掃討作戦を中止すればルビル軍は息を吹き返します。もう一度掃討作戦をやり直さなければならん。それが分かっているんですか」

「死ぬ人を減らしたいんです。誰も死んで欲しくありません」

涙声で言った。相手には死ぬ人の事を思っ泣いているように聞こえた。

「それには、占領のやり方そのものを変えなければならん」

そんなことができるわけない、つといった感じで言う。

「今、コリンスが新しい占領計画を作っています。明日の朝にはできるそうです」

「新しい占領計画？」

突然、セラブ提督の口調が変わった。

「しかし、皇帝が納得しないでしょ」

「父には、やってみると言われています」

提督はビククリしたようにこちらを見ている。

「姫君、占領方法の変更は姫君の権限でできるのですね」
非常に重要な事だと言うようにこぶしを握っている。

「はい」

父との話では、まかされているはずだ。

提督は何かを考えながら、ゆっくりと歩いている。

「これは、いいかもしれん」

ふいにこちらを見た、もう顔は怒っていない。

「姫君は、殺りくをやめるとおっしゃるんですね」

「そうです、もう人を殺さないでください」

彼は大きくうなずいた。

「命令の趣旨は了解しました。大量殺りくをやらなくてすみそうですな」

彼がうれしそうなので、メレッサもうれしくなった。一時はどうなることかと思った。こんな怖い人に怒鳴られたらすくみ上がってしまう。それに、彼もコリンスと同じで殺りくがいやだったみたいだ。

「姫君、あなたはたいしたお方だ。ご兄弟とは一味違う」

彼はおどけるように眉を上げた。

「起こして悪かったですな。では、ゆっくりお休み」

テレビ電話は切れた。

提督もいい人みたいだ。

メレッサはホットとしたが、しかし、少しまずい、窮地に追い込まれてその場しのぎをやってしまった。新しい占領計画を実行するつもりであるかのように言ってしまった。提督はルビルの占領を私がすると思い込んでいる。単に朝まで考えるのを延期しただけなのだが。

9・占領計画

次の日の朝、メレッサはコリンズの占領計画の説明を聞いていた。彼は立体映像を使って説明するが、難しすぎてよくわからない。死者80万人が1万人になるとか言っている。死者が80万人、とんでもない話だ。そしてこの計画でも死者は1万人、現実の話とは思えなかった。

「新しい占領計画にご了承いただけるのでしたら、計画書にサインをお願いします」

コリンズの説明は終わった。計画書の表紙にはサインする欄があった。

これにサインすれば今度は自分の責任で人が死ぬことになる。それも1万人も。これにサインしていいものか、まったくわからなかった。ペンを持ったが決心がつかない。すぐる思いで母をみた。もう母だけが頼りだった。

メレッサが必死で母を見ていたので、母が口を開いた。

「私が、少し質問をしてもよろしいでしょうか？」

母が質問を始めた。コリンズは母の方を向いて質問に答えている。やっぱりおかあさんは違うと思った。きびしい質問をしてコリンズも返事に困っている。やがて母の質問は終わった。

メレッサは、母が結論を言ってくれると思って母を見ていた。しかし、母は黙っている。

「ルニー、で、どうなんですか？」

母は静に頭を下げた。

「姫君さま。私のような身分の低いものが意見を申し上げるべきではありません」

そうかもしれない。母の身分は下女といったところだろう。下女が作戦計画に許可を出すなどありえないことだ。

やっぱり自分で決めなければならぬ。母の質問から、母はこの

計画に反対ではないと感じた。それに、今のままだと殺りくが起きる、サインするしかないように思えた。

震える手で占領計画書にサインした。

コリンスが深々と頭を下げる。

「姫君さま。この占領計画で必ず無事に占領してご覧にいきます」

「たのみます」

メレッサは引きつった声で答えた。

コリンスはメレッサの所へ計画書を取りにきた。

「責任を感じてあるのはわかります。でも、これが姫君の仕事です。慣れてください」

「人が死ぬのに慣れるわけないでしょう」

コリンスはうれしそうに微笑む。

「その気持ちをいつまでも持つていてください。そのうち死者が数字にしか見えなくなります」

コリンスは敬礼をすると、部屋を出ていった。

身体の震えが止まらない。メレッサはすぐに母の所へいった。

「サインしてよかったと思う？」

母の目を必死で見た。もし違っていたらどうしよう。

「私も戦争なんてまったくの素人だから、ぜんぜんわからない。ただ、コリンスさんは占領の犠牲を減らしたいと思っているのは確かだね。彼に任せていいんじゃないかと思う」

「サインしてよかったという意味？」

母は笑った。

「してよかったと思うわ」

よかった。メレッサはほっとして椅子に座った。

わらっている母が憎たらしく見えた。責任のない人はいい。なんでこんなんでもない責任が私にあるんだろう。あの計画でも1万人死ぬのだ。ある意味1万人の殺害計画にサインしてしまった。もう死んだら地獄に落ちてしまう。

それに、ついすっかり忘れるところだった。しなければならないことがもう一つある。

「ミルシー、セラブ提督に電話して」

セラブ提督にも話をしておかないと、また怒られる。

電話がつながった。寝間着の上にガウンを羽織ったセラブ提督が現れた。

「おお、これは、姫君。始めてお目にかかります、セラブです」

昨夜の電話はこちらの映像は送っていなかったから、セラブ提督は今始めてメレッサの姿を見るのだ。

「いや、これは。今、眠っておったところだな。姫君からの電話とあれば待たせるわけにはいかんだろう」

彼はガウンをちよつと開いて下の寝間着を見せてくれた。

「それにしても、お美しい」

彼は大げさに驚いてみせる。みえすいたおせいじだが、うれしくなってしまう。

「母君とそっくりですな」

「母を知っているんですか？」

思わず母を見た。提督はそれを見逃さなかった。

「今、そこに母君がおられるのですか？」

「ええ」

「もし、よろしかったらカメラの前に出てはいただけまいか」

母の知り合いだったとは驚きだ。ここに来て母の過去を始めて知ったが、まだ知らないことがたくさんありそうだった。

母がメレッサの後ろに立った。

「おお、これはルニーさん。お元気そうだなによりです」

「ご無沙汰しています。提督になられたんですね」

「あの時は失礼しました。あなただったら皇帝の暴走を止められると思ったのですが」

母は手をふった。

「私などにとっても無理です」

二人の会話はまったく意味がわからない。母と皇帝との関係はどんなものだったのだろう。

「このセラブ、あなたのためなら何でもします。困ったことがあったらどうぞおっしゃってください」

「いえ、こちらで優雅にやっておりますので、大丈夫です」

母はちよつと会釈して、カメラの前から離れた。

メレッサは啞然として母を見ていた。きのうは、母がメレッサを雲の上の人と言ったが、今は母が雲の上の人に見えた。

「姫君、で、ご用件は？」

セラブ提督が聞く。メレッサは我にかえった。

「占領計画ができましたので、サインしました。じきそちらに届くと思います」

提督はおどけたようにごぶしを突き上げた。

「姫君、了解です。おもしろくなってきました。任せてください」

提督は楽しそうだ。メレッサは思わず微笑んだ。

なぜか、彼を見ているとこちらまで楽しくなってしまう。魔法にかかったみたいに彼にまかせておけば安心という気にさせる。

「では、お休み。こっちは夜でしてな」

提督はさよならと言うように手をあげた。

「寝ていた所を起こしてすみませんでした。おやすみなさい」
きのうお返しだ。

もう一度提督が手を上げると、電話は切れた。

今の自分のできるのは、ここまでだと思った。80万人の死者は防げるかもしれない。本当は戦争を止めて占領軍が撤退するのが一番なのだが、そこまでは無理だろう。

10・兄の宮殿

昼から、メレッサはジョルに招待されて、兄の宮殿に向かっていた。新しい生活に不慣れなメレッサの事を使つて誘つてくれたのだ。

ここは広大な敷地に森や湖があつて、その中にたくさんの宮殿が建っている。あまりに広すぎるので、移動は飛行車を使う。黒塗りの大型の飛行車の中は、それ自体が豪華な部屋になつていてメイド時代の部屋より広い。

きのうはゆつくり景色を見る余裕がなかったが、今日は景色を楽しめた。森や湖のほとりに宮殿が建つていて、それはそれは美しかった。

兄の宮殿に着いた。綺麗な湖のほとりに建つていて、広大な庭を持ち素晴らしい宮殿だった。

ミルシーが私の屋敷が見劣りすると言つていた意味がやっとわかった。確かに比べ物ならなくらいに立派だ。メレッサは宮殿に見とれてしまった。こんな宮殿に住めたらどんなに素晴らしいことかと思つてしまう。しかも、兄がこんな宮殿に住んでいるという事は、メレッサだつて住めないことはないはずだ。メレッサはこんな所に住みたくなつてしまった。欲は限りがないもので、きのう、今の屋敷を見たときは、その素晴らしいさに感激したのに、あの屋敷に不満を感じるようになってしまった。

玄関の前に飛行車がおりた。ジョルが玄関に迎えにきていた。

始めて兄弟、それも兄と二人だけで会う。兄の事をなんて呼んだらいいかわからない。

「ジョル兄さん」

と言つてみた。すごく、新鮮な響きだった。

「メレッサ、よく来たな。まあ、入れよ」

ジヨルの宮殿は素晴らしかった。豪華な部屋がたくさんあって、すごい美術品が無造作に置いてある。天井は高く、大きな窓は日差しが明るい。

ジヨルの部屋に通された。正面の窓からは庭園とその向こうに湖が見える。メレッサの屋敷では庭の向こうには隣の屋敷が見えた。

「兄さんの所、すごいね。あたしもこんな所がいいなあ」

「どこに住んでいるの？」

「端の方の狭い屋敷」

やはり、不満に感じていることが言葉に出てしまった。

ジヨルは端末を何やら操作した。端末の上の空中にメレッサの屋敷の立体画像が浮かんだ。

「こんな所に住んでるんだあ」

ジヨルは驚いている。

「こりゃひどいな。なぜ、ここになったの？」

「急な話で、空いてる屋敷がここしかなかったんだって」

「そりゃそうかもしれないな。多分、どこかの宮殿を空ける準備を今しているんじゃないかと思う。すぐにこんな宮殿に入れるよ」

なるほど、こんな宮殿が空き家になっているはずがない。当然誰かが住んでいるから、私がそこに住むには、その人が出ないといけない。

「そうかあ、じゃあ、今の所でいいよ」

「そりゃ、だめだよ。父さんがあんな所にメレッサが住んでいる事を知ったら、屋敷を手配した担当者は確実に殺されるな。宮殿を譲らなかつた者もちょっとまずいことになるかもね」

それなら宮殿に住めるかもしれない。もし、こんな所に住めるなら夢のようだ。いや、今住んでいる所もさっきまでは夢のような所だったのだけれど。

ジヨルは、すらつとして背の高い人で、まったく飾り気のない服を着ている。長めの髪をボサボサにっていて、屈託のない人だった。せっかく兄といっしょなので、ぜひやってみたいことがあった。

「兄さん、お願いがあるんだけど」

「なに？」

「兄弟喧嘩がしてみたい」

メレッサは兄弟がいなかったたので、兄弟喧嘩をしたことがなかった。

ジヨルはわらっている。

「バカ、言つなよ。兄弟喧嘩はやりたくて出来るもんじゃない。それにそのうち始まるよ」

「兄弟喧嘩が」

メレッサはわくわくして聞いていた。

「父はまだ跡継ぎを決めていない。このまま、もし父になにかあったら、兄弟で殺し合いが始まる」

兄弟で殺し合い！ 考えたこともなかった。お金があるとそれはそれで大変なんだ。

「君も、この帝国が欲しいだろう」

まさか、帝国が欲しいなんて、そんなこと考えられない。でも、欲って限りがないのだろうか。今の屋敷だつてここを見るまでは夢のような御殿だと思っていたのに。

「しかも、父は子供たちに軍隊を分け与えている。君がきのうもらったからこれで、上の4人が自分の軍隊を持っている。父が死んだら、間違いなくこの4人が戦争を始めるな」

とんでもないことだ、兄弟で戦争をするなんて。そんな事をすれば帝国自体が崩壊してしまう。

「戦争なんかぜったいだめよ。跡継ぎはジヨル兄さんだと思う」

ジヨル兄さんが一番年上なんだし、しっかりしている。兄弟がそろつてジヨル兄さんを跡継ぎと認めればいいんだ。

「ありがとう、じゃあ君は味方だと思つていい？」

「もちろんよ、兄弟がみんな結束してジヨル兄さんを支持すればいいと思う」

「でも、ルシールは自分が跡継ぎになりたいみたいだ」

「ぜったいにだめ」

兄弟で争ったら絶対にだめだ、帝国がなくなつて、結局なにも残らなくなる。

「じゃあ、ルシールに誘われても、僕についてくれるかい？」

そうじゃない。対立してはだめだ。

「ルシール姉さんとも仲良くやろう」

「君の言っている事は理想だな。そうなれば一番いいんだが、そうはならない気がする。僕等は兄弟といつても母親がみんな違うし住んでいる所も違うから普通の兄弟とは違う。僕等が喧嘩をすると母親を巻き込んで大事になるんだ」

そうなのか。ここの兄弟はそれなりに問題を抱えているんだ。

「それに、もつとややこしい問題もある。母親と父さんとの関係があつてね。父さんに寵愛されている母親の子が兄弟の中でも強くなる」

メレッサは考えもしなかったことだった。ここの兄弟はものすごく複雑なんだ。

それから、ジヨルはちょっと寂しそうに言葉を続けた。

「僕の母さんは……、あまりぱつとしないんだ」

ジヨルは寂びしそうにしている。しかし、なんとっていいかわからなかった。

「ルシールの母さんは、美人で愛嬌があつて、父さんに気に入られている。だから……、母さんが可哀想だ」

ジヨル兄さんは言葉につまった。母親の悩みがそのまま子供の悩みになっている。側室がたくさんいるなんて絶対によくない。

ジヨルはメレッサを見た。

「それに、今度は君のお母さんが参戦するから、一波乱あるな」
メレッサはわらった。

母が皇帝の寵愛獲得競争に参戦するなんてありえなかった。そんな屈辱的な事をするわけがない。それにどうせ勝負にならないだろう。

「母はランキング外よ」

「なぜ、父さんが一番好きなのは君のお母さんなんだ」

「まさか。おとうさんは、あたしの母さんのことなんか何とも思っていないわ」

「とんでもない。父さんが君のお母さんに夢中だってことは誰だつて知っていることさ」

母が言っていることとだいぶ違う、母は品物扱いだと言っていたのに。ジョル兄さんの言う事を信じたわけではないが、それでも冗談を言っているようにも見えなかった。

「僕とルシールは歳が半年しか変わらない。だから、どちらが跡継ぎになるかは微妙なところなんだ」

それは絶対にジョル兄さんだと思った。こんなことで喧嘩したら帝国がなくなってしまう。

「父さんは何か言っているの？」

「いや、まだ決めてないみたいだ」

「兄弟で喧嘩したら絶対にだめよ。ジョル兄さんが跡取りだと決めるべきよ」

「ありがとう」

ジョル兄さんはうれしそうだった。

お昼をご馳走になった。ジョル兄さんはやさしく色々な事を教えてくれる、いい人なんだが、どこか気弱に感じた。ルシール姉さんの方がはるかに気が強い。この二人の対立は難しいことになりそうだった。

11・母の宮殿

メレッサが自分の部屋でテレビを見ていると、ミルシーが喜んで駆け込んできた。

「姫君さま。宮殿に移れることになりました」

「宮殿に！」

メレッサは思わず立ち上がった。とうとう、宮殿に住むことができる。ジヨル兄さんの宮殿のような所に住めるのだ。

しかし、こんなにも短期間でこんなにも贅沢になってしまった自分が恐ろしくもあった。タラントさんの家でメイドをしていたのはわずか一週間前のことだ。狭い部屋に母と二人で住んでいたのに、でも何の不満もなかった。それが、この御殿のような屋敷にさえ不満を感じてしまうなんて、どこか間違っている。

侍女や下女達も喜んでいる。ここでは狭くで彼女達の部屋が充分にないのだ。宮殿に移れば一人一部屋になる。

母がやってきた。

「どこに、引越すの？」

「紫の宮殿です」

ミルシーが言った。

「ああ……」

母は心当たりがあるみたいだった。でも、もう、母がこの事に詳しくても驚かないことにしていた。ここにいたんだから詳しいのは当たり前だ。

慌しく引越しの準備が始まった。侍女や下女が準備をしてくれる。メレッサと母は紫の宮殿を見に行くことにした。

飛行車から見えてきた宮殿はそれは素晴らしいものだった。綺麗な湖のほとりに小高い丘があってその上に宮殿が建っている。宮殿の前は広大な庭園で後ろは湖になっている。宮殿の白い色が森の緑

に映えていて、うつとりしてしまう。ジョル兄さんの宮殿よりもはるかに素晴らしい。

「ここは、皇帝がルニーさまのために建てられた宮殿ですね」

ミルシーがうれしそうに言う。

「お母さんのために！」

メレッサは思わず母をみた。

母はてれくさそうにしている。

「あなたは、2歳までここにいたのよ」

メレッサは驚きを通り越してなんと反応していいかわからなかった。ここに私が住んでいたなんて。このすごい宮殿に住んでいたことがあるなんて、何を信じていいかわからない気持ちだった。

「ここを、皇帝からもらったの？」

母は、さらに照れくさそうに話す。

ありえない。母は皇帝からこんなすごい宮殿をプレゼントされていたのだ。皇帝から品物扱いされていたみたいな事を言っていたのに。

「ここは、ルニーさまが、失踪されてもずっと空けてあったのですが、3年前から皇帝の弟君が住むようになったのです。弟君はルニーさまが来ると聞いてすぐに退去の準備をされていたそうです」

ミルシーが説明する。つまり、ここは母のための宮殿なのだ。なんで、こんなすごい宮殿を捨てて逃げ出したのか分からない、こんな所に住めるなら側室だろうと愛人だろうとかまわらないような気がした。

「なぜ、ここをもらったか。知りたいでしょう？」

母の考えはよくわからない、もらうのは当たり前で、なぜ捨てたかが知りたいのだが。

「私がバカだったの、皇帝からは何一つもらわないつもりだったんだけど、ここを見たら欲しくなったの」

母は恥ずかしそうな顔でメレッサを見ている。

「私をバカにしたかったら、バカにしていよいよ」

母は自傷的にそう言った。母は信じられないほど誇り高い人なんだ。それに母が私も当然そう考えるだろうと思っていることに戸惑いを感じた。私だったらここをもらうのは当然で、もったいい物によこせと要求する。

飛行車を降りて宮殿の中に入った。細かい彫刻があつて素晴らしい廊下が続く。

母が近くにあつた部屋に入った。

「ここに住んでいたのよ」

そこは高い窓がある素晴らしい部屋だった。窓からの景色は素晴らしい、窓の下が森になっていてその向こうに湖が見渡せる。

ふと、幼い頃の記憶が蘇ってきた。この景色に見覚えがある、母に抱かれて見た景色だ。どこだろうと思っていたのだが、ここだったのか。

母は宮殿の中を回って、絵画や彫刻を説明してくれた。これは母の好みで集めたらしい、母がこれらの芸術を理解できるのが驚きだった。メレッサにはまったく良さがわからない。

「これはセランよ、すばらしいでしょう」

母は大きな絵の前でうつとりしている。メレッサには子供が描いた絵にしか見えなかった。

母は物腰が優雅で宮殿の作法にも精通している。品があつて、ドレスを上手に着こなす。いきなりお姫様になった私とはまったく違った。

12・父との対決

ルビルの状況はコリンスから定期的に報告を受けていた。

ルビル軍はかなりの戦力が残っているが、それでも休戦と占領の話が進んでいて、まもなく休戦できそうとの話だった。

そんなある日、ミルシーが血相を変えて飛び込んできた。

「メレッサ姫、皇帝が呼びです。大変ご機嫌が悪いそうです。すぐに行ってください」

父には最初の日会ってから20日になるが、一度も会っていなかった。そろそろ父に会いたいと思っていたのだが、会う勇気がなかった。

メレッサは飛行車に駆け込んだ。

なんだろう。父から怒られるような事をした覚えはないが、不安で心臓がどきどきする。父の宮殿に着くと秘書官が待っていて、父の執務室まで走っていった。

秘書官が取り次いでくれて、部屋に入るようにと手で合図する。

メレッサは深呼吸をして、意を決して部屋に入った。

「メレッサです」

部屋にはコリンスが蒼白な顔で立っていた。父はすごい顔でメレッサを睨んだ。

「メレッサ。ルビル軍はまだ健在だそうじゃないか」

ルビル占領のことだ。ルビルの占領は任せてもらっているはずなのに。

「休戦と占領の話が進んでいます」

メレッサはなんとか答えたが声がうわずっていた。まずい、このような場合は自信があるように見せないといけない。

「休戦だと。ルビルを叩き潰し、植民地にしなければならん。ルビルの叩き潰せ」

父は怒鳴りながらメレッサの目の前に来た。しかし、メレッサは

一步も下がらなかった。

「ルビルの占領は任せてもらっているはずです。私のやり方で占領します」

ルビルの人達を守るにはここでルビルの占領を父に譲ってはいけない。絶対に自分が占領をやる。メレッサはそう思った。

「コリンス」

父はコリンスを怒鳴りつけた。

「まだ、メレッサは何もわからん。貴様がいながら何というさまだ。お前は絞首刑だ！」

「父上！」

メレッサはだんだん頭に血が昇ってきた。

「コリンスは私の命令で動いただけです。ルビルの占領は私の方針でやります」

「お前の命令だと、この占領計画書がか」

父は一束の書類をメレッサに投げつけた。占領計画書を見たのだ。「そうです。この計画は私の計画です」

父がメレッサを睨むので、メレッサも睨み返した。それに、コリンスがここにいるのにも腹が立ってきた。

「父上。コリンスは私の部下です。直接、呼びつけしないで下さい」

「なんだと、この小娘が」

父はカンカンになっている、しかし、メレッサも興奮していた。「任せるとおしゃったでしょ。それとも、もう、もうろくしたんですか」

メレッサはカナキリ声を上げてどなった。

「お前にはルビル占領は無理だ」
父も負けずに怒鳴る。

メレッサも怒鳴り返そうと思ったが、これでは泥試合になってしまふ。それに、怒鳴り合いでは結局父に負けることは目に見えている。むしろ逆にやった方がいい。メレッサはセルからいじめられていたので感情のコントロールが自由にできるようになっていた。

メレッサは息を整えた。ゆっくりと歩いて父の前を通り過ぎ、それから振り返った。意識して氷のように冷たい口調で言った。

「ルビルは私のものです。ルビルは私の思うとおりに占領します」
自信たっぷりに言った。

父はあつけにとられている。

「ルビルを占領するにはルビル軍を叩き潰せ」

父は怒鳴ったがどこか迫力がない。メレッサは微笑んで首をふった。自分でもこんな演技ができるとは思っていなかった。

「ルビルはもうすぐ私の物になります。ルビル軍の存在など問題ではありません。ルビル軍は戦う氣力をなくしています」

まるで、当然の事のように言った。本当にルビル軍が戦う氣力をなくしているのなんて知らなかった。

父はわなわなふるえている。

「本当に占領できると言うのか」

メレッサは父に近づきその顔をしっかりと見た。

「できます。心配いりません。私に任せて下さい」

ハッターだった。しかし、ともかく自信があるようにみせなければならぬ。それに、ルビルの占領に失敗しても父に殺されることはないだろうと思っていた。

メレッサの大人びた様子と驚くほどの自信に圧倒されて父は黙っている。

「ルビルとは今、占領に向けた交渉が進んでいます。交渉でも占領できます」

これは、コリンスが今朝の報告で言った言葉だった。

「お願いです、占領を私に任せてください」

もう、演技はやめて誠意をこめて言った。

父は不思議なものを見るような目でメレッサを見ている。メレッサの自信に圧倒されているようだ。

父は歩き始めた。顔はもう怒ってはいない、メレッサに任せてもいいと思っているようだ。

窓から外を眺めている、気持ちを落ち着けているのだろう。

「やれると言ったな」

「はい、大丈夫です、すべて計画通りに progressing います」

父は、ゆっくりと振り向いた。

「わかった、やってみろ」

「ありがとうございます」

メレッサは頭を下げた。これで、ルビルの人を守ることができる。

「もう行け、少し考えることがある」

父はいかにも邪魔だと言わんばかりに手を振った。

メレッサはお辞儀をして部屋を出ようとした。しかし、コリンスはその場に立ったまま固くなっている。父が彼には退室を許可してないので彼は出られないのだ。多分、父は彼を怒るつもりだ、助けてやろう。

「コリンス」

メレッサはきつい口調で言った。

「ついて来なさい」

コリンスは一瞬迷ったようだったが、彼は皇帝に敬礼をするとメレッサに続いた。父は特に異存はないようだった。

二人は父の部屋を出た。

部屋を出たとたん、足が、がくがく震えて、立っていられなくて椅子に倒れこんだ。父の前では必死で平静を装っていたが、恐怖が一度に吹き出してきた。

「怖かった!!」

よくもまあ、あんなハタリができたものだ。ルビルを守りたい一心だった。

コリンスが何事かと驚いている。

「どうされました？」

私の気持ちがまったく分かっていないみたいだ。

「足がもつれて歩けないの」

「なぜです？」

同じ所において、私がどうなったか分からないのか。

「もつれてるの！」

「しかし、姫君様には感服しました。皇帝を相手にあそこまで言えるとは」

自分でも驚きだった。私って詐欺師になれるかもしれない。

「それに、最後は救い出していただいて有難うございました。もし、あのままあそこにいたら絞首刑を言い渡されたかもしれません」

コリンスは自分の気持ちを表にださない。命を助けてもらったのならもつと感謝の気持ちがあってもいいのに。

「助けたのは、あなたが絞首刑になると困るからよ。絶対にルビルは占領してよね」

あそこまで父に言い切ったのだから、失敗したら会わせる顔がない。

「大丈夫です。もし失敗したら私を絞首刑にしてください」

絞首刑！ 大した自信だ、そこまで自信があるのか。ふと、これはハツタリではないかと気がついた。そして、メレッサは、いつも自信たつぷりの言い方をするコリンスの言うことにもかなりハツタリがあると今、始めて気がついた。それに、コリンスは私が彼を絞首刑にはできないことも分かっている。

メレッサは腹が立ってきた。たぶん、今、私がなぜ動けないかもわかっていて、この程度で動けなくなった私をからかっているのだ。メレッサはバカにされまいと立ち上がろうとしたが、足に力が入らずにまた椅子に倒れこんでしまった。

「大丈夫ですか？」

コリンスが手を差し出したが、その手を払いのけた。

「しばらく休憩よ、あなたもここに座りなさい」

しかし、コリンスは座らない。そう、彼はメレッサの前では決して座らない。それが礼儀だと思っている。

不意に、扉が開いて父が出てきた。ここはまだ、父の部屋の前だった。

メレッサは慌てて立ち上がろうとしたが、やっぱり足に力が入らずに椅子に倒れこんでしまった。

父は椅子に倒れているメレッサを見つめている。

「どうした？」

「足が、動かなくなっちゃて……」

父はメレッサに手を差し出した。思いがけないことだった。父の手は大きくて力強い手だ。父の手をつかむとぐうっと引き起こしてくれた。うまく立ち上がったが、父はメレッサの手を見ている。

「手が荒れている」

20日前までメイドの仕事をしていたのだから、綺麗な手のわけがない。

「メイドの仕事で水仕事もしていましたから」

「そうか、埋め合わせをしなくちゃな」

父はメレッサの頭を撫でてくれた。怒っていない時の父は、その気持ちがあつたくわからない。私を愛おしく思ってくれているのだろうか。

父はそのまま、ふり向きもせずに部屋を出ていった。

13・側室

母は時々夜中にいなくなることがあった。不思議に思っていたのだが、ある日、母が出かける所を見てしまった。

綺麗なドレスを着て宝石をつけ侍女二人を連れて、すばやく飛行車に乗り込む所を偶然、階段の上から見ってしまった。理由はすぐにわかった、父に呼ばれて父の所へ行くのだ。

ショックだった。母はあれほど誇り高い人なのに、いやだろうなと思うとたまらなかった。それに、その事を私が知ったら気にすると思つて、私には秘密にしているのだ。

その夜は眠れなかった。母が今どんな気持ちなんだろうと思つと、母に申し訳ない気持ちでいっぱいになった。母は私がここでお姫様の暮らしができるように、自分は我慢しているのだ。

次の日の朝、母はいつものように食堂に来た。いつものように二人で食卓に座つて食事を始めた。

何か言つた方がいいのか、知らないふりをしていた方がいいのかわからなかった。

「どうしたの？ 何かへんよ」

母が聞く、困っている気持ちが顔に出ているみたいだ。

「いえ、別に、なんでもないよ」

無理に笑顔を作つた。

「絶対に变よ、何か隠しているでしょう」

父を相手の時は、あんなにうまく演技できたのに、母を相手にすると全然気持ちを隠せない。

「何も隠してないよ」

「隠してるでしょ。言いなさい」

母は隠し事していると厳しかった。隠すのは無理かもしれない。昨日、母さんが出掛ける所を見ちゃった。ごめんなさい」

母は驚いている。気まずい空気が流れた。

「そうなの……」

母は髪をかきあげて、どうしたものかと悩んでいる。

「ごめんね、秘密にしている。でも、あなたが考えているほどの事じゃないから、気にしなくていいのよ」

「かあさんが辛い思いをしているのに、のうのうと暮らしていて、申し訳ないと思っています」

メレッサは下を向いたまま言った。申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

母はさらに困ったように、髪をかきあげた。

「気にする必要はないのよ。秘密にしたのがまずかったわね。でも、何の用で行くのかを考えたと言える訳ないでしょ」

「つらくないの？」

「そりゃね。でも、条件をいろいろ突きつけたから。まあ、こんなもんかなってとこかな」

「条件？」

条件を突きつけられるのなら、やっぱり、父が一番好きなのは母なのだ。

「どんな条件なの？」

「側室を近づけるな、とか、そんなの」

ジョル兄さんが言っていた、母が寵愛獲得競争に参戦したら一波乱あると言っていたことを思い出した。露骨に参戦だ。

「父はそれを承諾したの？」

母は首を振った。

「無理な話よ」

母はにこやかにしているが、内心はこんな話はいやだろう。でも、せつかくの機会だ知りたいことがあった。

「なぜ、逃げたの？」

逃げるのが母にとっては、あまりに当然の事かもしれないが、でも何があつたのか知りたかった。

母は少し驚いている。非難されたように感じているみたいだ。

「若かったのかな。皇帝のおもちゃになんか絶対にならないと思っていたの」

母は少し考えていたが、ゆっくりと話始めた。

「私を見張っている兵隊がいたんだけど、ある時、その人達がとてもないミスをしたの。皇帝に見つかったら殺されるようなミスだね。私の所に泣きついてきたわ。宇宙船で逃げたいんだけど、飛行許可がないまま飛び立てばすぐに見つかって撃墜される。でも、私が申請すれば飛行許可が下りる。私はチャンスだと思ってあなたを連れて逃げることにしたの。宝石を全部積み込んだわ、兵隊達も含めて一生楽に暮らせるはずだった。ところが、ルビルで置き去りにされたの、本当に着の身着のまま、一文もくれなかった。後は、あなたも知っている生活がはじまったの」

「ひどい!!」

メレッサは激怒した。とんでもない奴等だ。恩を仇で返すなんて八つ裂きにしても飽き足りない。もし、彼らが裏切らなかつたら、私はメイドなんかしなくて、もっといい暮らしができていたかもしれないのだ。

「そいつら、捕まったの?」

「いえ、捕まっていなと思うわ」

今の権力があればそいつらを探せる、絶対に捕まえてやる。

「探して、捕まえよう。鞭打ちで殺してやる」

「メレッサ、なんて事を言うの。そんな恐ろしいこと考えるもんじやありません」

メレッサは驚いた、お人好しにも限度がある。

「かあさんは、そいつらが憎くないの?」

母は困ったようにメレッサを見た。母の正義感にはメレッサの理解を越えていた。

「それは逆ね、恨まれていたの。私たちは強大な権力を持っているから、自分ではそれと気がつかなくても人を傷つけているのよ。兵

士に恨まれていることに気がつかず、権力がなくなっても今まで通り仕えてくれると思っていた私がバカだったのよ」

置き去りにされる時その理由を言われたのかもしれないが、でも納得できなかった。

「でも、裏切りは許せないわ」

「もし、あなたがセシルと逃げることになったらどうする？」

セシル！ 相手がセシルなら、宝石を奪って、どこかの星に置き去りにしてやる。でも、セシルはそれだけひどい事を私にしたのだ。母にはメレッサの心の中が見えるように話を続けた。

「ね、そうでしょう。恨まれていたのね。セシルのようになっちゃだめよ。あなた、かなり横柄に侍女を使っているわ。彼女達はみんなあなたより年上よ。もっと丁寧に接しなさい」

母の言う事も分からないではないが。納得できなかった。幼かつたとはいえ、私も置き去りにされたのだから、私にも仕返しをする権利がある。メレッサは彼らを絶対に探し出すつもりだった。

母は話が終わったと思ってミルクを飲んでいる。しかし、あと一つ聞きたかった。

「父に何を要求したの？」

こんな事を質問して母がいやがるかなとも思ったが、母はにやにやしている。

母はミルクをおもむろにテーブルに置くと。

「私と正式に結婚すること、側室を退けること、あなたを跡継ぎに指名すること、よ」

びっくりである。すごい要求だ。

「で、どうなった？」

「あっさり、拒否されたわ。『バカヤロウ』って」

これは、納得である、この要求はいくら何でも無理だろう。

「ここで、生きていくには皇帝に気に入られるしかない、せいぜい着飾って頑張るわ」

母はけっこう気楽に話す、しかし、今の言葉は自傷的に聞こえた。

内心は苦しいのかもしれない。

14・ルビル占領

一ヶ月がたった。

窓からはルビル星が見えていた。ルビルは降伏し、その占領にやってきたのだ。

メレッサが乗っている宇宙船は宮殿をそのまま宇宙船にしたような船だった。宇宙船の中央が庭園になっていて、その周囲に豪華な部屋がたくさんあった。

この船の艦長はミラバという老人だった。非常におっとりした人で、いつ船の事をやっているんだろうと思うくらいメレッサの近くに待機していて、船のことで分からない事があるとすぐ艦長が来て説明してくれた。

今日は、ルビルに到着するのでメレッサはブリッジにいた。

前面に大きな窓があり、そこから青く輝くルビルが見えている。ブリッジの中央には立派な椅子があり、メレッサはそこに座っていた。最近ではこのような所に座るのも慣れてきたが、軍艦のブリッジの椅子は座り心地が悪かった。

ミラバ艦長がすぐ横に立っていて補佐してくれる。コリンスはミラバ艦長に遠慮して少し離れた所に立っていた。

ルビルはぐんぐん大きくなり、すぐに前面の窓いっぱい広がるようになった。ルビルの表面に白い雲が渦巻いているのが見える。やがて、前方の空間に白く輝く点がたくさん散らばっているのが見え始めた。宇宙艦隊がルビルの軌道上に集結しているのだ。宇宙船は徐々に減速しながら艦隊に接近していく。

「姫君、これだけの船を指揮する気持ちはいかがですか？」

艦長が感慨深げに聞く。

「いえ、べつにどうってことは……」

「わたしは、この航海で引退するつもりです。わたしも、若いころは提督になる夢を持っていましたが、結局艦長止まりでした」

艦長のんびりした目でメレッサをみる。

「姫君は、生まれた時から、提督より上ですから……」

艦長はメレッサが羨ましいのだろう。でも、メレッサはこれだけの船を指揮できて、特に嬉しくなかった。

「あたしも、つい一ヶ月前までは、この星で貧しい暮らしをしてました」

「存じてます。姫君なのに大変でしたなあ」

「いえ、そんな生活をいやだと思ったことはありません」

宇宙船が艦隊に近づくにつれて、一艘一艘の船がはつきり見えてきた。その中にひととき大きな船がある。

「あれが、ミルビスです。セラブ提督の船です」

ミラバ艦長が説明してくれる。メレッサはミルビスとは船の名前だろうと思ったが、質問する訳にはいかなかった。まさか彼女が自分の指揮下にある船の名前を、しかも、旗艦の船の名前を知らないなどとは誰も思っていなかった。コリンスならもっと上手に説明してくれると思ったのだが、彼は離れた所にいる。

「本艦が到着したので、本艦が旗艦になります。提督がこちらに乘艦されます」

ミラバ艦長が説明してくれる。メレッサはそれが何なのか分からなかった。黙っていると。

「姫君が本艦にご乗艦なので、本艦が旗艦になります」

ミラバ艦長が説明してくれた。

私が乗っているからこの船が旗艦になるのだ。メレッサにもやっとなかった。

無数の宇宙戦艦が浮かんでいて、メレッサの乗っている船はその中に滑るように入っていく。

不意に、浮かんでいたすべての船から、宇宙の方に向かってまばゆいばかりの光の筋が無数に伸びた。

メレッサはビクリして、小さな悲鳴を上げてしまった。あわてて口を抑えて、周囲を見たが、みんな平然としている。

「メレッサ姫の到着を歓迎する儀礼砲です。皇帝の場合は7発、姫君の場合は6発、発射されます」

「儀礼砲！」

映画で儀礼砲を撃つシーンを見たことがあったが、私のために儀礼砲を撃ってくれるのか。

儀礼砲が次々と発射された。これだけ戦艦があると儀礼砲の光は花火のようで本当に綺麗だ。

メレッサの船は巨大戦艦ミルビスの横に停泊した

「ミルビスより旗艦の引き継ぎ依頼がきています」

離れた所で誰かが叫んだ。

ミラバ艦長がメレッサを見た。

「姫君、旗艦の引き継ぎ、よろしいですね？」

なんの事か分からない。だれか説明して欲しいがコリンスは近くにいない。

「はい」

分からない時は承諾するしかなかった。

「旗艦の引き継ぎの承諾を伝えろ」

ミラバ艦長がさっきの男に向かって叫ぶ。

「姫君、ただいまより、本艦が旗艦です」

「ああ、そうですか……」

力ない返事をしていると、たまりかねたのかコリンスが横にやってきて耳元に口を寄せ、小さな声で説明してくれた。

「軍隊では、誰が指揮権を持っているかを常にはつきりさせます。

でないと、緊急時に二人の人間から命令が出ると混乱するからです。今、旗艦の引き継ぎが終わりましたので、今は姫君がこの艦隊すべての指揮権を持っています。もし、緊急事態が起きたとき、例えば、ルビル軍の攻撃を受けた時は、姫君の命令で全艦隊が動くことになります」

ビックリである。

「そんなの無理よ」

メレッサは驚いて、すぐる思いでコリンスを見上げた。

「大丈夫です。すぐにセラブ提督がこの船に移ってこられますから、実務はセラブ提督がされます」

ミルビスから、小型艇が近づいて来るのが見えた。セラブ提督がこの船にやってくるのだ。

艦長やコリンスなど主だった者がエアロックの所でセラブ提督を出迎えた。

セラブ提督が乗船してきたが直接みるとでっかい人だ。太っているが元々がしりした身体なのでそれを感じさせない。

「これは、これは、姫君。これはお美しい。直接拝見すると、輝くばかりの美しさですね」

提督はまゆを細めている。こんな事を言われると、おもわず微笑んでしまう。

「どうです。ほとんど無傷でルビルを占領しましたぞ。ルビル側の死者は数万人程度です。姫君のご希望とおりです」

提督はどこかユーモラスだ、顔はニコニコしている。

「よくやってくれました」

すこし、お姫様らしく言ってみた。

「そのように言っていただけだと、光栄のきわみです。疲れが一度に吹っ飛びます」

「おだてすぎです」

つい笑ってしまう。

「今回の占領作戦はわがドラール軍の占領方法の転機となるでしょう、これも、姫君のご英断のたまものです」

セラブ提督の口からはいくらでもお世辞が出てきそうだった。

「いえ、私は何もやっていません」

「それに、父上を説得された話も聞きましたぞ。あの皇帝相手に一歩も引かず、どちらが皇帝かわからなかったとか。これで、お世継ぎはメレッサ姫に決まりだと、もっぱらの噂ですぞ」

「それはね」

メレッサは父を説得した件は多少自慢だった、我ながらうまくやったと思っていた。でも、世継ぎの話はセラブ提督の完全なお世辞だろう。

15・ルビルからの攻撃

セラブ提督が乗艦してきたので、三々五々集まって簡単な打ち合わせが自然に始まった。

自然に始まったので、当然、あまり重要でない人は打ち合わせの輪に入れない、もちろんメレッサが入れるはずもなく、彼女は一人ぼつんと立っていた。見ると、もう一人、誰とも話をしていない人がいた、ミラバ艦長だ。彼も重要な人物ではないらしい。

メレッサはミラバ艦長の所へ行った。

「艦長もあぶれたんですか？」

「これは、お恥ずかしい。まあ、宮殿宇宙船の艦長は閑職ですからな」

「そんな事はありません。りっぱなお仕事だと思います」

「そう言っていたけると、心強い限りです」

メレッサよりはるかに年上の人と話すのは難しい。

「引退されるそうですけど、引退後はどうされるおつもりですか？」

「奇遇ですが、私ミネーラの出身なんです。ミネーラに戻って、のんびり暮らそうと思っています」

ミネーラは学校で習ったことがあった。ドラールに滅ぼされるまでミネーラ王家があったところだ。

「学校で習いました。いい所だそうですね」

ミラバ艦長は驚いたような不思議そうな顔をする。

「お母さんから、何も聞いていないのですか？」

母に何を聞いているはずだと言うのだろう。ミネーラの事など一度も聞いたことがない。

「いいえ」

そう、答えたが、ミラバ艦長は驚いたようにメレッサを見つめている。

「ミネーラはルニーさまの故郷なんです」

ミネーラが母の故郷！　そういえば母の昔の事を何一つ知らない。母は父の事も母の事も何も話さなかった。最近になって父の事はわかったが母のことは何も知らない。

「そうなんですか、ぜんぜん知りませんでした」

ミラバ艦長はため息をついた。

「そうですね、じゃあ、ここで終わりにするおつもりなんでしょうね。それもいいかもしれん」

彼は意味不明の事を言う、何を終わらすと言うのだろう。

「ところで、ルビルで探したい人がいると言っておりましたが、どうします」

もつと質問をしようと思ったが、艦長が話題を変えてしまった。ルビルにいた時、メレッサに好意を持ってくれる人がいた。恋人といってもよかった、彼といると楽しかった。彼がどうなったか知りたかった。

「フォラストといいます。探せますか？」

「探査機を送り出してみしよう、探せるかもしれません」

「メレッサ姫」

コリンズとセラブ提督とあと数人がメレッサの所にやってきた。やっと、私を仲間外れにしたことに気がついたみたいだ。

「ルビル軍から攻撃を受ける危険性があるようです」

コリンズの声は緊張している。それが、何を意味するのかよくわからない。

「敵は本艦を狙っているそうです」

「本艦って、この船のこと？」

なぜ、よりによって私が乗っているこの船を？

「本艦には、メレッサ姫がご乗艦になつていますから、敵としてはこの船を沈めることができれば大戦果です」

つまり、自分が乗っているからこの船が狙われているのだ。お姫様とはそれほどいいものでもない。命を狙われる。

「それで、どうするんですか？」

「地下にレーザー砲が隠してあるらしいです。そこを攻撃するかを検討中です」

「なぜ、すぐに攻撃しないの？」

「なにをもたもたしている。今すぐ攻撃すべきだ。自分が死ぬかもしれないと言うのに。」

「情報が未確認なのです。その場所は単に人々が地下に避難しているだけの場所かもしれないのです」

「未確認？」

「その地下には千人くらいの人がいることは分かっています。避難民です」

「そんな、そんな所を攻撃できるわけがない。」

「そこを攻撃するの？」

「攻撃すべきです。かなり確度の高い情報です。姫君、攻撃命令をお願いします」

セラブ提督が自信たっぷりに言った。

攻撃命令？

「私が、攻撃を決めるの？」

「コリンスがうなづく。」

「指揮権は姫君がお持ちです。攻撃命令は姫君が下されることになります」

「そうなのだ、ここで一番偉いのは私なのだ。私がそれを決めなければならぬ。」

「そこには避難民がいるんですよ」

「そうですね、姫君に万が一の事があつては一大事です。ここはわずかな危険にも対応しておく必要があります」

「つまり、私の安全のため、念のために千人殺しておこうということか。」

「そこにレーザー砲があることは確実なんですか？」

「確認はできていませんが、ほぼ間違いありません」

「レーザー砲があっても攻撃してくるとは限らないでしょ、ルビルは降伏したんじゃないの」

「ルビル軍の統制は混乱状態です。敗残部隊が単独で攻撃してくる可能性はあります」

わからない。でも自分の安全のために千人も殺せない。

「情報は未確認なんですよ。まず、情報を確認してください」

「では、攻撃はそれまで待てと？」

セラブ提督が念を押す。

「そうです。確認が先です」

セラブ提督の緊張した顔がゆるんだ。

「姫君は度胸がありますな。攻撃を受けるかもしれんですけど、怖くありませんか？」

「大丈夫です」

緊張して答えた。怖い、むしろドラールの宇宙船が上空に現れた時の方が怖かった。

メレッサの乗っていた船は巨大宇宙戦艦の陰に入った。地上からの攻撃を避けるためだ。艦内は戦闘体制になっていてミラバ艦長が珍しく仕事をしている。メレッサの部屋の窓からはルビルは見えなくなった。

コリンスがやって来た。

「怖くありませんか？」

コリンスが心配してくれる。

メレッサには、まだ、戦争というものがよくわかっていなかった。宮殿型宇宙船の中で何不自由ない豪華な生活をしていて、ここが戦場などとはとても思えない。

首を振ると。

「それはよかった。この船はミルビスの陰にいますから、絶対に大丈夫です」

やっぱりミルビスとは、あの巨大宇宙戦艦の名前だったのだ。

「ミルビスは大丈夫なんですか？」

ミルビスに乗っている人は大丈夫かと聞いたつもりだった。

「ミルビスは巨大戦艦ですから、大丈夫です」

乗っている人のことなんて考えてないみたいだった。どんな人でも死にたくないはずなのに、自分が特別扱いされるのが申し訳ない気がした。

「さて、ルビルに守備隊を置いておく必要があります。ルビル攻撃軍から二個師団を分離して守備隊にしたいと思いますがいかがでしょうか？」

こんな話は今までに何度もあった。メレッサはなにも分からないからコリンスの提案を承諾するだけだ。事実上コリンスの思い通りだった。

「わかりました」

なんとなく腑に落ちないが、承諾するしかない。

「守備隊長にはザロフ艦長を准将に昇格させて守備隊長にしたいと思いますが」

メレッサはミラバ艦長のことが頭に浮かんだ。彼は提督になりたと言っていた。

「二個師団つて、どのくらいの規模なんですか？」

珍しくメレッサが質問したので、コリンスはビックリしている。

「中型の宇宙戦艦20隻くらいの規模です」

宇宙戦艦20隻を指揮できるのなら、ミラバ艦長は満足だろう。すべてコリンスのいいなりではどっちが偉いかわからない。

「守備隊長にミラバ艦長はどうかしら」

言ってみた。

コリンスはビックリしてメレッサを見ている。

「彼が守備隊長では、おかしいことになるの？」

とんでもない間違いをしていたらいけないので確認してみた。

「いえ、そんなことはありません」

「では、ミラバ艦長を守備隊長に」

メレッサはかなり強い口調で言った。

コリンスは、どうしたものと悩んでいる様子だ。

「失礼ですが、姫君、なぜ、ミラバ艦長とお考えなんですか？」

理由をいちいち部下に説明しなければならぬのか、ちよつと腹が立つので、いいかげんな説明を思いついた。

「あなたが昇格させれば昇格になった人はあなたに感謝するでしょ。でも、私が昇格させれば私に感謝するわ。それだけ」

彼は不思議な目でメレッサを見ていた。重大なミスを指摘された子供のような目だ。

「いえ、決してそのようなつもりはありません。ザロフ艦長はセラブ提督の推薦です」

彼はあわてて取り繕っている。

「もちろん、事前に人選をしておいたのは、姫君はまだおわかりにならないだろうと想着のことです」

今の言葉はよほどこたえたのだろう、彼は汗をかいている。

「私には、まったく他意がないことを、ご理解ください」

彼はまるで命乞いでもするように頭を下げた。

そこまでひどいことを言つたつもりはないのだが。彼は処刑されかねないと思つているようだった。

「では、ミラバ艦長でよろしいですね」

「すぐに手配いたします」

彼は素晴らしく従順に答えた。

ルシール姉さんではないが、たまには部下にきついことを言つた方がいいみたいだ。

16・守備隊長

ミラバ艦長がやってきた。メレッサが呼んだのだ。彼に昇格のこ
とを早く伝えたかった。

彼はうれしそうににこにこしている。もう知っているはずはない
のだが。

「姫君、お喜びください。誤報だとわかりました」
「なにが？」

「レーザー砲のことです。地下には避難民だけでレーザー砲はあり
ませんでした」

そうか、そっちの問題もあつたのだ。

「姫君のご英断でした。もし攻撃していたら避難民を殺すところで
した」

よかった。千人もの人を殺さなくてすんだ。

「本艦の戦闘体制は解除します。ただ、念のためこのままミルビス
の陰に留まります」

その方がいい、巨大宇宙戦艦の陰にいれば地上からの攻撃は届か
ない。

艦長はおっとりした目でやさしくメレッサを見ていた。彼は、い
つの間にか心を開いてしまうような魅力を持っている。

昇格のことを聞いた時の艦長の喜ぶ顔が浮かんた。

「ミラバ艦長」

メレッサは改まった態度で言った。

「はい」

「あなたは、たくさんの船を指揮してみたいと言っていたわね」

「はい」

「20艘ほどの船の指揮をしてみない？」

「……」

「あなたに、ルビル守備隊長をやって欲しいの」

艦長は驚いていたが、すぐに困惑の表情になった。

「なぜ、私に？」

理由を質問されるとは思っていなかった。

「でも、艦隊の指揮を試してみたいと言っていたでしょう」

「ですが、私は出世コースから外れた万年艦長です。セラブ提督が認めないでしょう」

セラブ提督の承認が必要だと言うのか。自分の権力は制度上だけのもので、実際にはこのようなことを決める力はないと。

「セラブよりあたしの方が上よ」

かなり、むかついて言った。

「姫君、このような人事を好みで行なってはいけません。守備隊長には私よりもっと適任の艦長がいるはずですよ」

艦長は子供を諭すように言う。

メレッサは怒りがこみ上げてきた。始めて自分の意志で何かを決めようとしているのに、回りから反対される。そして一番喜んでくれるはずの人からも反対される。

「指揮を試してみたいって言うてたじゃない」

メレッサは怒りをぶちまけた。

「姫君のお心は、ありがたいのですが」

艦長は丁寧に断る。

メレッサはどうしようもない怒りと脱力感に襲われた。自分にはなんの力もない。権限だけでは人は動かないのだ。

たぶん、ひどい顔をしている。艦長にこんな顔は見せられない。

メレッサは艦長に背を向けると数歩離れた。

「姫君、私が受けないとお困りになるのですか？」

困る、コリンスにどう言えばいい。ふと、さっきコリンスに言った理由を思いついた。

振り返って艦長を見た。

「私は、このルビル攻撃軍を父からもらったでしょ。でも誰も親しい人がいない。だから私の気持ちができる人に重要なポストに

いて欲しいの」

怖い目で艦長を睨みつけるように見つめた。

艦長はうなづいている。

「そのような理由なら納得できます。わかりました、お受けします」
「やっと引き受けてくれた。思わず笑みがこぼれた。自分で何かを決めるって大変なことだとはじめて分かった。

「私のことを、そのように思っていてくださるなんて思っても見ませんでした」

艦長は遠くを見つめるように、窓の外を見ている。

「私は20年前、ミネーラの王女をお守りすることができませんでした……。ミネーラがドラールに攻撃された時、私は王宮を守る守備隊にいたのです。王女のお顔は遠くから何度か拝見したことがあります、美しい方でした。でも……、お守りすることができませんでした」

つらい思い出なのだろう、彼は悲しそうな顔をしている。

「しかし、今度こそ姫君をお守りします。私の命に代えてもお守りいたします」

彼のミネーラの思い出が、なぜ今の決意につながるかよく分からなかったが。艦長にそう言ってもらえそうれしかった。

ルビルに来て2日たった。

宇宙船はルビルに向けて降下を開始した。メレッサはブリッジの一番前に立っていた。ここからだとはば真下まで見えるのだ。

前方を無数の宇宙戦艦が広範囲に広がって降りていく。もう先頭は見えないくらい先の方にいる。前方やや下を巨大宇宙戦艦ミルビスが降下している。

眼下にはルビルの広大な大地が広がっていて、白い雲がいく筋も伸びていた。

真下に巨大な黒い穴が見えてきた。

「陽子砲の跡です」

いつ、メレッサの横にきたのかミラバ艦長が彼女の横にいて、説明してくれた。

「ご希望どおり、タラント家の上空に向かっています」

メレッサはタラントさんの家がどうなったのか知リたかつた。しかし、警備上の理由で行くことはできなかったが宇宙船で上空まで行ってくれることになっていた。

宇宙船は徐々に高度を落としていく。雲の下まで下がってきて、地表がはつきり見える。家々が散らばっていて、道路が這うように走っている。

ふと気がつくと、周囲の船も同じ方向に向かっていている。メレッサのわがままのために艦隊全部がタラント家に向かっていているのだ。

「他の船は直接、首都に向かって下さい」

メレッサは艦長に言った。いくらなんでも、艦隊全部を引き連れて寄り道するのは気が引けた。

「いえ、本艦が旗艦ですので、艦隊が旗艦から離れるのは無理です」
そうなのか、それでは仕方がない、ちょっと気が引けるが、艦隊全部を引き連れてタラントさんの家に行ってみるのもおもしろいかもしれない。艦隊は大小合わせて800隻くらいある。それが全部タラントさんの家の上に浮かぶのだ。セシルが見たら驚くだろうなと思うと愉快だった。

どんどん低くなつてきて、タラント家がある草原が見えてきた。やがて、個々の家が見分けられるようになってきて、その中の一軒にタラントさんの家があった。無傷のように見える。

上空にもものすごい数のドラール軍の宇宙戦艦が浮かんでいるので、人々がびっくりして家から飛び出してくるのが見えた。驚いて上を見上げている。

「高度を落としましょう」

宇宙船はぐんぐん降りていく、下の家がつぶれるのではないかと思うほど低い所へ降りてきた。

タラントさんの家は目の前にあった。タラントさんが庭に出てく
るのが見えた。セシルもいる。

手を振ってみたが、こちらには気がつかないみたいだった。

メレッサは今は綺麗なドレスを着ているし、髪型も変わっている。
メレッサと分らないのかもしれない。

「ありがとう、もういいわ。あんまり驚かすと悪いし」
「了解しました」

宇宙船はぐぐつと高度を上げ始めた。周囲の宇宙船も一緒に高度
を上げる。あつと言う間に雲より高くなってしまった。

艦隊を引き連れての寄り道はちよつと気が引けた。艦隊の乗組員
が何と思っているかを考えると恥ずかしくなる。まあ、いい、あた
しが一番偉いんだから、誰からも怒られるわけじゃない。メレッサ
は気にしないことにした。

17・任命式

今日は総督の任命式が執り行われる日だった。総督の任命によってルビルの支配者をルビル全体に宣言するのだ。今日の任命式に合わせて通信設備も復旧する。全土で任命式の様子を見ることが出来る。

メレッサは控え室で台詞の練習をしていた。彼女が話す言葉が一言だけあるのだ。

ミラバ艦長が控え室に入ってきた。

「いかがです？」

メレッサはガチガチに緊張していた。

「ルビル全土に放映されるんでしょ、もう、頭が真っ白」

艦長は笑っている。

「偉そうにふんぞり返って座っていればいいんですよ」

艦長はポケットから書類を取り出した。

「姫君、フォラストさんの居所がわかりました」

搜索を頼んでいたフォラストだ。

「よかった、無事なの？」

「はい、ご無事だそうです」

ほっとした、戦争で死んだのではと心配していたのだ。

「どうします？」

会いたかった。家族は無事だったのか、ぜひ、会って話がしてみたかった。

「ここへ連れてきて」

任命式のことと頭がいっぱいで、彼が会っのをいやがるかもしれない、という事まで考えなかった。単に、ここへ来てもらって話をしようと思ったただけだった。

時間が来て、式場に向かった。

広場には数万人の人が集まっていた。正面に舞台が作っておりそ

の中央が高くなっていて、そこに豪華な椅子が置いてある。その椅子に座らなければならないのだ。もちろん舞台の前面は防弾ガラスで守られている。

「姫君、どうぞ」

コリンスが合図する。

舞台の袖から中央に向かって歩き始めた。宙を飛ぶカメラが彼女の回りを飛び回り撮影している。ひな壇に登り、中央の椅子に座った。緊張で回りの事がまったく何にもわからない。

次々に人が舞台上がってきて、彼女に何かを言っては頭を下げて帰っていく。彼らが誰で何を言っているのか全然聞いていなかった。

やがて新総督が上がってきた。メレッサに頭を下げている。と、耳元のイヤフォンから「お言葉をお願いします」と、コリンスの声が聞こえた。

「そなたを、ルビルの総督に任命する」

練習したとおり、できるだけ威厳を持って言った。これで彼女の仕事は終わりだ。

ほっと一息つけ、やっと回りの様子を見ることができるようになった。舞台の前には椅子が並べられていて、ものすごい数の人がはるか遠くまで整然と並んで座っている。宙に浮くカメラが何台も彼女を撮影している。

ルビル全土の人が彼女の姿を見ているのだ。友達やタラントさん一家も見ているだろう。どう思っているだろうか、支配者としての彼女を苦々しく見ているのかもしれない。

「姫君、退場をお願いします」

不意に耳元から声がした。コリンスだ。立ち上がるとゆっくりと舞台の袖に向かって歩く。ずいぶんと遠く感じたが、何とか袖にたどり着いた。

「お疲れさまです」

コリンスが笑っている。

「緊張したあ」

メレッサは崩れ落ちるようにコリンスにつかまった。

「ご立派でした」

コリンスはほめてくれる。

「もう、こんなこといや」

「いえ、姫君ですから、少し慣れていただかねばなりません」

これがお姫様の仕事なのだ。まあ楽な仕事ではある。

「もう少し頑張ってください。ここを出るまで」

「了解です」

コリンスと控え室に入った。メレッサは倒れるように椅子に座った。疲れて足ががくがくする。

コリンスはメレッサの前に立っている。コリンスは今日は一日中立っていたはずだ。

「コリンス、座ったら」

「いえ、大丈夫です」

コリンスは真面目なので、メレッサの前では決して座らない。疲れているから座ったらいいのに。

「コリンス、命令です。座んなさい」

「いえ、私は慣れていきますから」

椅子にずっと座っていた私がこんなにきついのに、もっと大変な仕事をしていたコリンスはもっと疲れているはずだ。それなのに休もうとしないコリンスに少し腹がたった。

「コリンス、私の命令が聞けないのですか」

メレッサはきつい口調で言った。何が何でも座らせてやる。

彼は戸惑っていたが、命令とあれば従うしかないと思っただろう、近くの椅子に浅く腰をおろした。

「あなたが座らないと、私もゆっくり休めないわ」

「すみません」

彼は居心地が悪そうに座っている。メレッサはコリンスを見ていた。

彼はすごく真面目で、仕事もできて、しかも整った顔をしている。彼は私のことをどう思っているのだろう。お姫様としか思っていないのだろうか。すこし、からかってみたくなった。

「コリンス、あなたって立派ね、惚れ惚れしちゃう」
コリンスは驚いたようにメレッサを見た。

「そろそろ、提督の演説です。確認してきます」

彼は、ほとんど休まずに部屋を出て行ってしまった。

18・旧友

メレッサの乗る宇宙船は草原に着陸していた。窓からははるか地平線までつづく草原が見える。任命式が終わったので仕事は終わりのだが、もうしばらくここにすることにしていた。

メラバ隊長が入って来た。今は艦長ではなくてルビルの守備隊長なのだ。

「フォラストさんを連れてきてあります」

隊長はちよつと浮かぬ顔をしていたが、そんなこと気にしなかった。

「フォラストが来ているの？」

「お通ししますか？」

「もちろん、すぐお通しして」

フォラストと会える。うれしかった。彼女のことを一番分かってくれる人だ。

衛兵に両腕を抱えられて、フォラストが入ってきた。なぜ、衛兵が彼を捕まえるようにしているのか理解できなかった。

「俺をどうするつもりだ。ペットにして飼うつもりか」

彼はどなった。メレッサを敵意をむき出しにして睨む。

「むりやり、こんな所に連れてきて、支配者か、いい身分だな」

メレッサはしばらく呆然と立っていた。

やがて状況が理解できた。彼は私に会いたくなかったのだ。しかし、連れてこいと命令したので、まるで罪人を捕まえるようにして無理に連れてきたのだ。今はすごい権力があるのだから言い方に気をつけないといけない。

「お前が何をしたのか分かっているのか。故郷を爆弾で吹き飛ばしたんだぞ。どれだけの人が死んだと思ってるんだ」

ルビルの人から恨まれているだろうなとは漠然と思っていたが、始めて現実を突きつけられた。

涙がぼろぼろ出てきた。

「偉そうに、支配者としてやって来やがって。俺に会ってどうするつもりだったんだ」

メレッサは彼の罵倒にじっと耐えていた。涙がぼたぼた床に落ちた。彼は私を憎んでいる。殺しても飽き足りないくらいに。

「俺がお前と会って喜ぶとも思っているのか？」

彼と過ごした日が頭に浮かんだ。あんなにやさしかったのに。そう思うと耐えられなくなった。急に振り向くと、隣の寝室に逃げ込んだ。ベットに突っ伏して思いっきり泣いた。

2時間くらい、もんもんとして泣いていた。泣きつかれて涙が出てこなくなった。ぼんやりしているとミルシーがやさしく抱き起こしてくれた。

「顔を洗ってはいかがです？」

ミルシーに進められるままに、顔を洗って涙の後を拭いた。鏡の前に座ってミルシーが髪を梳いてくれる。

「あの、フォラストさんは、どうしましろう？」

ミルシーが聞く。

「フォラストがまだいるの？」

ミルシーはうなづく。

しまった、またミスをした。自分にすごい権力があることをすぐに忘れてしまう。自分が許可しないと、帰ることも帰すこともできないのだ。泣いていたので誰も聞くことができなかったのだらう。

「すぐに帰ってもらっていいから。丁重に丁重にお送りして」

「わかりました」

ミルシーは隣の部屋に行ったが、しばらくして戻ってきた。

「お話をしたいそうです」

私に話を？ 何だらう。まだ文句が言い足りないのだろうか。

メレッサはおずおずと立ち上がると、隣の部屋に入った。フォラストは椅子に座っていた。

「すまん、ちょっと言いすぎたかなと思って。考えてみれば君にもどうにもならない事だったんだろうから」

彼は立ち上がった。

「それを、君が悪い見たいに言ってしまった。悪かった」

「いえ、そんな……」

占領計画書にサインしたから私は侵略者に間違いないのだ。

「なぜ、君がここの支配者なの？」

言いにくかった。彼の顔から目をそらした。

「父から……、ここをもらったの」

彼は自嘲的に笑った。

「途方もない話だな。じゃあ俺たちは君の所有物ってわけか」

「まさか、絶対にそんなことはありません」

彼は話題を変えようと部屋を見回した。

「広いへやだな」

ここは宇宙船の中なのでこの部屋は狭い方だった。

「よかったね。君の部屋は狭かったからな」

「そうね。信じられないくらい豪華な暮らしをしています」

彼は急に体をピシッと整えた。

「さて、帰っていいですか？ お姫様」

「もちろんです。お送りさせます」

彼は手を上げて笑顔で部屋を後にした。メレッサに気を使って笑顔で別れてくれたのだと思った。もう、彼に会うことはないだろう。彼だけでなく、もう、誰にも会いたくなかった。恨まれていることは間違いないのだから。

ベットに横になってぼんやりと窓の外を眺めていた。もう、ここは故郷ではないのだ。誰も親しい人はいない。ふと、携帯メールが気になった。セダイヤワに戻るとルビルのメールは届かなくなる、携帯のメールを見るなら今しかない。

メレッサは起き上がると、ポケットから携帯を出してメールを確認してみた。

十数通のメールが届いていた。ほとんどが安否確認のメールだ。学校時代の友達から何通も来ている。返事のメールを送ったものと悩んだ。ルビルの支配者になったメレッサの安否など誰も気にするはずがない、無事なのは今日の任命式を見ればすぐわかる。

でも、メールをくれたのは親しかった友達ばかりだ。せつかくメールをくれたのにこちらから無視するのは忍びなかった。

宮殿の暮らしぶりなどを、できるだけ控えめに書いてメールを送った。送り終えると、ごろんとベットに横になった。これで、友達とも終わりだ。返事などくるはずがない。

不意に、携帯が鳴り出した、親友のトモからだ。今のメールを見たのだろう。だが、電話に出るのは不安だった。さっきのフォラストとの事が頭に浮かぶ、トモから罵声を浴びるのを覚悟でボタンを押した。

立体画像でトモが現れた。

「今日テレビ見たよ。あんたすごいね」

トモはメレッサの事を気にしていないみたいだ。

「私のこと、恨んでないの？」

「なぜ、あんたのせいじゃないでしょ」

そうとも言いきれないのだが。

「みんな無事なの？」

急にトモは静かになった。

「だいぶ死んだ。死んだ人のメールが回ってるからあんたにも送るね」

つらいメールだ、見たくなかったが誰が死んだのか知っておかなければならない。

「トモの家族は？」

「私の所は大丈夫」

よかった。

「あんたのおかあさんは無事なの？」

「ええ、無事よ。いま、父の宮殿にいる」

「父って、ドラール皇帝のこと？」

メレッサは申し訳なくうなづいた。

「あんた、すごいことになっちゃったのね。じゃあ、皇帝に会ったの？」

もう一度うなづく。

「思ったより優しい人だった」

「あのドラールが……、ごめん、あんたのお父さんだったね」

「いいよ、人を殺すことを何とも思っていないんだってこともわかった」

「ねえ、会える？ そっちに行っていていい？」

ここへ連れてくるのは抵抗があった。さっきのフォラストだって、こんな豪華な宮殿を見せつけられたら頭にくるのもわかる。しかし、トモの所へ行くのは無理だった。外に出れば命を狙われることはメレッサにもよくわかっていた。

「今、どこにいるの？」

ここに連れてくるしかないようだった。

「宮殿型宇宙船。じゃあ迎えを送るね」

ミルシーに迎えを出すように指示した。今度はトモがいやがったら連れてこなくていいと念を押した。

メレッサは宝石などを全部外した。こんな物を着けてトモに会えない。着替えようとしたが質素な服などなかった。

飛行車はすぐに戻ってきた。宇宙船のエアロックまで迎えにいった。

「メレッサ、すごいドレスね。それが普段着なの？」

トモが飛行車から降りてきた。

「もっと、ラフなのに着替えようと思ったんだけど、なかったの」

「これ、皇帝の宇宙船なの？」

本当はメレッサの宇宙船だったが、そうだと気づいた。

「あんたの部屋、どこ？」

「こっち」

ベットがある部屋に案内した。それ以外にもたくさん部屋があるが、ベットのある部屋が一番自分の部屋と説明するのに都合がよかった。

「すごい部屋ね。お姫さまの暮らしをしてるんだ」

「信じられないような豪華な暮らしよ。まだピンとこないわ」

ミルシーがお茶とお菓子を持ってきてくれた。

「ほかの部屋は何なの？」

「提督とか総督の部屋」

全部自分の部屋とは言えなかった。

「なんで、あんたが、任命式に出たの？」

「父の代理でよ……」

嘘をつき始めると、止め処がなくなる。メレッサは果てしなく嘘を並べ始めた。

「この宇宙船も戦争用なの？」

「いえ、これは住むための宇宙船」

本当は、この船が旗艦だから戦争の中枢になる船だ。

「ドラルの宇宙戦艦が飛んでるのを見ると嫌になるわ。あなたから皇帝に頼んで撤退させてくれない」

「わかった、頼んでみる……」

ルビルにいる宇宙戦艦は全部メレッサの宇宙戦艦だ。しかも、しばらくは撤退させるわけにはいかない。

トモの前でいいメレッサになろうとすればするほど嘘が増えていく。だんだんいやになってきた。しかし、本当の事を言えば絶対に嫌われる。嫌われるのもいやだった。

「みんな、あなたがルビルの支配者だと言ってるわ。なぜなの？」
ついに嘘がつけなくなった。違うと嘘をついてもいいが、すぐに分かってしまう事だ。

「ルビルを……父からもらったの」

「えー、なに、それ。そんなことできるの？」

トモは驚いている。

「ルビルでの戦争の被害をできるだけ少なくしたかったの、だから父にくれって言ったら、くれた」

メレッサは本当の事を話し始めた。親友に自分が何をしたかを説明しなかった。嫌われてもいい。親友なら自分がしたことを説明しなきゃ。

「くれたって、ルビル全部を？」

トモはルビルをもらった事に驚いているが、もっと驚く事を説明しなきゃならない。

「ルビルでの、殺りくを止めたかったの、父が占領をやれば殺りくになる。……だから……、ルビルを攻撃している軍隊も、もらったの。私がやったから、死者の数はうんと少なかったはずよ」

トモはびっくりしてメレッサの顔を見ている。

「ここを攻撃したのは、あなただって言うの？」

メレッサは頷いた。

「途中からはそう。もちろん占領そのものを止めたかったんだけど、それは許されていなかったの」

「どううこと。どれだけ人が死んだと思っているの？」

返す言葉はなかった。自分が引き継いでからの死者は少なかったとは思うがそれでも死んでいる。

「あんだ、なにやったかわかってるの。誰が死んだか言ってごらんなさいよ」

「私は、できるだけ犠牲を減らそうとしたの」

「軍隊をもらったって！ なに考えているのよ」

「私がやらなかったら100万人くらいの死者が出そうだったの」
「本当はどうすべきだったんだろ。100万人死ぬことがわかっていても、このようなことをするべきではなかったのだから。」

「あなたって最低。確かに、まちがいなく、ドラールの娘ね」

トモは食べかけのビスケットを床に投げ捨てた。

涙が出てきた。父の寂しさがわかったような気がした。人殺しをやって友達が欲しいなんて

贅沢なのだ。

「帰る。送って」

「わかった。すぐ送らせる」

トモは扉をボタンと閉めて出ていった。

何でもできる豪華な暮らしをしているが、友達は手に入らない。

次の日、予定を早めてルビルを出発した。

トモから送られてきた死者の名簿を見た。メレッサが住んでいた町の死者の名簿らしく、おびただしい数の名前が並んでいる。知っている名前もたくさんあった。タラントさんの長男ジョンも載っていた。

19・父への報告

メレッサはコリンスと父の執務室にいた。ルビルの占領が完了した事を父に報告するためだ。

父は機嫌がいいのか悪いのかわからないような顔をして、メレッサが提出した書類を読んでいる。もちろんこの書類はコリンスが作ったものだし、父に報告に行くように手配したのもコリンスだった。書類の内容は事前にコリンスに説明してもらったが、難しくてよくわからなかったが、それを父は熱心に読んでいる。

父は書類を半分ぐらい読むと、不機嫌に机の上にほおり投げた。「甘すぎる、なんだ、この講和条件は！」

メレッサは、ルビルを約束通り占領したのだから、父が褒めてくれるのではないかと思っていた。だから、父が不機嫌なのはちよつとショックだった。

「どこが、いけないんですか？」

「ルビルの元大統領と閣僚は処刑しろ」

父は不機嫌に言う。

また人を殺せと言う。もう人を殺すのはたくさんだった。

「もう戦争は終わって彼らは降伏したんです。殺す必要はありません」

また、やっかいな事になりそうだった。しかし、何とか父を説得しなければならぬ、でないと、せつかく助かったと思っていた人がかわいそうだ。

「帝国に逆らった者は殺す。これが掟だ！」

父は冷たい目でメレッサを睨みつける。

「媾和にあたっては、元大統領の命は保証していません、処刑は可能です」

横からコリンスが口をはさんだ。

せつかく私が殺さずに済むように苦勞しているのに、それに水を

差すような事を言う。

「コリンス、もう人は殺したくありません」

メレッサは言ったが、コリンスはさとすような目でメレッサを見る。

「姫君。いままで占領した星の指導者はすべて処刑しています。だから、今回も例外ではありません」

メレッサはあぜんとしてしまった。コリンスが父の側についてしまった。

「コリンス。これ以上、人は殺しません」

メレッサはコリンスが自分の味方になってくれないことに憤慨していた。このままでは父とコリンスの二人を相手にしなければならなくなってしまう。

「姫君、処刑すべきだと思います」

「絶対に処刑させません」

メレッサは次第に興奮してきた。自分に逆らうコリンスに腹が立つ、コリンスは私の部下ではないか。それにコリンスの考えがわかってきた。処刑したかったのだが、私に相談したら私が反対するから、この話は皇帝の所で決めようと思っていたのだ。

「メレッサ。黙って処刑しろ」

父が冷たく言う。

「絶対にいやです」

メレッサも強情だった。こうなったら意地でも処刑したくない。

「メレッサ！」

父が怖い声で一喝する。

しかし、コリンスがメレッサに逆らっているから簡単には引き下がれない。ここで引き下がったら以後コリンスに示しがつかなくなる。メレッサは必死で考えた、何とか切り抜けなければならない。

メレッサは間をとるため、椅子にゆったりと座り直した。

「コリンス、父と二人だけで話があります。席を外しなさい」

特に話があった訳ではないが、敵を一人減らしておかないと二人

も相手に戦えない。

コリンスは驚いていたが、しかたなく席を立つと敬礼してから部屋を出ていった。

父は何の話かとメレッサを見ている。

父に正面から議論をふっかけても勝つ見込みはまったくなさそうだった。むしろ甘えてみたらどうなるだろう。

「おとうさんは、以前、『この埋め合わせはする』って、おしゃっていたでしょう」

メレッサは急に品を作って猫なで声を出した。

しかし、父は険しい顔を変えない。

「ここで、埋め合わせ券を一枚使ってはだめですか？」

メレッサが首をかしげると、父は思わず顔を崩した。

「なんだ、その『埋め合わせ券』ってのは？」

「埋め合わせを、あたしが必要な時にしてもらうための回数券です」

父は微笑みが出てくるのを苦勞して我慢している。

「その、埋め合わせ券とやらは、何枚あるんだ」

「10枚……」

メレッサは父の顔色をうかがった。厳しい顔をしている。

「5枚でも、いいです」

「埋め合わせは、他に考えてある」

父は厳しく言う、でも、顔がどこか笑っている。

「私にも、いろいろ都合があるんです。このままじゃコリンスにバカにされます」

たぶん、父は子供からこんな風に甘えられた事がないのだろう、父はうれしそうにしている。

「お願い」

メレッサは手を合わせて頼んだ、相手が怖い父だということを意識せず出きるだけ愛嬌を振りまいた。

それでも父は何も言わずにじっとしていたが、やがて、諦めたようにため息をつくと椅子に体をあずけた。

「わかった、好きにしてい」

「ありがとう、お父さん」

メレッサは感謝の気持ちいっぱい父を見た。父は子供に親しくされたことがないのか、こういう表情をしたらいいか分からないらしい。

「もういい。行け」

父は照れくさいのか、話を切り上げようとしている。

メレッサは立ち上がると、体を下げるお辞儀をして部屋から出ようとした。

「メレッサ」

父が呼び止めた。

「埋め合わせ券はあと4枚だからな」

メレッサは思わず笑った。

「ありがとう、お父さん」

父とも打ち解けてきたように感じた。ちょっと手を振って扉を閉めた。

外に出ると、コリンスが待っていた。

「どうでした？」

心配そうに聞く。

「このバカ。絞首刑にしてやるから覚悟していなさい」

コリンスは少し体を引いたがそれでも心配そうだ。

「で、どうなったんです？」

「うまくいったわよ」

「では、処刑はなしですか？」

「大統領のはね」

コリンスは驚いたように頷いている。

「姫君はたいしたものです。皇帝のお子様の中で、皇帝に逆らえるのは姫君だけです」

コリンスが自分の処刑を心配しないのに少し腹が立ったが、まあ

冗談だと分かっているのだろう。半分は本気だったんだが。

20・初陣

ジヨル兄さんの宮殿で、兄弟の上4人が集まって一緒に食事をした。兄弟は住む所が違うので、こうでもしないとなかなか兄弟と会う機会ができない。前回と違って父がいないので楽しい食事会になりそうだった。

丸いテーブルに4人で座った。

給仕がお酒かジュースを注いでくれる。メレッサはジュースをもらった。

ジヨルがグラスを持ち上げる、何かに乾杯するらしい。

メレッサもみんなに合わせてグラスを持ち上げた。

「メレッサ。初陣、おめでとう」

なんと、メレッサに乾杯してくれた。他の2人も祝福してくれる。

「初陣？」

驚きだった。ルビルを占領した事を初陣と言っているらしい。メレッサは初陣なんて感覚はまったくなかった。

「いえ、わたし、初陣なんて……」

初陣なんてテレビの時代劇でしか知らなかった。でも、皇帝は武将と同じようなものだから、その子供にとって、初めての戦争体験は初陣になるのかもしれない。

「初めての戦争はどうだった？」

ジヨルが聞く、初陣の自慢話でもしたらといった感じた。

「いえ、戦争は全部セラブ提督とコルンスに任せていたんで、あたしは何もしていません」

メレッサはあわてて否定した。これは初陣などと言えるものではない。

「僕だってそうさ、戦争なんて家臣に任さなきゃ出来るわけがない」
ジヨルはなんとかメレッサを引き立ててくれようとしてくれる。

「メレッサが俺より先に初陣かあ」

フォランが悔しそうに言う、フォランは17歳で兄弟の中で3番目だ。

「フォランはまだ戦争に行ったことがないのよ」

ルシールが少し嫌味っぽく教えてくれた。

「これは、初陣じゃないです。あたしは本当に何もしてないんだから」

メレッサは懸命に初陣を否定した。フォランを追い越したと思われたくない。フォランと仲良くしたいのに。

「あんた、遠慮しすぎ。もっと自慢しなさいよ」

ルシールがメレッサの背中を押す。

「いえ、あたし、戦争の間ずっとここにいたんです」

「戦争に行っていないの？」

フォランがビクリしている。

「ええ、行ったのはルビルが降伏してからよ」

メレッサがそう言うのとフォランが急に体を乗り出した。

「それじゃ、初陣とは言えないじゃないか」

フォランがひどい話したと言わんばかりに言う。彼はメレッサに先を越されたのがよほど悔しいらしい。

「そうなの、だから初陣じゃないの」

メレッサは初陣説を否定しようと躍起になっていた。

「でも、あんた、占領軍のトップだったんでしょ。全権限を持って戦争したのは兄弟であんたが始めてよ。全軍を指揮していたんだから、どこにいても初陣よ」

ルシールはメレッサを応援してくれる。ルシールはメレッサが遠慮しすぎるのが気にいらならしい。

「戦場にいなきゃ初陣じゃない」

フォランは頑なになっている。

このままではフォランとの間に亀裂ができてしまう。

「ねえ、初陣じゃないってことにしない。あたしは初陣のつもりはなかったの」

兄弟の考え方はどこかメレッサとは違っていた。初陣なんて、そんなものに何の価値があるのかわからない。メレッサが妥協案を出す。とりあえずその場は収まった。

給仕が料理を運んできて、食事が始まった。

「メレッサは、なんと言うか、下女みたいな事をしていたの？」

フォランが言いにくそうに聞く。

「下女じゃなくて、メイドね、まあ同じようなものだけど、ご主人さま一家の食事の準備したり片付けをしたり大変だった」

フォランが言いにくそうにしているのが分らない、メレッサはメイドをしていた事を何とも思っていないかった。

「よくそんな事ができたね。何と言うか、そんな卑しいこと」

メイドの仕事が卑しいなんてひどい偏見だ。確かにきつい仕事だが、りっぱな仕事じゃないか。

「メイドは卑しい仕事じゃありません。それに生きていくためには働かなければならないんです」

そう言ったが、兄弟達は生きるために働くということが分からないだろうなと思った。

「ご主人さまの機嫌を損ねると、殺されることとかあるの？」

フォランは執拗に尋ねる。単にそういう生活に興味があるだけなのか、それともメレッサに対抗意識があるのか。

「機嫌を損ねても、殺されることはないけど。結構、意地悪をされたわね」

「へえ、どんな事？」

フォランは嬉しそうに聞く、どことなく嫌な感じだ。

「雑巾をぶつけられたり、水をかけられたりしたわ」

セシルの顔が浮かんだ、ずいぶんひどい事をされた。

「そんなひどい事されたの？」

ルシールがびっくりしている。

「それで、ルビルが欲しかったんだ。意地悪した奴は殺した？」

ルシールの考え方は極端だ。セシルを殺すためにルビルをもらっ

たと思っている。

「いえ、殺したりしないわよ」

「なぜ!」

ルシールは理解できないといった顔をしている。

なぜって言われても、仕返しに殺すのはひどすぎる。

でも、今なら殺そうと思えば殺せる。警察も裁判も関係なしにセシルを捕まえてきて殺すことができる。セシルを殺したいという誘惑が湧き上がってきた。権力があると恐ろしい事を考えるようになる。メレッサはあわててその気持ちを抑えた。

「意地悪されただけで、殺すのはひどいと思うわ」

「絶対に殺さなきゃ。一番苦しい方法で殺すのよ」

ルシールは憤慨している。

「ひどい子がいたけど、もういいの」

メレッサはバカな事を考えそうになっている自分に言い聞かせた。皇帝の家族は完全に法律の外にいて何をやっても罰せられることはない。罰することが出来るのは父だけが、人を殺したぐらいではあの父は気にもしないだろう。

「あんた、変わってるね、やさし過ぎるよ」

ルシールは納得できないみたいだ。でも、世間の常識からすれば変わっているのはこの家族の方なのだが。

給仕達がつぎつぎと料理を運んでくる。

その日は夜遅くまで、兄弟達と楽しく過ごした。

21・領地の視察

宇宙船はミダカに到着し高度を落としていた。

メレッサは自分の領地を自分の目で見にやってきたのだ。領地を持つなら自分の目で領地を見ておいた方がいいと母の助言に従ったためだった。

メレッサは母と窓の横に座って下を見下ろしていた。ミダカは緑の綺麗な星で広大な農園が広がっているのが見える。

宇宙船が高度を落とすにつれて都会の上空に入ってきた。人々の家が見えるが道路は狭くごみごみした感じだ。

ミダカの総督府が見えてきた。しかし、総督府の前にもものすごい群集が集まっている、デモだろうか。ルビルの経験から考えて支配者である私は嫌われているはずだから、私を非難するデモかもしれない。

宇宙船は群集の上を通過して総督府に向かって行く。メレッサは窓から下の群集を見ていた。あちこちに横断幕が広げてある、何と書いてあるか読みたかったが小さすぎて読めなかった。

やがて、宇宙船は総督府の庭に着陸した。

宇宙船の下に開いた通路にメレッサは母と一緒にいた。通路の先には総督府の建物まで赤い絨毯が敷いてあって、通路の先には何人かの男が整列してメレッサを待っていた。

通路を降りると先頭の男が頭を下げた。

「私、ミダカの総督をしておりますデニルと申します。今日はミダカへお出でいただき光栄の限りでございます」

彼はいかにも管理者といった感じの背の高い人だった。

「大義です」

メレッサもこのような場面にはずいぶんと慣れた。できるだけ笑顔で答えた。

メレッサが先頭に立って赤い絨毯の上を歩いて行く。両側に衛兵

が外向きに並んで立っていた。すぐ目の前に総督府の建物があつて、その建物の向こう側がさっきの群集が集まっていた広場になっていたが、その広場からの群集の音がここまで響いて来る。

メレッサは総督府の最上階の大きな部屋に案内された。窓の向こうには広場が見えている。

「姫君、長旅お疲れ様でした」

デニルは気を遣ってくれる。

「あの群集はデモですか？」

群集は数万人くらいいる、私はよほど嫌われているのだろう。

「とんでもありません、メレッサ姫の歓迎のために集まった人々です」

デニルは満面の笑顔で説明する。

歓迎？　ありえないことだ。たぶんお金で集めたのだろう。ミダカの統治がうまくいっていることを見せるためにこれだけの人を集めたのだ。

「姫君、バルコニーに出て、人々に応えてはいただけませんか？」

デニルがバルコニーの方に誘う。

いくら金で集まったとはいえ、群集に応えなければならないだろう。メレッサは立ち上がった。

バルコニーの正面は防弾ガラスになっているが両脇が開いていて、そこから群集の声が聞こえている。メレッサがバルコニーに出ると群集の音が一段と大きくなった。みんな手を振っている、横断幕には『歓迎、メレッサ姫』と書かれていて、人々はそれを振っている。お金で集まったにしてはものすごい熱気だ。メレッサもお金をもらって大統領の式典に行ったことがあるが、もっとしらけた感じだった。

「お手を振ってはいただけじゃないでしょうか？」

デニルが丁寧に頼む。

「ああ」

メレッサは手を振った。ものすごい声が巻き起こった。みんな手

を振っているし飛び上がっている人もいる。メレッサが手を振ったのでそれを喜んでいるとしか思えなかった。

「メレッサ姫の人気はものすごいですね」

デニルが嬉しそうに言う。

私に人気があるはずがない、嫌われて当然なのに。

10分ほどバルコニーで手を振っていて、部屋に戻ってきた。確かに群集の熱気は本物だが、なぜ自分に人気があるのか理解できない。

「コリンス、あれはお金で無理に集めたんだと思う?」

デニルがいるのも構わずにコリンスに聞いてみた。

「いえ、そのような事はないと思います」

コリンスはメレッサの質問に返って不思議そうにしている。

「でも、私に人気があるはずないでしょ」

「いえ、姫君の人気は大変なものです」

信じられない、コリンスまでそう言う。

「でも、なぜ?」

「姫君が、最近まで貧しい暮らしをしていらっしやたからです。だから庶民の気持ちがわかると思われています。また、ルビルの占領で、皇帝にさからって犠牲者を少なく抑えた事も人気の一つです。」

姫君は今、帝国内でものすごい人気です」

メレッサは啞然としてしまった。ぜんぜん知らなかった。

「でも、ルビルじゃ、ボロクソに言われたわ」

「そんな事はありません、ルビルでも姫君に感謝している人は多いはずですよ」

じゃあ、フォラストやトモが例外だったのか。

メレッサは立ち上がって、窓から広場を眺めた。群集はまだ広場から動こうとしない。この人たちは本気で私を歓迎してくれているのだ。私に期待している。メレッサはこの期待に絶対に応えなきゃと思った。

デニルはミダカの現状について細かい報告をしていた。お姫様になると、このような報告を聞かなければならない事がよくあったが、このような話は内容が難しくてよく分からない。

「ミダカでは税金を毎月300億ナル納めております」

ふと、デニルの言葉が頭に引つかかった。

「税金？」

デニルはメレッサが興味を示したので嬉しそうだ。

「そうです。ミダカでは毎月300億ナルのお金を姫君に納めております」

デニルは自慢げに言う。

「えっ、あたしが税金をもらっているの？」

メレッサは驚いてしまった。

「姫君はミダカの領主になられましたので、ミダカの領民は姫君に税金を払っております」

メレッサが税金の事を分かっていないと思ったのだろう、デニルは説明してくれた。

そう、人々はいろんな税金を払わなければならない。特に領主への税金は高額だった。

ルビルにいたころ、帝国の支配になると領主に納める税金がとてつもなく高くなると聞いたことがあった。

「税金が高すぎるものではありませんか？」

メレッサは聞いてみた。

「いえ、姫君。これは姫君に納められる税金です。高い方がよろしくありませんか」

デニルはメレッサが何か勘違いをしていると思ったらしい。税金が高すぎて人々の生活が苦しくなる事を心配したのだが。

デニルは次に反政府勢力の説明を始めた。この星にはゲリラがたくさんいて人々を苦しめており、政府軍がゲリラを制圧すべく戦っているがゲリラの制圧はなかなか難しいとの説明だった。

「ゲリラがいるのは、人々の生活が苦しいからではありませんか？」

メレッサは聞いたが、デニルは首を傾げている。

「豪華な生活ではありませんが、普通の生活だと思えますよ」

メレッサがルビルにいた時にも知人に反政府勢力の活動家がいた。そのような人がいるのは生活が苦しいからだ。ゲリラがいるなら極貧の生活をしている人がいるはずだ。

「ねえ、税金つて高いんじゃないかと思うんだけど」

今度は母に聞いてみた。

「帝国の領主への税金はとんでもない額よ。あのままルビルにいたら、今は生活できないわ」

「でしょ、それがゲリラの原因になっているんじゃないかな」

「あり得ると思います」

コリンスが頷いている。

「税金を下げましょう。コリンス、税金をどのくらい下げられるか調べてください」

デニルがビククリしている。

「姫君は、ご自分の手元に届く税金を減らせとおっしゃっておられるのですか？」

「そうです。それに、それ以外の税金も減らしましょう。デニル、どうすれば税金を減らせるか調べてください」

デニルはポカンとしている。

「いえ、姫君がそれでかまわないとおっしゃるのなら、私も税金が少ない方が徴収が楽です。生活できないと泣き叫ぶ者から税金を取り上げるのは大変です」

「ついうっかりデニルは本音を漏らした。やはり苦しい生活をしている人がいるのだ。」

ふと、メレッサは窓の外を見た。あれから一時間くらいたつのにまだ大勢の人がじつと立っている。私がここにいるから、みんな帰らないで私に何かを訴えている。それほどに生活が苦しいのだ。私には生活が苦しいという意味がわかる。帝国の中で彼らを救えるのは私しかない。

22・逮捕投獄

その日の午後、公式の行事は終わっていて昼からは暇だった。

メレッサは粗末な服に着替えて総督府の中を一人で歩いていて、どうしてもミダカの人の声を直接聞いてみたかったのだ。総督府の中なら安全だろうと思っていた。

総督府で仕事をしている人や総督府にやってきた人とすれ違う、誰かと話をしてみたいと思いながら歩いているうちに、ずいぶんと奥まった所へやって来た。中庭のような所で壁際に柱が10本ほど等間隔で並んで立っている。処刑場だとすぐわかった。

「おい、おまえ、ここで何してる」

一人の兵士がメレッサを見かけ、不審な女と思ったのかこっちへやってくる。メレッサは彼に話を聞いてみようと思った。

「見かけん女だな、どこから来た」

彼はメレッサの腕をつかんだ。

「ここは、何なんですか？」

メレッサは聞いてみた。

通常だったらこんな場所にくるのは危険なことだった、でも、身分を明かせば大丈夫だと思っていた。

兵士はメレッサの腕をねじ上げた。

「いててっ、私、怪しい者じゃありません」

「こんな所にいて、怪しくないだと」

兵士はメレッサを壁に押し付けた。

「私、メレッサです。皇帝の娘です」

メレッサはあわてて身分を明かした。このままだと腕が折れてしまふ。

「メレッサだと、ふざけるな。メレッサ姫はな、もつと高貴な顔をしていらっしやるんだ。おまえみたいなブスじゃない」

メレッサはメレッサだと信じてもらえなかったことよりブスだと

言われた事がショックだった。

「私、本物のメレッサです。総督に聞いてもらえばわかります」

「見え透いた嘘を言うな。ここで何をしていた」

「うそじゃ、ありません。私、メレッサです」

ねじ上げられた腕が折れそうに痛む。

「おい、どうした？」

数人の兵隊がやってきた。

「こんな所でこそしてやがった」

「困ったな、今、軍曹はいないぞ」

「軍曹が戻るまで、牢に入れとけ」

事情は分からなかったが牢に入れられるらしい。

「私、メレッサです。本物です」

必死で訴えたが、

「こいつ、さつきから、これなんだ」

腕をねじ上げたまま、どこかへ連れて行く。

「ひょっとして、本物だったりして」

「おい、悪い冗談はよせ、こんなブスのわけないだろう」

さつきからブスブスと言われる。私ってそんなにブスなのか、母はあんなに美人なのに。

「ブスブスって、その娘そんなにブスカ。結構高貴な顔してるぜ」

兵士の一人が言った。メレッサはパツとその兵士の顔をみた。この人取り立ててやる將軍に昇格させてやる。

牢屋に連れてこられ中に放り込まれ鍵がかけられた。

「私、メレッサです。総督に話してください」

大声で言ったが、兵士はどこかへ行ってしまった。

しかたなかった、ねじり上げられ痛む腕を元に戻していると。

「あんだ、何したんだね」

隣の牢から声がした。

「誤解なんです。何もしていません」

「そうか、それでも長引くかもしれん。覚悟していた方がいい」

暗くてよく分からないが、隣の人は床に横になっているように見えた。

「あなたは、何をしたんですか？」

彼はちよつと黙っていたが。

「爆弾を作っていたんだ」

爆弾！ そんなことをしたら死刑だ。

たぶん彼は反政府の活動家なのだろう、ぜひ話がしてみたい。

「私、ルビルから来たんですが、ここの生活はそんなにひどいんですか？」

「ああ、ひどいな」

彼はボソツと言う。

「領主への税金ですか？」

密かに原因が税金であることを期待した、それなら解決できる。

「税金もあるが、役人への賄賂がひどい。総督なんか任期中に一財産作って帰っていく」

ルビルでも役人の腐敗が問題になっていた。じゃあ、腐敗問題もあるのか。

「あんた、メレッサとか言っていたな、ルビルから来たメレッサなんて、まさか、あのメレッサじゃないだろうな」

身分を明かすのは気が引けたが、騙してもしようがない。

「あのメレッサです」

彼は身を起こした。

「まさか、じゃあ、なんでこんな所に入ってるんだ」

「だから、誤解なんです」

彼は鉄格子の所へ寄ってきた。こちらを覗いている。

「うそだろう、全然お姫様らしくない」

信じてもらえない。メレッサは完全に自分の容姿に自信をなくしてしまった。こんなやさしそうな人にまでブスだと思われる。

「ブスなんだけど、本物です」

メレッサは自嘲的に言った。

「ブスじゃないけど、本物じゃないね。本物ならそれらしい雰囲気を持つているよ」

「本物です」

どうしてこうも信用されないんだろう。母みたいな高貴な雰囲気がないのだろうか。

「本物なら、俺の処刑を止めてくれないかな。明日銃殺されるんだ」
彼は皮肉っぽく言った。

「わかりました。あなた、お名前は？」

「ハロルド」

彼はまったく信用していならしく、鉄格子から離れるとまた床に横になった。話はそこで途切れてしまった。

3時間くらい待っていると、さっきに兵隊達が戻ってきた。

「軍曹、こいつです」

軍曹と呼ばれた男はしゃがみ込んで牢の中を見る。

「私、メレッサです。総督に話して下さい」

「メレッサ姫？ でもなぜそのような服装なんです？」

「お忍びで、皆さんと話がしてみたいと思って」

軍曹は顎に手をやって考えている。

「メレッサ姫ですか？」

兵隊が心配そうに軍曹に聞く。

「俺だつて会ったことがないからわからんよ。ただ、歓迎の宴に姫君が来ないって騒いでいたな……」

「まさか、本物ってことは……」

「まあ、総督の所へ連れて行ってみよう。そうすりゃわかる」

兵隊が鍵を取り出すと牢の鍵を開け始めた。

「本物ってことはないですね。俺… 腕をねじ上げだんだが……」
兵隊の一人が蒼白な顔で軍曹に聞く。

「まずいな、本物なら、お前は銃殺だな」

やっと鍵が開いてメレッサは牢から出た。

「心配しなくても大丈夫です、処罰などしません。ただ、少し痛か

「ただけだ」

メレッサは腕を動かしてみた。関節が痛む、明日は腫れるかもしれない。

ハロルドがビックリして鉄格子を両手でつかんでこっちを見ている。

「軍曹、ハロルドの処刑は中止して下さい。まだ、話を聞きたいことがあるんです」

軍曹はあつけにとられている。まだ、本物かどうかかわからないのに命令するからだ。

「それは、正式な命令書がないとなんとも……」

「あとで、命令書を書いておきます」

メレッサは早足で歩き出した。歓迎の宴にもうずいぶんと遅れている。兵隊達もメレッサにおくれまいとついて来る。

自分の部屋の所まで来ると、デニルと出会った。メレッサがいないのでみんなで探していたらしい。

「姫君、どちらへおられたのですか。それにそのお召し物は……」

「ちよつと冒険をしていたんです、すぐ着替えますから」

それから兵隊達を見た。

「これでいい？」

「失礼しました」

軍曹は直立して敬礼をする。兵隊達もあわてて敬礼をした。

メレッサは自分の部屋に入ろうとしたが、ふと、思いついて、さつきブスじゃないと言った兵隊を見た。

「あなた、名前はなんというの？」

彼はびっくりしている。

「ジム…… ジム・タナートです」

「ジム・タナートさんね。総督、タナートさんに特別ボーナスを出しておいて下さい」

デニルはポカンとしていたが、すぐに頭を下げた。

「承知しました」

23・改革

歓迎の宴の後、メレッサは自分の部屋で鏡を見ていた。かなり自信をなくしていた。

確かにこの顔にはお姫様らしい雰囲気はない、下女といった顔だ。自分ではそこそこかわいいと思っていたのだが、あそこまでブスと言われると落ち込んでしまう。もっと母に似たらよかったのに。

コリンスがやって来た。

「姫君、税金の試算ができましたので、お持ちしました」

コリンスは端末シートを差し出した。

彼は私の事をどう思っているんだろう。

「コリンス、私ってブスだと思う？」

コリンスは笑った。

「いえ、美しいと思います」

こんな聞き方をすれば、そうとしか答えないだろう。

「お母さんと、比べると、と思う」

コリンスは言い方を考えているのか、ちよつと間を置いた。

「ルニーさまとは、違った美しさをお持ちです」

つまり、母より劣るという事だ。メレッサはため息をついて鏡を見た。

「何か、あったのですか？」

コリンスは聞いたが、メレッサはぶすつとして黙っていた。

「私は、姫君の顔は好きです。愛嬌があってかわいいと思いますよ」

コリンスはやさしく言ってくれる。コリンスの言葉は救いだっただも、どこか素直になれない。

「かわいくないわよ」

向こうを向いたまま、乱暴に言った。

「お母様の高貴な魅力に憧れていらしゃるのですね。でも、姫君に

はお父様ゆずりの力強さがあります。それと、お母様ゆずりの整った顔。だから、ご自分の魅力にもっと自信を持たれていいと思いますよ。私はルニーさまより美しいと思います」

メレッサはうれしかった。コリンスの言葉を聞いていると自信が湧いてくる。それでもまだ不満がたまっていた。

「本当の事を言っただけなの」

言葉とは逆に、嘘でもかわいいと言っただけだった。

「本当です。メレッサ姫は本当に美しいと思います。私は姫君が好きです」

コリンスの言葉は琴の音のように心に響く。コリンスに好きだと言われて思わず笑みがこぼれてしまった。コリンスが美しいと言ってくれるなら、それだけでいいように感じた。

それに、こんな弱みをコリンスに見せるわけにいかない。メレッサは気を取り直すと、何事もなかったかのようにシートをコリンスの手から取り上げた。

「さあ、減税できそう？」

母も含めて3人で税金の検討が始まった。

「姫君が受け取ってある税金は全額姫君のお小遣いになっています」
コリンスの説明によると、兄弟がもらった星からの税収はどこにも使われていないとのことだった。そこで、軍隊や使用人の費用を応分負担すると、税金は今の10分の1に出来るらしい。

「ただし、これは姫君が贅沢をしないと考えた場合の計算です」

コリンスは最後に付け加えた。

「もちろん、贅沢なんかしないわ。じゃあ税金を10分の1にしましょう」

賄賂の問題は厄介だった。帝国の法律では、賄賂を受け取った役人は死刑なのだが、総督が警察も兼ねているので、泥棒と警察が同じ人状態になっていた。

「姫君直属の特別警察を作るのがいいと思います」

コリンスが説明する。

メレッサ直属の警察であれば賄賂を強力に捜査できる。どこかFBIみたいで楽しそうだった。

最後はハロルドの問題だった。メレッサは彼と約束したから彼を助けたかった。

「あなたの好みで1人だけ特別扱いにするのはよくないわ」

母が釘をさす。でも、約束を破りたくない。

結局、恩赦をすることになった。メレッサの領主就任を祝って反政府活動で捕まった人に恩赦を出すのだ。その中でハロルドも恩赦にする。

この恩赦はゲリラ活動を押える効果もありそうだった。メレッサの人気の高いのでゲリラはこれで終息するかもしれない。

デニル総督にメレッサの新しい統治方針について説明していた。話が進むに連れてデニルは落ち着きがなくなってきた。額に汗をかいている。

「今週末にも、姫君の国民に向けたテレビ放送を予定しています。それと、特別警察への志願者の受付はすぐに開始してください」

コリンスが話すと。

「少し、急ぎすぎではありませんか。準備にもう少し時間をください」

明らかに、メレッサの新しい方針を嫌がっているようだ。

「デニル総督、意見があるなら、おしゃってください。どこか問題でもありますか」

メレッサは丁寧に尋ねた。

「いえ、大変ご立派な統治方針だと思っております」

どこか、煮えきらない返事をする。

「遠慮はいりません。言いにくい事でも、どうぞおっしゃってください」

「いえ、問題など、めっそもございません」

デニルは小心な男のようで、メレッサの方針に逆らうつもりはないようだ。

コリンスが国民に向けた発表の手順などをデニルに説明している。デニルは何か言いたそうなのだが、おとなしく指示を聞いていた。

「デニル総督。言いにくい事があるんですね。何です、おっしゃってください」

メレッサがたまりかねて聞いた。もし、この方針に現地の人でないといけない問題があるならぜひ教えてもらわなければならない。デニルはしばらく考えていたが、泣きそうな顔をして話し始めた。

「恩赦ですが、恩赦の範囲を広げていただけないでしょうか？」

「恩赦？」

何が言いたいのかわからない。

「例えば、姫君の発表後2日以内に自首した者は恩赦にするとか……」

「それは無理ですね」

恩赦が必要なのは反政府活動をした人達を助けるためで普通の犯罪者まで恩赦にするつもりはなかった。

それを聞いてデニルは泣きそうだ。

「メレッサ姫は心やさしい方だと伺っております。どうかどうかお願いします」

彼の様子は明らかに変だ。

「何が言いたいんですか、はっきり言ってください」

デニルは椅子からすべり降りると、メレッサの前にひざまづいた。

「私だけではありません。前任者も、そのまた前任者もそうだったのです。悪い事だとはわかっておりました。でも、みんなやっている事なのです。慈悲深いメレッサ姫、どうか寛大なご処置をお願いします」

デニルは手を合わせて命乞いをしている。

意味がわかった。彼は総督の地位を利用して蓄財をしていたのだ。

帝国の法律では賄賂は死刑だ。

しかし、いままでまったく摘発しないでおいで、急に捕まえて死刑では可哀想だ。これは下級の役人まで同じことだろう。

「わかりました。その恩赦も追加しましょう。ただし、蓄財した財産は返還してください」

「ありがとうございます、メレッサ姫。ありがとうございます、メレッサ姫」

デニルは感激して泣いている。

「いいでしょ、お母さん」

「しかたないでしょうね」

母も納得している。

しかし、コリンスが口をはさんだ。

「姫君、そう単純ではありません」

彼は困ったように頭を抱えている。

「姫君が恩赦に出来るのはミダカの領民だけです。総督はミダカの領民ではありませんので姫君では恩赦にできません」

デニルが啞然としている。

メレッサも驚いてしまった。

「そうなの？」

「総督には帝国の法律が適用されますので、総督を恩赦に出来るのは皇帝だけです」

デニルが泣き崩れた。

そうなのか、私にも出来ないことがあるのか。しかし、泣いているデニルを見ると可哀想になる、やはり死刑はひどすぎる。

「なにか、方法はないの？」

「姫君が不正をする手があります」

なんとなく意味がわかった。特別警察が証拠を持って来ても私がそれを握りつぶせばいいのだ。それがおかしいと言う部下がいたら首にすればいい。でも、そんな事したら、特別警察の意味がなくなってしまう。

メレッサは頭を抱えた。すべての人を幸せにする方法などないのだ。幸せになる人の影で不幸になる人がいる。私がこんな事を始めなければデニルは死なずにすんだのに。

次の日、デニル総督がいないと人々が騒いでいた。総督だけでなく、帝国から派遣された役人のほぼ全員がいなくなっていた。メレッサは少し安心した。無事に逃げてくれるといいが。

メレッサのテレビ放送の収録も終わって、明日、国民に向けて放送する事になっていた。恩赦もその時に実施される。

メレッサが自分の部屋にいと、臨時総督がやって来た。

「恩赦にする者の名簿です」

メレッサは名簿を受け取った。死刑だったのが釈放されるのだ。

彼らは喜ぶだろうなと思うとうれしかった。

「問題があります」

臨時総督が小さな声で言う。

「なんです？」

思わずメレッサも声が小さくなってしまった。

「ハロルドは恩赦には含まれません」

メレッサは驚いた。

「なぜです？」

「彼の罪状は爆弾製造であって、反政府活動を行ったわけではないからです」

驚きだった。ハロルドはてっきり反政府活動で捕まったと思っていたからだ。

「彼は何をしたんです？」

「自宅に爆弾を隠し持っていたところを捕まりました。爆弾マニアです」

「反政府活動をやっていたのではないんですか？」

「はい、ゲリラは爆弾は使いません。無関係の人を巻き込むからです」

ショックだった。ハロルドは単なる犯罪者だったのだ。

「もし、姫君のご命令なら、彼を名簿に追加しておきますが」

メレッサは言葉につまった。そんな事をしていいのだろうか、私の好みで犯罪者を釈放する。それってすごい不公平だ。

メレッサは首を振った。

そんな事はできない。彼との約束を破ることになるがしかたない。人を殺したり、助けたりできる権限を持っているって嫌な事だと思った。そんな権限を持つていなければこんな事で悩むこともない。

次の日、テレビ放送が行われた。

放送が終わると人々が総督府の前の広場に集まり出した。時間がたつに連れ、ものすごい数の人が広場に集まってきた。

メレッサはバルコニーに出た、すごい歓声が上がった。

24・おとり作戦

同じ政策をメレッサの所領の残りの2つの星にも適用した。すべての作業を終え、メレッサは宇宙船でセダイヤワへ帰りの徒にいた。

ミダカからセダイヤワまで5日かかる。宇宙船は帝国と対立関係にあるミラルス王国との境界付近を飛んでいた。

スミダ艦長が深刻な顔でメレッサの部屋にやってきた。

「姫君、本艦は国籍不明の宇宙船に追われています。恐らくミラルスの戦艦です」

メレッサはまだ事の重大さがわかっていなかった。

「1時間ほど前から追われているのですが、敵の方が速度が早く追いつかれています」

艦長の声に緊張があるのがわかった。何か困った事なのか。

「大丈夫なんでしょ？」

「どんな事があっても姫君をお守りします」

艦長は真剣な顔で言う。メレッサはやつと事の重大さがわかってきた、私をお守りしなきゃならないような事態になっているのか。

「追いつかれたら、どうなるの？」

艦長はちよつと下を向いた。

「撃ち合いになります…… いえ、絶対に大丈夫です」

テレビで宇宙戦艦同士の撃ち合いを見たことがあったが、弾が当たって戦艦が爆発するシーンがあった。

「護衛艦がいるでしょう」

この船には護衛の戦艦が2艘ついていた。

「こちらは3艘ですが、敵は5艘です」

メレッサは驚いてしまった、3対5では負けてしまう。コリンス、そうコリンスに状況を聞いてみよう。

「コリンス!!」

メレッサは彼の部屋に向かおうとした。

「コリンス少佐はブリッジにいます」

「ブリッジ？」

コリンスは私より先に話を聞いていたのだろう。

「私もブリッジへ行きます」

メレッサは走り出した。艦長が後からついてくる。

ブリッジに駆け込むと、中央付近にコリンスが立っていたが、彼の顔は見たことがないくらい緊張していた。

「コリンス、どうなの？」

「かなり危険な状況です」

彼はリーダーから目を離さない。

「どうするの？」

「ここから3時間くらいの所に、ダダイヤがあります。そこは帝国の植民地星ですから、そこまで行ければ大丈夫です」

「行けそうなの？」

「あと1時間くらいで追いつかれます」

コリンスは冷たく言う。それでは、ダダイヤに着く前に追いつかれてしまうではないか。

「撃ち合いになったら、どうなるの？」

「たぶん、負けます」

頭をぶん殴られたように感じた。そこまでハッキリ言うとは。足ががくがく震えてきた。死ぬかもしれない。

「私が乗っているから、狙われているの？」

「その可能性が高いです」

コリンスはリーダーをじっと見つめたままだ。

艦長がメレッサの所にやってきた。

「護衛艦2艘を後退させて敵と戦わせます。その間に本艦は逃げます」

でも、それでは護衛艦2艘で敵5艘と戦うことになる。

「それで、逃げきれなの？」

艦長は言葉につまった。

「やってみるしかありません」

2対5では戦いにならないのだ。無理とわかっているのに、無理な作戦をやるうとしている。こんな作戦が一番最悪だ。

メレッサはふとアイデアを思いついた。

「逆にやったらいいわ。おとりの船を逃すの。2艘が向かってきて1艘が逃げれば、敵は逃げた1艘に私が乗っていると思わ。だからその裏をかいて、おとりの船が逃げて、この船は敵に向かうの。敵は逃げてる船を追いかけるから。この船は大破して止まったふりをして、したらそのまま行ってしまうかもしれない」

「まさか、姫君がご乗艦の船で戦闘をやるわけにはいきません」

艦長はびっくりしている。

「いいかもしれない」

コリンスは驚いたようにメレッサを見ている。

「姫君、いいアイデアです。危険ですがやってみますか」

「バカな。姫君がご乗艦の船で戦闘をやるなんて」

艦長は納得しない。

「追いつかれたら、どうせ戦闘になるんですよ」

私が乗っていると思ったら敵は目的を達成するまで攻撃を止めないだろう。同じ戦闘になるなら助かる可能性のある方がいい。

メレッサはテレビ電話で作戦を護衛艦の艦長に説明した。

「どちらがおとりになりますか？」

護衛艦の一人の艦長が聞く、メレッサにはおとりも戦闘も、どちらも危険性は同じ様に思えた。

「では、あなたやってください」

メレッサは簡単に命令した。

「了解です。メレッサ姫、ご期待に応えてみせます」

彼はわずかに微笑んでメレッサに敬礼した。彼の目に浮かんだ覚悟にメレッサはまったく気がつかなかった。

「では、姫君は、避難をお願いします」

スミダ艦長が言う。船の中央には分厚いジリウムで作られた部屋があった。そこなら、どんな攻撃を受けても大丈夫だ。しかし、そこに入ると状況がわからなくなる。

「ここにいます」

「ここは危険です」

艦長が避難を勧める。ここが危険って、みんなここにいるんじゃないか。

「大丈夫です」

メレッサは動かなかった。

メレッサがブリッジにいますという事は彼女は指揮を取る事を意味していたが、彼女はまったくその事に気がついていなかった。

25・脱出

「敵との距離23光分」

リーダーを見ている兵士が定期的に距離を報告していた。徐々に距離が近づいてくる。

メレッサはブリッジに立って流れていく星をじっと見ていた。敵をうまく騙せるか、メレッサは緊張で体が震えた。

ブリッジは今、後ろを向いていて、窓から真後ろが見えていた。あの星の流れて行く先に敵の宇宙戦艦がいる。

「敵との距離16光分」

ずいぶんと近づいてきた。手に汗が滲んでいる、ねばねばする手をスカートで拭いた。

「敵との距離14光分」

兵士が報告する。

突然、まばゆい光の筋が後方から伸びて来て前方に飛んでいった。撃ってきました」

誰かが叫ぶ。

敵はどんどん撃ってくる。光りの筋が次々と追い越して行く。でもこちらは撃たない。なぜ、こちらは撃たないのか？

「こっちも撃ちなさいよ」

メレッサは心配になって言った。

「撃て！」

メレッサの命令を受けて艦長が命じた。

船の後方に設置されていた陽子砲が火花を放った。まばゆいばかりの光の筋が後方に向かって伸びていく。

隣の船も撃っている。

「敵との距離12光分」

報告の声が聞こえる。

「遠慮するな、どんどん撃て」

艦長が怒鳴っている。

陽子砲は立て続けに発射される、幾重もの光の筋が伸びていく。光の筋がこっちに向かって伸びてきて、この船のすぐ上を飛んで行った。

一発がシールドに当たった。ものすごい爆発を起こし、船が激しく揺れた。しかし、シールドが守っているので船体には損傷はない。「距離10光分」

報告の音がする。

近くなつたせいか、シールドに命中する弾が増えてきた。敵はどんどん近づいているのに、おとりが逃げていない。もうおとりを逃さないと、敵に1艘だけ逃げたと見えなくなる。

「ねえ、おとりを逃さなきゃ」

メレッサはたまらずに言った。

「よし、減速」

メレッサの命令を待っていた艦長がなった。

窓からは、1艘の船がすうと動き出してこの船から離れていくのが見えた。この船が減速しているから、相手の船が動いているように見える。あの船がおとりとして逃げるのだ。もう1艘は窓から見える位置が同じに見えた。この船と同じ減速をしているのだ。

「急速に接近中、敵と8光分」

「どんどん撃て」

艦長が怒鳴った。

陽子砲は焼けきれんばかりに撃っている。敵の弾がシールドに当たると激しく船が揺れた。

「あと6光分」

「全速前進、敵との距離を維持する」

艦長の声。

まばゆい光の帯はどんどん伸びていく。後方からも光の筋が伸びてくる。

シールドに当たる弾が多くなってきた。船が激しく揺れる。

「あと4光分」

声がうわずっている。

「シールドが限界です」

誰かが叫んだ。

「蛇行しろ」

艦長がどなる。

船が激しく向きを変えるのがわかった。心なしか外れる弾が多くなつた。

「あと2光分です」

「ミサイル発射」

無数の火の玉が船から飛び出して後ろに向かって飛んでいく。

ものすごい衝撃があつて、メレッサは吹っ飛ばされて転がった。煙が吹き出ている。敵の弾がシールドを破って船に当たったのだ。

「どこに当たったの」

メレッサはよろよろと起き上がるとコリンスの所へ行つた。

「避難された方がいい」

コリンスが言う。メレッサもそう思った。

見ると陽子砲は横に向かつて発射されていた。

「向きが間違っている」

メレッサは言ったが。

「いえ、敵艦が横にいます」

敵の船はこの船を追い越しつつあつた。陽子砲が横に発射され、敵が横からどんどん撃ってくる。

また、衝撃があつて吹っ飛ばされた。思い切り腰を打ってしまった。見ると窓の外の星が回っている。

「コントロールできません」

誰かが叫んでいる。耳がおかしくなってきた、気圧が下がっている。船体に穴が開いてそこから空気が漏れているのだ。

「姫君、こっち」

コリンスに引っ張られて、ブリッジを出た。煙が充満していて何も見えない。

また、衝撃があつて壁にぶつかって通路の端まで転がっていった。体中打ち傷だらけだ。

「コリンス、どこ？」

必死でコリンスを探した。

「ここです」

転がっているコリンスを見つけると、メレッサはコリンスにしがみついた。もう生きた心地がしない。

激しい爆発音がして何かが引きちぎれるような音がした。油が燃える匂いがしてくる。それでも陽子砲の発射音が聞こえていた。メレッサはコリンスの夢中でしがみついていた。

突然、静になった。陽子砲を発射する音も、シールドで爆発する音もしない。強い匂いの煙が漂ってくるだけだった。

「姫君」

コリンスが小さな声で叱るように言う。メレッサはコリンスの首にしがみついたままだった。

「ああ」

慌ててメレッサは手を離れた。

二人はよろよろと立ち上がった。コリンスがブリッジに入っている。

メレッサも入ると窓からは星が回っているのが見えた。宇宙船がコマのように回っているのだ。

「どうやら、敵はおとりを追って行ってしまったみたいです」
よろよろしながら艦長がやってきた。

「姫君、作戦成功です。すぐに逃げます」

艦長は操舵手になにやら怒鳴っている。

「コリンス、敵は？」

「うまくいったようです。この船は破壊したと思って行ってしまっ

たみたいです」

メレッサはほっとして足から力が抜けてしまった。よかった。これで逃げられる。

宇宙船は大きく迂回してダダイヤに到着した。

メレッサはあちこちに包帯を巻いた姿でダダイヤの星を見ていた。やっと助かったという実感が湧いてきた。

おとりになった船は、メレッサが逃げる時間を稼ぐため、停船命令を無視して逃げつづけ結局全員戦死したと、後で知った。私のよくな者のためになぜそこまでしてくれるのか、戦えなくなったらそこで降伏すればよかったのに。何気なくおとりを命令したのが悔やまれた。おとりは敵を引きつけるのが任務だ。あの艦長はあの時、死ぬ覚悟だったのだ。

26・お見舞い

メレッサはダダイヤの総督が手配してくれた別の宇宙船でセダイヤワの自分の宮殿に帰ってきた。打ち身がひどく頭や手足に包帯を巻いたままだった。母や侍女達は戦闘の時、宇宙船中央の安全な部屋にいたので、怪我はなかった。

メレッサが宇宙船を降りると出迎えた使用人達が彼女の痛ましい姿を見て、一斉に心配してくれる。見かけほどひどくないので、うつとうしく感じながら自分の部屋に戻ってきた。

自分の部屋が落ち着く、使用人達を部屋から追い払うとベットにドカッと横になった。柔らかい布団の感触でやっと気持ちが楽になった、もう二度とあんな思いはしなくなかった。

追い払ったのに、すぐに侍女が部屋に入ってきた。

「用件は後にして！」

今は何もしたくなかった。

「いえ、皇帝陛下がお見えです」

「父が？」

見ると、もう父は侍女を押しつけて部屋に入ってきた。

慌ててメレッサは起き上がった。

「起きなくていい」

父は手で寝てると合図する。怪我で寝ているわけじゃないのだが。

「大丈夫か？」

父はベットの端に座った。怪我をしたと聞いて心配して来てくれたのだ。

「大丈夫です。もうほとんど治りました」

父は包帯を巻いたメレッサの腕を痛々しそうに見ている。

「ひどいのか？」

「いえ、たいした怪我じゃありません。あちこちぶつけちゃって」

「そうか、よかった」

こんなに優しい父を見たことがなかった。しかも、優しいだけでなく嬉しそうにしている。

「話は聞いた、おまえが指揮を取ったそうだな」

どうやら、おとり作戦のことらしい。作戦を考えて手順を指示したのは私だが、指揮など取っていない。

「いえ、私はアイデアだけで、戦闘をやったのは艦長です」

「しかし、おまえがブリッジにいたんだろ」

「はい、でも、ただけです」

こう、答えたがこれも本当は少し違う。途中でブリッジを逃げ出したのだが。

「戦艦の操船や戦闘は艦長がやる、おまえは艦隊全体の動きを命令すればいいんだ」

父は誇らしげにメレッサをみている。

どうやら、父は私の命令で艦隊が動いたと誤解しているらしい、私はそんな命令などしなかったのに。でもふと気がついた。あの時、艦長は私の命令を待っていた。自分で知らないうちに指揮を取っていたのかもしれない。

「敵が撃ってくるのに、ブリッジで頑張っていたのか、たいしたものだ」

父は満足そうにメレッサの顔をみている。

少し誤解があるとはいえ、ここまで父に褒めてもらうと嬉しかった。

「さすがは俺の娘だ。いい度胸をしている」

すこし褒めすぎだと思うが、でも、嬉しくておもわず顔がほころんでしまう。

「それに、ルニーに似てかわいいし」

ミダカの衛兵にブスと言われたのが吹っ飛んでしまった。父に言われると格別にうれしい。

「追ってきたのはミラルスの戦艦なのか？」

急に父の表情が陰しくなった。

「まだ、わかっていません」

敵の戦艦はそのまま行ってしまったので、国籍はわからないままだ。

「まず、ミラルスだな。お前を人質にして帝国からの攻撃の盾にしようとしたんだろう」

父は顔を上げた、怒りに顔をこわばらせている。

「ミラルス王は許せん。ミラルスを攻める」

父なら当然だろう、娘を襲われて黙っているような父ではない。

「ミラルスを叩き潰す、お前の手でミラルス王の首をはねるといい父は、またいつものような怖い顔になった。しかも言っていることがかなり極端だ。

首をはねるって、いったいどういう意味だろう。比喩的な意味じゃないかもしれない。

「首を跳ねる？」

「お前が襲われたんだから、お前がやれ」

「剣で……」

「あたりまえだ、棒では無理だろう」

父は当然だというように言う。

「いえ、私は遠慮します」

いくらなんでも、実際に首を切り落とすようなことが出来るわけがない。

「バカ、そのくらい出来るようになれ」

父は怖い顔で睨む。

メレッサは笑いでごまかすしかなかった。

「お前には一個旅団やろう、それで戦え」

また、びっくりするような話が出てくる。

「あの、私も戦争に行くんですか？」

「もちろんだ、お前は左翼を守れ」

父は、当たり前だろうというように言う。

左翼とか言われてもどこを守るのかわからない。

「どうしても、行かなければだめですか？」

「バカ、俺の娘だろう。ジョル、ルシール、フォランも連れていく」
父はだんだん機嫌が悪くなってきた。もう、これ以上父に逆らえない。それに、兄弟も行くのなら、父の娘として仕方のない事なのだろう。

メレッサが仕方なくうなずくと、父は立ち上がった。

「ルニーも怪我してるのか？」

母の事を心配している、母は避難用の部屋にいたから怪我はしていなかったが、父に母の所にも行って欲しかった。

「ええ」

思わず嘘をついてしまった。

「そうか、ちよつと寄ってみる」

父はちよつと手をあげると、そのまま部屋から出ていった。

その夜、ジョルとルシールが花束を持ってお見舞いに来てくれた。
そんなにひどい怪我じゃないのに。

「わあ、ありがとう」

大きな花束をもらってうれしかった。

「生けておきます」

侍女が引き取ってくれる。

メレッサは二人を居間に案内した。居間には母もいた。

「あんたが、自分で指揮したんだって」

ルシールが驚いている。

「違うよ、あれは、たんなる噂。あたしは隠れていただけ」

どうも、会う人ごとに同じ事を聞かれる、指揮なんかしていないのに。

「でも、メレッサはブリッジにいたんだろう」

ジョルが聞く。

「戦いがどうなるか見たかったの」

「ブリッジにいたら、君が指揮しなきゃ」

「指揮なんかしてないって！」

そう言ったが、しかし、みんな私の命令を待っていた。私が指揮をしたのかもしれない。

「おば様も、ブリッジにいらしたんですか？」

ルシールが母に聞く。

「私は、避難用の部屋にいました。まさかメレッサが戦闘を指揮していたなんてビックリです」

「だから、指揮なんかしてないって」

どうも、みんなからかわれているみたいだ。

「怪我はひどいの？」

ルシールが聞いてくれる、兄弟からこんな言葉をかけられると嬉しくなる。

「いえ、この娘ね、大げさに包帯なんか巻いてるからビックリしちゃうけど、包帯とったら怪我を探さなきゃいけないくらいなの」

母がちゃかしながら笑ってる。

「失礼ね、これはお医者さんが巻いてくれたの、怪我がひどいからよ」

メレッサはむすつとして答えた。

「ミラルスはひどいわね、絶対にこの仕返しはしなくちゃ、ここを下がったらバカにされるわ」

ルシールが憤慨している。

「父さんが、すぐにでも出陣するよ。多分、俺たちも連れていかれるな」

ジョルとルシールは顔を見合わせた、ルシールは行きたくなさそうにしている。

「あんたも、絶対に連れ出されるね。一番先頭をやらされるかもよ」
ルシールが脅かすように言う。

「あたしは左翼だって、左翼ってどこ？」

「本隊の左側さ、まあ、安全な所だな」

「敵が正面にいるとは限らないわよ。左にいたら、あんたがぶつか
ることになるのよ」

ルシールが脅す、彼女はメレッサを脅かして楽しんでいるようだ。

「ルシール姉さんはどこなのよ？」

「あたしはいつも、後ろ。絶対に安全な所ね」

「後ろは何の役にもたっていないと思うんだけどね」

ジョルがバカにしたように言う。

「敵が後ろから攻めてくるのを防ぐのよ、役に立ってるわよ」

「兄さんはどこ？」

「君が左翼なら、多分右翼だな。ルシールと違って重要な場所だよ」

「あたしの場所も重要よ」

ルシールがムキになっている。

「あたし、戦場に行くのは始めてだから、いろいろ教えてね？」

メレッサは戦争に行っても、どうしていいのかまったく分からな
いから、この二人が頼りだった。特にルシールは世話好きだから頼
りになる。

「よく、言うよ。戦艦同士の撃ち合いをやったくせに。あんな、撃
ち合いは父さんだって経験したことがないよ」

それはそうかもしれないが、でも、大艦隊で戦う戦争は経験がな
い。

「意地悪しないで、教えてよ」

「別に難しくない。旗艦に乗って父さんの指示どおりに艦隊を動か
せばいいだけだよ。旗艦は後方にいるから、敵の砲撃が飛んでくる
なんてことはない」

ジョルが説明すると。

「敵の砲撃が旗艦までくるようになったら大敗北ね、その時は旗艦
だけさつさと逃げればいい」

ルシールが気楽に補足してくれた。ルシールなら、あっさり部下
を見捨てて逃げるかもしれない。

「なんとなく分かったわ、戦場で分からないことがあったら聞くから教えてね」

「了解」

ジヨルはやさしく応じてくれた。

戦争は怖かったが兄弟達と一緒にと思うと楽しそうでもあった。

どこか、家族旅行にでも行く気分だった。

その日は夜遅くまで、兄弟とおしゃべりを楽しんだ。

27・出撃

メレッサの艦隊は父が新たにくれた艦船が加わって一万隻もの大艦隊になっていた。

彼女は自分の艦隊の様子を確認に小型の宇宙艇で自分の艦隊に向かっていた。出陣前に一度、実際に自分の艦隊を見ておきたかった。それを見ても何も変わらないのだが、どこか安心できる。

セダイヤワの周回軌道には出撃の準備のため、ものすごい数の宇宙船が浮かんでいるのが窓から見えていた。

「これは、第6旅団、ドイルス將軍の艦隊です」

横でコリンスが説明してくれる。

「あつちに見えるのが、第2旅団、マリムレイ將軍の艦隊です」

コリンスがいろいろと教えてくれるが、ともかくものすごい数の宇宙船が浮かんでいることしか分からなかった。ここにドラール軍のほぼすべての軍艦が集まっている。ルビルにいた頃は恐怖の対象でしかなかったドラール軍の宇宙船がこんなにも頼もしく感じるなんて。

メレッサが乗った宇宙艇は、それらの宇宙船の間をすり抜けていく。

「あれが、姫君の第20旅団です」

コリンスが指差す方を見た。境目がどこなのか分からないが、前方にたくさん宇宙船が浮かんでいるのが見えた。あれが私の艦隊らしい、私の艦隊もドラール軍の一部なのだ。全銀河系の人々から恐怖の目で見られているドラール軍の宇宙船が目にある。しかも、それが自分の艦隊なのだ。

宇宙艇は艦隊の中に入っていく、前方に巨大な宇宙戦艦が見えてきた。

「あれが、旗艦のスリナビです」

セラブ提督の旗艦だったミルビスより大きく見えた。

「私は、あれに乗るんですか？」

「そうです。あれなら、少々の砲撃を受けても大丈夫です」

「セラブ提督は？」

ミルビスはどうなるんだろう。私のスリナビが旗艦になるとミルビスは旗艦ではなくなる。

「もちろん、提督も一緒に乗艦になります。作戦については提督が助言してくれます」

コリンスが説明してくれる。助言が絶対に必要だ。メレッサは戦闘になったらセラブ提督に任せるつもりだった。

スリナビに乗り込むと艦長らしき人が出迎えてくれて、メレッサを彼女の部屋に案内してくれた。豪華な部屋が10部屋以上あって、室内プールまであった。

「この船は、以前ルシール姫が使われていたんですよ」

艦長が説明してくれる。

「スケートリンクを作れと言われたんですが、出撃まで時間がなくてその時は無理でした」

艦長は申し訳なさそうな顔をしている。

いかにもルシールらしい、戦争に行くのにスケートで遊ぶ気だったのだ。

「どうでしょう、その後改装をしたので今なら作れますが、作りますか？」

艦長はメレッサが喜ぶだろうと思っているみたいだ。

ルシールと一緒にされては困る。

「いえ、結構です。それよりブリッジを見せてください」

戦闘になった時、全艦船にどう指示をするのか知リたかった。前は3隻だったから簡単だったが1万隻にもなったらどうやって連絡を取るのだろう。

「こちらです」

艦長が案内してくれる。

ブリッジは広い部屋で、まわりがほとんど窓になっていて広い範囲が見渡せる。

中央に立派な椅子があった。

「座ってごらんになりませんか？」

艦長が椅子を奨める。

こんな所に座ると、また、自分で指揮を取ると思われる。

「いえ、結構です」

軽く断ったが、艦長はメレッサが座りやすいように椅子を回してくれる。

「姫君が自ら艦隊の指揮を取られるとのこと、艦隊の乗組み員一同感激しております」

艦長はうれしそうにしている。そんな噂がどこから出てきたのだ。いえ、私は指揮などとりません」

ピシッと言った。妙な噂が出回ると困る。

「指揮をとられないのですか？」

艦長がありえないといった表情で見ている。

「指揮はセラブ提督に任せます」

「そうですか……」

艦長は本当に残念そうだ。そんなに期待されているのだろうか。

「艦隊とはどうやって連絡を取るんですか？」

もう、この話は終わりにして、別の質問をした。

艦長はメレッサの横にくと、椅子に付いているスイッチを入れてくれた。

目の前に大きな立体画像が現れた。セダイヤワがあつてその周囲に小さな点がたくさん写っている。

「この点が宇宙船です。こちらの青い点が姫君の艦隊になります。これを見ながらそのまま指示を声に出せば、姫君指揮下の宇宙船の艦長に声が聞こえるようになっていきます」

メレッサが指揮をする前提で説明してくれる。

「わかりました、でも私は指揮はしませんよ」

妙に期待されると困る。

「姫君は、ご自分の人気をご存知ないのですか？　姫君が指揮をとれば勝ったも同然だと、みんな思っています」

艦長は説得するかのように話す。

メレッサも自分の人気は多少知っていた。ただ、メレッサの取り巻きから聞く話はお世辞が入っているでの少し割り引かなくてはならない。

「おだてないでください」
「軽くないしたが。」

「いえ、本当の事です、ドラル皇帝では乗組員の士気が上がりません」

艦長はうつかり皇帝の悪口を言ってしまったて、あわてて口をつぐんだ。その場の誰もが凍りついたようになった。皇帝の娘に悪口を聞かれたのだから、場合によっては皇帝に知られてしまう。

艦長は真っ青になってメレッサを見ている。

「大丈夫です、話したりしません」

メレッサは答えた。それに、きわどい話が出たついでに、以前から気になっていた事があった。

「一般の帝国の市民はドラル軍とミラルス軍のどちらを応援しているんですか？」

普通の市民の本当の気持ちを知りたかった。

「もちろん、ドラル軍です」

艦長が当然と言うように答えた。もちろんこんな質問をしても、この答えしか返ってこない事はわかっていた。

「本当の事を教えてください。そうは思えないんです」

ルビルにいた時の皇帝に対する庶民の感情を考えると、父を応援するものがあるとは思えなかった。

メレッサがきつい目で艦長を睨むと、艦長は落ち着きをなくして困ったように周囲を見ている。

「たぶん…　　わずかではありますが、ミラルスを応援する者もいる

かと思っています」

「わずかですか？」

そう聞くと、さらに艦長は落ち着きをなくした。

「いえ、かなりの者がそうだと思います」

父は人気がないのだ。力づくでの統治が嫌われている。これだけの大艦隊で攻め込んでもミラルスに勝てないのも、そこに原因があるのかもしれない。

下見が終わって帰る時、艦長はスケートリンクを作ってくれと言いだした。スケートなどした事がないし寒いのは嫌いだと言っても艦長は引かない。メレッサに弱みを握られたと思っっているらしい。

いよいよ、出撃の日が朝になった。

母は固くメレッサを抱きしめてくれた。

「くれぐれも気をつけてね」

母は心配そうだ、悲しそうな目でメレッサを見つめる。

「わかった、大丈夫」

これから、自分が戦争に行くなんて嘘みたいだった。

「敵がきたら、さっさと逃げるのよ」

冗談のようにも聞こえたが笑えなかった。

「わかった、すぐ逃げる」

旗艦に乗るのだし逃げるわけにはいかないだろう。でも、ルシルは逃げると言っていた。ルシルの考えが正しいのかもしれない。「手柄なんか立てなくていいのよ。一番後ろにいなさい」

私は左翼なので後ろには行けない。でも、自分の艦隊の中では一番後ろの安全な所にはいることになっている。

「心配しなくても大丈夫よ。旗艦は安全な所にいるの」

コリンスが宇宙艇の前で待っている。そろそろ行かなければならない。

「では、行ってきます」

最後に母がしっかりと抱きしめてくれた。

宇宙艇に乗り込むと、宇宙艇は静に上昇しはじめた。下で母が手を振っている、メレッサも窓の所で必死に手を振った。

宇宙艇はメレッサの艦隊にはいかず、まずは父の船に向かった。

父の船で作戦会議があるのだ。

父の旗艦はずいぶん小さな船だった。こんな船で大丈夫なのだろうか。

「皇帝の昔から愛用の船です、『メデューサ』といいます」
コリンスが説明してくれる。

父の旗艦に乗り込むと、セラブ提督とコリンスは会議室に入ったが、メレッサは係の人の案内で控え室に入った。皇族なので待遇が違うらしい。

控え室には、ジョル、ルシール、フォランが来ていた。兄弟の中で戦争に行くのはこの4人なのだ。

「よお、はりきってるわね」

ルシールが明るく迎えてくれた。

「姉さん、怖くない」

メレッサはかなり緊張していた。これから戦争に行くと思うとどうしても怖くなる。

「たいしたことないって、どこで戦争やってるのって思っているうちに終わっちゃうから」

ルシールは元気づけてくれる。

「それは、おまえが一番後ろにいるからだよ。前の方は結構大変なんだから」

ジョルが言うところルシールはふくれている。

「大丈夫、父さんの指示どおりに動いていればいい、それに部下がちゃんとやってくれるよ」

ジョルが教えてくれる。

「あたし全部、セラブ提督に任すつもり」

「それがいい」

ジョルが笑う。

「メレッサ」

ルシールが厳しい口調で言う。

「ヤバくなったら逃げなさいよ。面子なんかどうでもいいって。あとで父さんに怒られればすむことよ」

ルシール独特の考え方だ。でもこの考えが正しいのかもしれない、この戦争になんの価値があると言うのだ。

「わかってる、その時は逃げるわ」

でも、逃げる勇気があるだろうか、逃げるのが一番勇気がいるのかもしれない。

「俺は逃げないよ。逃げるなんて弱虫のすることさ」

フォランが言う。彼はいつも何故か不満そうだ。

「あんたも、ぎゃあぎゃあ言っただけで逃げなさいって」

ルシールが叱るように言う、ルシールはフォランに手を焼いているみたいだ。

「姉さんは卑怯だ。同じ兄弟なら同じように戦うべきだよ」

フォランもルシールに食ってかかる。

「フォラン、いいじゃないか、ルシールは女なんだ、男みたいにはいけないよ」

ジョルがなだめると。

「でも、メレッサは女でも立派に戦ってる」

ジョルはそう言われてメレッサをまじまじと見た。

「まあ、メレッサは男まさりだから……」

「兄さん！」

メレッサは叫んだが大笑いになってしまった。

世話役の人が会議室へ行くように伝えにきた。

28・継承順位

会議室は大勢の人達が集まっていた。この艦隊の將軍や提督など主だった人達だった。メレッサ達兄弟は最前列に座った。

やがて父が会議室に入ってきた。これから作戦の説明があるのだ。参謀部の人が大きなスクリーンを使って作戦の説明をしている。

ジヨルは話を熱心に聞いているがルシールはすぐに飽きてメレッサに話しかけてきた。

「あんたのスリナビって、私が乗っていたことがあるのよ」

「聞きました。室内プールがあるんですね」

「ほんとスケートリンクが欲しかったんだけど、だめだった」

そう言えば、あの艦長スケートリンクを作ってくれたんだろうか。「だから、今の私の船には最初からスケートリンクを作ったの。それもかなり広いやつ」

ルシールは戦争にはまったく関心がない。これから戦争に行くのに、これだけ達観できるのはそれなりの才能だろう。

「ねえ、遊びにこない？」

ルシールとスケートをするのは楽しそうだった。

「スケート、滑ったことがないの」

「教えてあげるわ、これが終わったらおいで」
ルシールはうれしそうだ。

やがて、参謀の作戦の説明が終わり。父が正面に出てきた。父はおしゃべりをしていた二人をきつく睨む。そして、おもむろに口を開いた。

「万が一を考え、指揮権の継承順位を言っておく。継承順1位がメレッサ、次がジヨル、以後は階級、先任の順とする」

会場にどよめきが起きた。拍手する者もいる。

メレッサは自分が理解した意味に自信がなかった。

「どういう意味？」

ルシールに聞いたが、彼女は頭を抱えている。冷たくメレッサを見ると。

「あんたがお気に入りって事。父さんが戦死したら、全軍をあんたが指揮するって事よ」

驚きだった。私が全軍を指揮するなんて信じられなかった。

あわててジョルを見た。ジョルはシヨックで蒼白な顔をしている。私が彼より上になったのに驚いているのだ。ジョルはルシールの向こうに座っているので直接声をかけることができなかった。

頭が混乱していた。このままでは兄弟達に嫌われてしまう。

「姉さん。あたしが兄さんより上だなんて無理よ、そんなの間違っている」

夢中でルシールに話したが、ルシールは冷たい目をしている。

「じゃあ、辞退したら」

「もちろんよ」

そう、辞退しよう。それがいい。

「わたし、辞退する」

そう言ったが、ルシールは怪しそうな目でメレッサを見ていた。

質問の時間があつて、將軍達が簡潔に質問していたが、しばらくして会議は終わった。

父は壇上から降りると兄弟の方に手を伸ばして来いと合図する、4人はあわてて立ち上がると、父について控え室に入った。

「ルシール、メレッサ！」

いきなり怖い声で怒鳴られた。

「話を聞いていたのか！」

てつきり継承順位の説明があると思っていたのに、おしゃべりをしていたことを怒られた。

「いえ……」

メレッサは答えた。おしゃべりに夢中で作戦の話は何も聞いていなかった。

「大事な作戦だぞ、わかっていなくてどうする！」

まったく、その通りだった。

「すみません……」

メレッサは小さな声で答えた。ルシールはブスツとしている。

「作戦の概要をまとめたレポートを書いて俺の所に持ってこい。今日中だ」

父はすごい剣幕で怒る。しかたなかった、ルシールの所へスケートに行こうと思っていたのに。

父はしばらく二人を睨んでいたが、座れと合図する。

4人が座ると、父は椅子の背に立ったまま腰を乗せた。

「ジョル、我慢しろ。メレッサを先にする」

ジョルに諭すように言う。

「父上、私は辞退します。ジョル兄さんの方が優秀だと思います」

メレッサは父の言葉を遮って夢中で言った。しかし、父はメレッサを無視した。

「ジョル。作戦の指揮能力はメレッサが上だ」

「父上、私は辞退します。全軍の指揮なんてできません」

必死で言ったが。

「お前はだまつてろ！ 後で話す」

厳しく一括された。

「メレッサのためなら死んでもいいと言うやつが大勢いる。だから、メレッサを上にする。いいな」

「わかってます、父上」

ジョルは悟ったような顔をしている。

「万が一の時は、メレッサの指揮下で戦います」

ジョルがそう言うと、父はめずらしく微笑む。

「よく言った。頼りにしているぞ」

父はジョルの肩に手を置くと、かるく握った。それから、顔を回すと。

「ルシール、フォラン、お前らもそれでいいな」

ルシールはブスツとしたままで、フォランは見るからに悔しそうにしている。

「私は反対です、納得できません」

メレッサが叫んだが

「だまってる！」

ものすごく怖い声で怒鳴られた。

父はしばらく黙っていたが、メレッサ以外は誰も意義を唱えなかった。

「よし、もう行け」

父が言うつと3人は立ち上がった。メレッサはどうしたものかと迷っている

「お前は残ってろ」

と父に言われた。

3人は部屋を出ていったが、出て行く時にルシールが素早く顔を寄せてきて、

「スケート、待ってるからね」

そう言って出ていった。

スケートって、今日は父の宿題があるはずじゃない。

「私には無理です。ジョル兄さんと入れ替えて下さい」

メレッサは父と二人になるとすぐに言った。

「お前にないのはやる気だ。能力はお前が上だ」

父は完全に私が優秀だと思い込んでいる。

「それは、買いかぶりです。絶対にジョル兄さんの方が優秀です」

なんとか、父の誤解を解かなければならない。

「メレッサ、自信を持ってい。それに、お前はすぐにでも国を一つ治めねばならん、おまえは、ほかの兄弟と事情が違うんだ、そうだろう」

父は急に不思議な事を言い出した。

「国を治める？」

なんのことだろう？ もっと領地をくれると言っているのか。

父は、つい口を滑らしたといった感じで、ちよつと悔しそうにしている。

「ルニーが俺に突きつけてる要求の事だ」

父はいらいらして少し歩くと、近くにあつた椅子に座った。

「まだ、決定はしとらんがルニーが強硬なんだ。あいつ、4つの要求を全部認めさせる気だ」

母が話していた父への要求の事を言っているのか？ 母は一笑に付されたと言っていたのに、それに要求は3つのはずじゃ。

なんの事がまったくわからない。ポカンとしているとそれを不審に思ったのか。

「悲願だつたんだろう、期待している」

父はぶつきら棒に言う。

母が私に何かを隠してると思った。母が何かを父に要求している、いったい何を要求しているんだろう。

「だから、お前には責任がある。甘ったれてる余裕はないんだ。分かったな」

何の要求かを父に聞くのは気が引けた。母との関係を疑われそうだった。まず、母に聞いてみよう。

「わかったな」

父はもう一度念を押す。

母の要求がわからない事には議論のしようがない。メレッサはしかたなく頷いた。

メレッサは体を下げる挨拶をすると部屋を出ようとした。

「忘れるな、今日中だぞ」

部屋を出る時、父が釘をさした。

29・兄弟達

メレッサは混乱していた。継承順位が一番というのは内心はうれしいのだが、兄弟の事を考えると憂鬱だった。ジヨルは父の前ではあんな事を言ったが内心は嫌だったはずだ。

考えながら自分の飛行艇の所へ向かっていると、コリンスとセラブ提督が待っていた。

「姫君、おめでとうございます」

セラブ提督がうれしそうにお祝いの言葉を述べた。

「ぜんぜん、おめでたくありません」

あの、やさしいジヨルとの間でさえ亀裂が出来そうなのだ、どこもめでたくなかない。

「ほお、これは意外ですな。ナンバー2になったのですぞ」

セラブ提督はメレッサが不機嫌なのが理解できないらしい。

「姫君、辞退を申し出てはいかがです？」

コリンスは心配そうだ。彼はメレッサの気持ちが変わってくれてるらしい。

「もう辞退したけど、だめだった」

「辞退ですと！」

セラブ提督は驚いている。

「何ゆえに辞退などと。このままいけば、お世継ぎの可能性すらありますぞ」

「セラブ提督。姫君はご兄弟との関係を心配されているのです。姫君にとっては権力よりご兄弟の仲の方が重要なのです」

コリンスが説明してくれる、コリンスはここまで私の気持ちをわかってくれるのだ。

「しかし姫君。兄弟は他人の始まりとも申しますぞ。このようなチャンスを見逃す手はありませんまい……」

「提督！」

コリンスが提督の話を遮ってくれた。提督の話はもう聞きたくなかった。コリンスが止めてくれて助かった。

「で、結局、引き受けたのですか？」

コリンスが聞ので、メレッサは力なく頷いた

「できるだけ早く、ジヨル君を訪問される事をおすすめします」

言われなくても行くつもりだった。ジヨルに説明しなければなら
ない。

「ルシール姫との関係はいかがですか？」

コリンスは心配してくれる。

ルシールは別れ際にスケートに誘うくらいだから怒ってはいない
のだろう。でも、スケートを口実に呼び寄せて言いたい事があるの
かもしれない。

「ちょうど遊びに行く約束をしています。ジヨルの後にルシールの
所に行ってきます」

「それがいいと思います」

しかし、それには困った問題があった。

「あの、コリンス。今日の作戦の話をちゃんと覚えている？」

不意に不思議な事を聞かれてコリンスは立ち止まった。

「もちろんですが？」

「じゃあ、概要をまとめて私に提出して、今日中よ」

コリンスはメレッサを睨んでいる。

「皇帝に何か言われましたね」

コリンスは勘が鋭い。なぜわかるのだろう。

「何の話？」

首を振って、とぼけてみた。

「姫君、ルシール姫とおしゃべりしていたでしょう。それを皇帝に
怒られましたね」

もうだめだ、全部見透かされている。コリンスって、ものすごく
頭がいいんだ。

「お願い、私はジヨルとルシールの所に行かなきゃならないの」

ちょうどいい口実になった、概要をコリンスに書かせればいい。
コリンスは考えている。

「わかりました。しかし、あす、ご自分で概要を書いてください。
いいですね」

私も書くべきだと言うのか、コリンスは最近は部下じゃなくて先生みたくになつてきた。

「わかりました」

メレッサは先生に答えるように素直に答えた。

自分の宇宙船に戻ると、その足でジョルの宇宙船に向かった。

ジョルは機嫌よく迎えてくれた。彼の部屋は驚くほど質素で、壁には艦隊の動きが分かるようにいろんな端末が綺麗に配置されていた。立体スクリーンには今も艦隊の動きが表示されている。遊ぶことしか考えていないメレッサの部屋とまるでちがった。

「わざわざ、どうしたの、継承順位の事？」

ジョルはごく普通に接してくれる、でも内心は穏やかではないだろう。

「兄さん、ごめんなさい。やっぱり辞退できなかった」

「気にするなよ、俺は何とも思っていない」

ジョルはあくまでも優しくしてくれる。

「これは、絶対に間違っているよ。兄さんの方が優秀だもん」

メレッサは部屋の端末類を見た。こんなに頑張っているのに。

ジョルもメレッサにつられて端末を見た。

「これ、すごいだろう。1万光年先まで探知できるんだ」

彼は自慢げに言おうとしたが、どこか言葉が宙に浮いた感じだった。

「兄さん、すごいよ、私にはこんなの全然わからない」

メレッサも話を兄に合わせたが、やっぱり、しつくりいかない。

ジョルは機器をさわっていた手をきゅうと握った。

「こんなの、何の役にもたたないよ。必要なのは人の心をつかむ能

力さ」

始めてジョルが悲しそうな顔をみせた。やっぱり、私に追い越されたのが悔しいのだ。

「兄さん、父さんにもう一度話してみる。絶対に兄さんが先だと思う」

メレッサはそう言ったがジョルは首を振った。

「君の方が優秀だよ。君はすごい人気じゃないか。君は自分の人気を知っているの？」

ミダカに行った時になんとなく分かった。それもおかしいと思うのだが、実力以上に人気が先行している。

「それに、ルニーがいるしね。君のお母さんが影で動いてると思うよ」

それは心が痛かった、母が私が知らない所で父に要求している、その影響がかなりあることは認めざるを得なかった。それに母にそれほど影響力が父にあるのにも驚きだった。

「世の中、いろんな資質がいるのさ。残念ながら俺はそれを持っていない」

彼はメレッサを見た。

「でも、君は持っている。それだけのことさ」

言い方は穏やかだが、やっぱり私の事を悔しく思っているってことだ。特に母親の力の差が悔しいらしい。

「わたし、どうすればいい、兄さんの言う通りにする」

「だから、気にするなと言ったろ。本当に俺は何とも思っていない」
ジョルがやさしくしてくれるほど、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

「そうだ、作戦の概要を説明してやろうか、父さんにレポート出さなきゃならないんだろ」

ジョルは作戦の内容を説明してくれた。

しかも、すべてジョルが文書にまとめてくれた。

「これを父さんに出せばいい」

最後にレポートをメモリーに入れて渡してくれる。

「ありがとう」

なんとお礼を言っていないか分からない。私のようなバカがジョル兄さんより上だなんて間違ってると思った。

次はルシールの所へ言った。

ルシールは気さくな性格なので、うじうじと根に持つようなことはしない。何にも怒ってなくて、本当にスケートをして遊んだ。

スケート靴を履いて氷の上に立つと、まったく動けない。ルシールに引っ張ってもらいながら練習したが最後まで手すりから手を離せなかった。

「ねえ、そろそろ帰らなくちゃ、レポート書かなきゃならないですよ」

メレッサがそう言うのと、ルシールが大声でわらった。

「バカね、出さなくても大丈夫よ」

「出さなかったら、また、怒られるよ」

「父さんは忙しいから、そんな暇ないって」

ルシールらしい、彼女は大物だ。それに、彼女は全軍を指揮する可能性はないのだから作戦を知らなくてもいいかもしれない。

「あたしは出す。だから帰るね」

「そうね、あんた真面目だもんね」

ふと、ジョルからもらったレポートを思い出した。

「これ、あげる。ジョル兄さんが書いてくれたの」

私は徹夜してでも自分で書こう、それが兄弟に対する責任だ。ルシールにメモリーを渡した。

「あんたは、どうするの？」

「あたしは自分で書く。それを見ていたからすぐ書けるわ」

ルシールはメモリーを握ってニヤツと笑った。

「わかった、これ、もらっとく」

その日はコリンスに来てもらって、徹夜でレポートを書いた

30・戦闘

次の日の朝、艦隊は出陣を開始した。

メレッサはブリッジの中央の椅子に座っていた。大きな窓からたくさんの宇宙船が飛んで行くのが見える。

隊列表を見ながらメレッサは彼女の艦隊の順番がくるのを待っていた。隣の第8旅団が動き出したから次だ。セラブ提督を見ると彼は頷いてくれた。いよいよだ。

「出発！！」

メレッサはできるだけ威厳を持って号令をかけた。

宇宙船が動き出した、彼女が乗っている宇宙船だけではない、彼女の艦隊全部の宇宙船が動き始めた。

立体スクリーンにはたくさんの宇宙船が雲のように写っている。

惑星セダイヤワが動き始めスクリーンからはみ出ていく。

「西側に展開して」

メレッサの守備位置だ。方向を現すのに銀河系内の向きを東西南北で呼んでいて、銀河系の中心から地球がある方向が東だった。銀河系の薄い方向は上下と呼んでいた。

「了解です」

セラブ提督が答える。

窓からははるか向こう、見えなくなるほど遠くまで宇宙船が見える。これだけの大艦隊が飛ぶのはまさに壮観だった。

艦隊はどんどん広がっていく、差し渡し10光年の広さに展開して進むのだ。

「巡航速度です」

艦長が報告する。これで、安定状態になったのでメレッサがブリッジにいる必要はなくなった。

「セラブ提督、お願いします」

メレッサもずいぶんと馴れてきた。航海が始まったので誰が指揮

権を持っているか常にはつきりさせておかねければならない、指揮権をセラブ提督に譲ればもう安心できる。

自分の部屋に戻ってきた。まだ、どこに何があるかまったく分かっていない。スケートリンクがあるのか知りたかった。

「ミルシー、スケートリンクはどこ？」

「こちらです」

ミルシーが案内してくれる。

侍女も戦争についてくるのだ。私は親の仕事が戦争だから、親について戦争に行くのはしかたないが、侍女は大変だと思った。

艦長はスケートリンクを作っていてくれた。ルシールのよりはかなり小ぶりだが綺麗なリンクだった。

ここで毎日練習しよう。ルシールの所でまったく滑れなかったことが悔しくてたまらなかった。

航海中、メレッサはコリンズに戦争のやり方を教えてもらった。戦争に行くのに戦争の事を何にも知らないのは不安だった。

航海を始めて8日ほどが過ぎ、艦隊はいよいよ敵地に侵入した。

ここからはいつ敵に攻撃されるかわからない。

艦隊の中央は父の主力部隊がいて、メレッサの艦隊はそこから西に5光年ほどの所に展開して進んでいた。

最初の攻撃目標、スラドニスはあと1日の距離に迫っていて、敵が迎え撃つつもりならもうそろそろ攻撃がある位置だ。しかも、艦の総数ではこちらが圧倒的に優勢だからミラルス王は奇襲攻撃をかけてくると思われた。

メレッサもできるだけブリッジにいた。敵襲があれば彼女がいても何の役にも立たないことは分かっていたが、それでも不安な気持ちで過ごすよりブリッジにいた方が安心できた。

メレッサは立体スクリーンを見ていた。たくさんの宇宙船が雲のように写っている。立体スクリーンには味方の船は写っているが、敵の船はその位置が分かった船だけがうつる。敵が潜んでいても敵の存在がわかっていなければ写らないから、敵がすぐ近くに待ち伏せしていても、敵が動き出すまでわからない。

「敵襲！」

誰かが叫んだ。ブリッジに緊張がはしる。

メレッサはあわててスクリーンを見た。ちょうどルシールの艦隊の真後ろに敵が現れた。ルシールの艦隊に奇襲攻撃をかけている。父が応戦の命令を出していて、付近の艦隊がルシールの方に向かい始めた。ルシールは後ろの方が安全だと言っていたのに……。

メレッサの艦隊には特に命令はない。何かしなければと思ってセラブ提督を見たが、彼は首を振った。ここに待機する以外にないのだ。

スクリーン上の敵の数が急激に多くなってきた。ルシールの艦隊をはるかに上回る。

「敵の規模は5旅団ぐらいです」

情報担当者が報告する。

「敵の全兵力だな」

セラブ提督がつばやいた。

ミラルス王は全兵力で奇襲をかけてきたのだ。

ルシールの艦隊は完全に蹴散らされて、ばらばらになっている。

ルシールの艦隊よりはるかに大規模な艦隊に後ろから奇襲をかけられたのだ、防げるはずがない。

スクリーン上では赤い色に変わる船が続出している、破損して機能喪失に陥っているのだ。ルシールは攻撃されたら逃げると言っていたが、彼女の船は果敢に戦っていた。

敵の艦隊はルシールの艦隊を突っ切ると、父の背後に襲いかかっている。敵の目的は父だったのだ。

「応援に行きますか？」

セラブ提督が聞く。

しかし、メレッサには応援は無駄に思えた。中央付近には味方の大艦隊が展開しているのだから、こんな遠くから助けに行っても何にもならない。

メレッサは何か自分に出来る事はないかと考えた。敵は戦力ではるかに劣るから奇襲をかけて打撃を与えたらすぐに逃げる作戦だと思った。逃げるなら要塞がある星に向かうだろう。

「コリンス。こっち側で敵の要塞がある星はどこ？」

「スサミスです」

素早くスクリーンに星に位置が表示された。もし、敵がこちら方面に逃げるならスサミスに向かうだろう。メレッサにアイデアが浮かんだ。

「提督。スサミスへのコース上で待ち伏せします。艦隊をコース上に移動させて！」

メレッサは興奮して叫んだ。

敵が逃げてくるコース上に潜んでいて近づいてきたら奇襲をかける作戦だ。敵の位置はもうわかってしまったが、こちらの位置はまだ敵に分かっていないから奇襲攻撃をかけることができる。

「いい考えです」

提督が頷く。

「メレッサ艦隊、進路145。全速」

提督が命令すると、艦隊が進路を変え始めた。

敵は必ずしもスサミスへ向かうとは限らないが、私は私のこの位置で出来る事をしなければならない。

31・艦隊の危機

スクリーンには中央での戦闘の様子が写っていた。周囲の船が応援に駆けつけているがまだ父の所に到着できていない。敵の大群が父に襲いかかっている、激しい戦闘が起きていた。

ルシールの艦隊は相当数が動けなくなっているが、それでも父の所で戦っている。ルシールの船もそこにいた。

「皇帝からの通信が途絶えました！」
情報担当者が叫んだ。

父に何かあったのか！ スクリーンでも旗艦の色が赤くなった。父の船が攻撃を浮け大破している。

「姫君、指揮権の取得を」
セラブ提督が叫ぶ。

全軍の指揮権をメレッサが持たなければならぬ。まさか、この私が全軍を指揮するのか、実際にこんな事がおきるなんて考えた事もなかった。

スクリーンでは敵が一斉に逃げ始めた、しかも、メレッサの作戦通りメレッサが待ち伏せしている方へ向かい始めた。

敵がこっちへくる。しかも、父はもう何もしてくれない。メレッサは頭が真っ白になった。

「姫君！！」

セラブ提督が怒鳴る。

メレッサは気を取り直した。指揮権の取得をやらなければならない。い。

「メレッサです。父からの通信が途絶えたので、私が指揮を引き継ぎます」

マイクに向かって叫んだ。

とりあえず指揮権は持った、しかし、もっと大問題がある。敵がこっちへ向かってくるのだ。それを一人で受け止めたら壊滅してし

まう。しかも、全艦隊はメレッサが命令しないと動かない。

「私は、敵を脱出コース上で待ち伏せします。全艦隊は敵を追撃して下さい、はさみ撃ちにします」

興奮して声がふるえていた。

スクリーン上では、全艦隊が動き出し、敵を追いかけ始めた。

敵はまっすぐこっちへ向かってくる。敵はメレッサの5倍の兵力があるのだ、これと正面からぶつかることになる。メレッサは急に怖くなった。さっきはよく考えもせず、とんでもなくバカな事を思いついたと後悔したが、もう遅かった。

「第1から第4旅団は、迂回して私と合流しなさい」

メレッサは命令を出した。自分の所に援軍が欲しかったからだ。とりあえず4旅団も集めれば何とかなるだろうと思ったが、それを聞いてセラブ提督が驚いている。

「戦闘には間に合いません。遊軍になってしまいますぞ」

セラブ提督に指摘されて始めて間に合わないことに気がついた。援軍が到着するところには勝負はついている。だから、援軍は戦闘に参加できない遊軍になってしまう。でも、それでも援軍が欲しかった。援軍が来てると思うだけで安心できる。あたしが指揮権を持っているのだから、少しはあたしのやりたいようにやっていいだろう。「姫君！ 待ち伏せ攻撃ですから、こちらが劣勢でも短時間なら十分に戦えます。ご心配無用です」

メレッサの心配が分かったのだろう、セラブ提督が声をかけてくれた。

敵がぐんぐん近づいてくる。でも、戦闘をどう指揮したらいいか分らない。

「セラブ提督。戦闘の指揮は任せます」

メレッサは無理はしなかった、戦争は戦争の専門家に任せた方がいい。

「わかりました」

セラブ提督が自信たっぷりに答えた。

「メレッサ艦隊へ、5分もちこたえろ、5分だ！　そうすれば味方の大艦隊が敵の背後に襲いかかる」

セラブ提督が艦隊に檄を飛ばした。

敵が目の前に来た。敵はまだ待ち伏せに気がついていない。

「全力後退。敵と速度をあわせる」

艦隊がさがりはじめた。止まっていたのでは敵と一瞬ですれ違ってしまうからだ。

「撃て！！」

セラブ提督が怒鳴った。

まぶしい光の筋が一齐に伸びていく。

「撃って撃って撃ちまくれ！！」

提督も興奮している。

全艦隊からすさまじい数の光の筋が伸びていく。

メレッサは緊張して体がガクガク震えた。

敵からも光の筋が飛んでくるようになった、シールドに当たってドシンと震える。

これで、味方が敵の背後を襲ってくれるまで持ちこたえなければならぬ。しかし、なかなか

味方はやってこなかった。

敵はメレッサの5倍の兵力があるのだから、敵が体制を立て直して突っ込んできたなら、壊滅してしまう。

敵からの光の筋がものすごい数になった。そこら中を飛んでいく、シールドに当たって激しく揺れる。

スクリーン上の味方の船が次々に赤い色に変わっていくが、敵を追ってきている味方の大艦隊はまだ距離がある。

メレッサは生きた心地がしなかった。ルシールの助言が頭をよぎる。あたしが逃げろって命令したらどうなるんだろ。セラブ提督は命令を聞いてくれるだろうか。

提督の額に汗がにじんでいる。

「提督！」

メレッサは思わず声をかけた。

「持ちこたえるんです」

提督は誰に言うともなく言う、今は頑張るしかない。
激しい音がした。シールドを破って着弾したらしい。

「損害を調べろ！」

艦長が叫んでいる。

「一步も引くな!!」

提督が艦隊に向けて怒鳴る。提督はかなりの犠牲を払ってもここを死守するつもりらしい。

スクリーン上では赤い点がどんどん増えている。このままでは壊滅してしまう。

やっと、味方の大艦隊が敵の背後に到着した。大艦隊が敵の背後から攻撃を開始し、敵は大混乱に陥っている。

飛んで来る光の筋が急に少なくなった。

「助かった…」

メレッサはほっとしてつぶやいた。体の力が急に抜けてしまう。

「姫君、大勝利ですぞ」

セラブ提督がうれしそうに言う。

メレッサもやっと落ち着きを取り戻した。逃げなくてよかった。

次々と後続の艦隊が敵の背後に突っ込んで行く。スクリーンにはバラバラに逃げ惑う敵の船が写っていた。このままでは壊滅するだろう。

「敵の側面も攻めるべきです。姫君、第8旅団に南側へ回るように指示して下さい」

提督が助言してくれる、メレッサにはどうしたらいいかまったく分からなかったから、戦争の専門家の意見に従うしかない。

「第8旅団、南へ回り敵の側面を攻撃して下さい」

メレッサはマイクに向かって指示をした。

「ミラルス王から、通信が入っています」

情報担当者が言う。降伏の申し出かもしれない。

「私が出ます」

メレッサは答えた。

やがて、立体テレビ電話にミラルス王が写った。精悍な感じの男で、やさしそうな目をしてる。

「ミラルスです」

透き通った声だった。

「メレッサです」

メレッサはできるだけ威厳をもって答えた。軽く見られてはいけない。

「メレッサ姫。あなたが指揮を取っているのですか？」

彼は少し驚いたようだった。

「そうです」

自分がこの大艦隊の中で一番偉いんだと思うと、ちょっと気持ちがいい。

「まだ、お若いのにたいしたものだ」

「用件は何でしょう？」

冷たく言った。相手に有無を言わず降伏させなければならない。彼はちよつと考えていたが。

「あなたにだったら、降伏します」

と言った。ちよつと虚栄心をくすぐられるような言い方だ。でも、父に降伏するのどう違うのだろう。

「条件は部下の命を助けていただくこと」

彼は続けた。

「降伏するなら、誰も殺したりしません」

メレッサは答えた。これが『私に』と条件を付けた理由なのか？父は降伏した相手の指導層を処刑する。私は絶対にそんなことはしたくない。私に降伏したのなら絶対に処刑はさせない。

「私に降伏するのなら、命は保証します」

メレッサは自分の決意を言った。

ミラルス王は穏やかに笑う。

「わかりました。あなたに降伏します」

彼は高貴な人を見るような眼差しでメレッサを見ている、降伏を受け入れるのは素晴らしく気分のいいものだ。メレッサは思わず笑みがこぼれた。

「では、戦闘を停止して下さい」

威厳を持って言おうとしたが、うれしくて威厳なんてどこかに吹っ飛んでしまった。

電話は切れた。

すぐに攻撃を止めなければならない。

「敵は降伏しました。戦闘を停止して下さい」

メレッサは全軍に命令した。

笑っては威厳がなくなると思って必死で笑顔を我慢していた。どこか、父の気持ちがわかるような気がした。

「姫君、おめでとうございます」

セラブ提督が声をかけてくれた、太ったお腹を突き出して満面に笑みを浮かべている。

「ありがとうございます」

メレッサもうれしかった。ミラルス王をこの手で降伏させたのだ。

「姫君、おめでとうございます」

ブリッジのあちこちから声が上がった。メレッサはそれに手を上げて答えた。

32・ミネーラ王家

メレッサは降伏の処理は別の船に任せて、父の船に向かった。父は無事だろうか、万が一の事が頭をよぎる。絶対に死んで欲しくなかった。

父の船に着いた。ひどい壊れ方をしていて、炎を吹き出している所もある。こんな小さな船に乗っているからだ。

中に入ると、煙にむせた、焦げる匂いが鼻をつく。

若い将校が彼女を待っていた。

「こちらです」

彼について煙の中を走り医務室に向かった。医務室には、もうルシールが来ていた。

「姉さん！」

メレッサはとっさにルシールの顔に涙を探した、が涙はなかった。

「今、手術中。たぶん、助かるだろうって」

「よかった!!」

一安心だった。

「どんな具合なの？」

「ひどい怪我で意識はないの。医者は何とか助けるって」

助かってくれるといいんだが、メレッサは心からそう祈った。

「こんな所で手術をしているの？」

この船は電力すらまともに発電できていないように見えた。

「緊急だから、仕方ないの」

それほどひどい怪我なんだ。

メレッサはルシールの横にすわった。

「果敢に戦っていたわね、感激しちゃった」

メレッサが言うと、ルシールは手を喉の高さに持っていた。

「『逃げる』って、ここまで出かったの」

ルシールはそう言って笑う。

「いえ、『父を助ける』と、ご命令になりました」

近くに立っていた男が言った。多分ルシールの参謀だろう。姉さんは父を助けるために敵の大群の中に飛び込んで行ったのだ。

改めてルシールを見た。言っていることとやることがぜんぜん違う。ルシールは戦争では役に立たないと思っていた自分が恥ずかしかった。

「変な目で見ないで、気持ち悪い」

ルシールが言う。

「姉さんは、本当に立派だと思うわ」

「変に勘違いしないで、部下が勝手にやったのよ」

ルシールは自分がやったと言うのが照れくさいのだ。

「手術が終わったら、父さんをあんたの船に運んでね」
ルシールが言う。

でも、父を看病するのはルシールがいいように思えた。助けに行ったのは彼女なのだ。

「いえ、姉さんの所がいいよ。姉さんが助けたんじゃない」

「あのね、あたしの所に来ると、スケートリンクがあることがバレちゃうじゃない」

ルシールはさも困ったというように言う。

「あら、あたしの所もよ」

メレッサがそう言うと、ルシールはキョトンとしている。

「あたしの所にもスケートリンクがあるの」

メレッサが言うとルシールは大笑いした。

やがてジョルが、少し遅れてフオランが駆け込んで来た。

4人並んで座って父の手術が終わるのを待っていた。

手術は無事終わり、結局、ルシールの船に運んだ。父にしてみれば自分を介抱してくれる子供をかわいく感じるはずだ、その幸運は絶対にルシールのものだ、彼女が命がけで父を助けたのだから当然だと思った。

メレッサが父の病室から自分の宇宙艇に戻ってくると、コリンスがすぐにやってきた。

「ミラルス王の降伏の署名式がありますから出席をお願いします」

「署名式？」

偉くなるとそれなりに忙しくなる。

「戦艦ゼノーバで行います。みんな姫君のお出でをお待ちしております」

みんなが私を待っている？ メレッサは当惑した。私の都合が最優先でみんなが待っていることさえ私には伝えられない、みんなは私の用が終わるのをじっと待っている、そこまで偉くなってしまったのか。

「すぐに行きます」

待たせては悪い、メレッサは急いで宇宙艇でゼノーバに向かった。会場は將軍や提督など、そうそうたるメンバーが集まっていた。

メレッサが会場に入ると全員が起立する、その中をメレッサは中央の椅子に進むと家臣を後ろにして座った。

ざわざわと家臣が椅子に座ったが、メレッサの正面にはミルビス王がそのまま立っていた。

彼は軽く一礼すると、メレッサの前に進み出た。

「私はミネーラの王女に降伏したつもりなのですが、それでよろしいですね？」

彼は不思議な事を言い出す。メレッサはあつけにとられた、この期に及んで新しい条件を付けようと言うのか。

「ミネーラの王女？」

「はい、王女さま」

彼は平然と言う。

「誰です、その、ミネーラの王女とやらは」

メレッサはきつい口調で言った。妙な条件は付けさせない。

しかし、ミラルス王はビクリしている。

「ミネーラの事をご存知ないのですか？」

「ミネーラの王女など会ったことはありません」

メレッサはピシツと言った。

しかし、ミラルス王はおもしろそうに笑う。

「お会いになったことはあるはずです、ただ、ご自分で会った事に気がついていないだけです。鏡をご覧になったことはあるでしょう」
鏡が何の関係があると言うのだ。

「メレッサ姫……」

メレッサが混乱していると、横からセラブ提督が小さな声で呼びかけてくる。

「なんです？」

メレッサも小さな声で答えた。

「母君からミネーラの事をお聞きになっていないのですか？」

ミネーラが母の故郷だということはミラバ艦長から聞いたが、母からは何も聞いていない。メレッサは首を振った。

「20年前、ミネーラ王家が皇帝に滅ばされましたが、母君はそのミネーラ王の王女だったのです」

驚愕の話が提督の口から出てきた。

「王女……！」

メレッサは提督が言ったことがしばらく理解できなかった。母が王女、信じられなかった。しかし、それで母が高貴な感じがする理由が納得できる。

「したがって、姫君はタイレム家とミネーラ家の両家のお血筋を引いておられるのです」

セラブ提督は続ける。

それって、私ってものすごく高貴なことじゃないか。

「銀河市民の間で姫君の人気の高いのはご存知ですか？」

ミラルス王が説明を引き継いだ。

メレッサはミダカの経験から、自分がなぜか人気があるのは知っていた。当惑した顔でミラルス王を見つめ、わずかにうなづいた。

「それは、ドラール皇帝の娘としてのメレッサ姫ではなく、ミネーラの後継者としてのメレッサ王女に人気があるのです」

メレッサはポカンとする以外になかった。私はいったい誰なんだろう。

母がミネーラの王女だったなら、ミネーラが滅んでいなければ今頃は母が女王になる。そうすれば私は王女。

「ドラール皇帝は嫌われていますから、人々はメレッサ王女に希望を託しているのです」

ミラルス王は静かに説明する。

「姫君は当然ミネーラの再興をお考えだと誰もが思っています。しかも、皇帝もご承知の上だと。でも、ご存知なかったのですね」

そう、ご存知なかった、母は教えてくれなかった。

「私は、メレッサ王女に降伏したいと思っています」

ミラルス王は澄み切った声で言う、その目も澄み切っていた。

しかし、そんな事を言われても困る。メレッサは父に逆らう気など毛頭なかった。もし、私が父が滅ぼしたミネーラの王女を名乗ったら父が許してくれるはずがない。母がミネーラの事を私に言わないのも父が許すはずがないからだ。

「それは、無理です。私はミネーラの王女ではありません」

ここははつきりそう言うておかなければならない、でないと、父から謀反を疑われることになってしまう。

「では、私以外は降伏するが、私は降伏しないと言う条件で降伏させていただけないでしょうか」

彼は不思議な事を言い出す。

「いったい、どうしたいのです？」

「ドラールへの降伏は私のプライドが許さんのです。あなたに処刑してもらう方がまだましです」

また、混乱するような事を言い出す、私が人を殺せるわけじゃないじゃないか。

「あなたも含めて降伏しなさい」

メレッサは言ったが。

「私はメレッサ王女以外には降伏しません」

彼は強硬に断る。私にメレッサ王女を名乗れと言っているのか。でも、それは無理だ、名乗ったら謀反になる、娘でも父から処刑されるだろう。

「私は謀反を起こす気はありません。私はメレッサ・タイレムです」はつきり言った。ミネーラは20年前に滅んだのだ、そんな亡霊を引きずっていてもしょうがない。

「では、先ほどの降伏条件で降伏します」

ミラルス王は直立の姿勢をとった。彼の決意は固いようだった。

「わかりました、その条件で結構です」

彼を処刑しなければ、この条件でも結果は同じことになる。作り直した降伏文書にミラルス王は署名した。

33・父とルシール

署名式が終わって、メレッサは控え室に戻ってきた。セラブ提督やコリンスも一緒だ。

「ミネーラの事をもっと詳しく教えて下さい」

自分の事なのに、なぜ私だけ知らないのか、腹が立つ。

「ミネーラ王家は20くらいの星を従えた小さな王家です。皇帝の攻撃を受け王族は母君を除いて全員死んだと聞いております」

そんなひどい事があったのか。

「その事は誰でも知っていることなんですか？」

あの会場の中で私だけが知らなかったなんて、ひどい話だ。

「たぶん、みんな知っていると思います。ただ、微妙な話ですので、姫君の方から話題にしない限り、この話を姫君にする者はいないと思います」

それで、私はこの話にまったく気がつかなかったんだ。

「ただ、庶民の間では、メレッサ姫が宮殿の中で力を増すにつれてミネーラ王家再興の可能性が出てきたと期待されています」

ふと、ミラバ艦長が言った事を思い出した。彼はこの話をしていたのだ。

「ミネーラが再興される可能性はあるんですか？」

メレッサには疑問に思えた。20年も前に滅んだのに。

「もし、姫君が帝国を引き継がれたとしたら、姫君のお心次第となります」

心臓がドキンとなった。そうなんだ。その時は私が決められるんだ。もし、ミネーラを再興したら母が喜ぶだろうなと思うとうれしかった。母の悲願だったにちがいない。

『悲願』で父が言った言葉を思い出した。

そうか、指揮権の継承の話をした時に父が言っていたのは、この事だ。まさか私がミネーラの事を知らないとは思っていなかったん

だ。では、父の話ではミネーラはすぐにも再興されるのかもしれない。しかも、そこが私の王国になる。

母の国ミネーラ。ミネーラってどんな国だったんだろう。

「ミネーラ王国って、そんなにいい国だったんですか？」

メレッサが聞くとセラブ提督はちよつと考えている。

「昔の事で私もよくは知らんですが、普通の王国だっただろうと思います。ただ、今の生活の辛さが期待となっているのでしょうか。貧しい暮らしを知っていて、かつ王家の血を引いている、それが私の人気の秘密だったのだと、やっと理解できた。

ミネーラを滅ぼしてその王女を略奪し、その王女に子供まで産ませたのに、その子供に帝国を乗っ取られる。人々はそれを喝采しているのだ。

父が意識を取り戻したと連絡があった。メレッサは急いでルシールの宇宙船に向かった。

ルシールと一緒に病室に入った。

父は電線やらチューブにつながれてベットに寝ていた。

「ご気分はいかがですか？」

メレッサはベットの横にすわった。

「メレッサよくやった。お前ならやれると思っていた」

父に褒めてもらうのはうれしかった。もう、だれかが戦争の事を父に報告しているらしい。

「すぐに、待ち伏せに動いたのは、いい判断だった。この勝利は以前の勝利だ」

父は手を伸ばしてメレッサの頬をさわる。メレッサはその手を握った。父に喜んでもらえてうれしかった。

ふと、ルシールの事が気になった。誰かが彼女の貢献を父に話しているのだろうか。

「父さんはルシール姉さんが救ったんですよ。姉さんは敵に大群の

中に飛び込んで行っただんです」

「ルシールが？」

父は驚いたようにルシールを見た。

やっぱり、誰も父に伝えていなかったんだ。

「どうせ、逃げるのを部下に反対されて、逃げられなかっただけだろう」

父は吐き捨てるように言う。

メレッサは息をのんだ。なんという事を。

「違います！ 姉さんは助けに行けと命令したんです」

これは、ひどすぎる。命を助けてもらったのに、この言い方はあんまりだ。

「姉さんの艦隊は大損害を出しています。それでもお父さんの所へ助けに行っただんです」

「逃げなかった事はなんの自慢にもならん。もし逃げてたら許さん」

父独特の言い方が始まった。厳しい言い方しか出来ない人なのだ。

「父さんは命を助けてもらったんですよ。姉さんに誤って下さい」

メレッサは興奮してきた、絶対に許せなかった。

「なにを生意気な！！」

父も興奮してきた。

「やめなさいよ、父さん大怪我してるんでから、興奮させちゃいけないよ」

ルシールがメレッサを止める。

「でも、姉さん」

ルシールは平気な顔をしている、彼女はあんな事を言われて何とも思わないのだろうか。

「昔からこんなだから、別に気にしてないよ」

ルシールと父との付き合いはメレッサよりはるかに長いのだ。メレッサが心配してるこの方がルシールには迷惑なのかもしれない。父は体に巻きつくチューブを邪魔そうに動かしている。メレッサはチューブを整理して邪魔にならないようにしてあげた。

「ミラルス王は殺したか？」

父が聞く。その問題があったのだ。

「いえ、今、監禁してあります」

今、父と議論するのはまずい、また父が興奮すると怪我によくない。

「殺せ、お前の手で首をはねろ」

父は極端な事を言い出す。父はこの方針でずっとやってきたから、父にとっては当然のことなのだろう。

「少し、考えさせて下さい」

この問題は、父が元気になってから議論すればいいと思った。

「お前もそのくらい、出きるようにならないかん」

父はさとするように言う。でも、とても無理に思えた。この手に剣を持つて人の首を切り落とすなど絶対にできそうにない。

ふと、父はルシールを見た。

「お前なら、出来るな」

ルシールに聞く。

「はい」

ルシールは低い声で答えた。メレッサはビックリしてルシールを見上げた。

まさか、ルシールは本当にそんなことが出来るのか。

「じゃあ、メレッサにやり方を教えてやれ。ただ、殺すのはメレッサにやらせるんだぞ」

「わかりました」

ルシールは特に困った様子もない。本当に引き受けるつもりなのか。

メレッサが驚いてルシールを見つめていると。

「何を驚いているのさ、やってみれば意外と簡単だって」

ルシールと最初に会った時に、使用人を殺せと言われた事を思い出した。付き合ってみればいい人達なので忘れていたが、この兄弟はそのような事ができるように育てられているのだ。

病室の扉が開いて、医者や看護師が入ってきた。包帯を交換すると言う。

メレッサは立ち上がった。

「じゃあ、また来ます」

ルシールも手を上げた。

「ルシール」

二人が病室を出ようとする、後ろから父の声がした。

二人が振り向くと、

「ありがとう」

父が言った。ルシールはちょっとうれしそうだった。

34・ルシール

次の日。艦隊はミラルスの周回軌道に浮かんでいた。ミラルスを占領するためだ。

ルシールがメレッサの宇宙船にやってきた。メレッサはルシールを出迎えたが憂鬱だった。本当にミラルス王を殺すつもりだろうか。「ねえ、スケートリンク、見てみる」

話をそらそうと思ったが、ルシールは後ろにいた家臣に振り向きもせず左手を差し出した。家臣が彼女の手には細長い物を渡すと、ルシールはそれをスラリと引き抜いた。それは日本刀だった。

「これで、斬り殺すんの、いいわね」

平然と刀を持ったルシールの顔は狂気に見えた。

ルシールは刀を鞘に収めるとメレッサに突き出す。

「持って」

ルシールとは兄弟の中で一番仲がよかったのだが、今日のルシールは近寄りがたい。メレッサは両手で刀を受け取った。

「ミラルス王はどこ？」

ルシールは厳しい態度で聞くので連れていけないわけにいかなかった。ルシールの家臣と3人でミラルス王を監禁している部屋に向かった。

部屋の前に着くと部屋の前に立っていた見張りの衛兵が扉を開けてくれた。ミラルス王は机に座って書き物をしていたが、二人を見てゆっくりと立ち上がった。

「ミラルスです」

ミラルス王はルシールに挨拶をした。ルシールとはまだ会ったことがないからだ。

「ルシールです」

ルシールは凜として答えた。

「あなたがルシール姫。お会いできて光栄です」

ミラルス王は楽しそうにしている。

「あなたには一度お会いして話がしたいと思っていました。今日はお話ができるのですか？」

「いえ」

ルシールは厳しい顔をしている。

「今日は、あなたを処刑に来ました」

ミラルス王はちよつと驚いたように、二人の顔を見た。

「そうですか…… お二人で処刑の立会いですか。でも処刑する所は見えない方がいい」

「いえ」

ルシールがミラルス王の言葉を厳しい口調で遮った。

「メレッサがあなたの首を切り落とします」

ミラルス王はビククリしてメレッサを見た。

「あなたが… 艦隊を指揮したかと思えば処刑もご自分でやられるんですか？ たいしたお方だ」

「いえ、そういうわけじゃ……」

メレッサは何と言っていいかわからなかった。処刑なんて自分に行けるわけがない。

それから、ミラルス王はメレッサが持っている刀に目をやった。

「日本刀ですね。では、今から処刑ですか？」

「いえ……」

メレッサはそう言いかかったが。

「そうです!!」

ルシールが厳しくメレッサを止めた。

ミラルス王はまじまじとルシールを見ている。

「わかりました。覚悟はできています。場所はどこでやるんですか？」

彼はルシールが主導権を持っているとみたのか、ルシールに聞く。
「ここでやります」

ルシールもかなり緊張して答えた。

ミラルス王は深呼吸をした。

「で、やるのは、メレッサ姫……ですか？」

やはりルシールに聞く。

「そうです。メレッサがやります」

ミラルス王は机の所に行くと、椅子を持ってきた。そして、二人の前に椅子を置くと二人を背にして座った。

「さあ、ひと思いにやって下さい」

ミラルス王は落ち着き払っている。二人を背にして椅子に座っているの後ろから首を切りつけ安い姿勢になっている。

ルシールはメレッサを睨むように見た。刀を抜けと言っているのだ。しかし、メレッサは刀を抜くなんてできなかった。

おどおどしてルシールを見ていたら、ルシールが刀を奪い取った。すらりと剣を抜くと、切っ先を真上に向けてメレッサに突き出した。持てと言っている。

メレッサは仕方なく刀を受け取った。日本刀が鈍く光っている。しかしメレッサは困ってしまった。殺すなんて絶対に無理だ。剣を握り締めたまま呆然と立っていた。

「早く殺りなさい！！」

ルシールがきつい声で言う。

「無理です」

メレッサは泣きそうになっていた。ルシールがこんなに厳しい人だとは思わなかった。

「殺りなさい！！」

ルシールが怒鳴る。

メレッサは剣を握り締めた。しかし、殺るにしても剣では無理に思えた。ひと思いに殺らなければ死ぬまでに長い時間苦しむことになる。

「剣でなんて無理よ。返り血とか浴びるよ。返り血が髪にかかった

ら後が大変よ……」

メレッサは何とか言い訳をこねくりだした。

そう言われて、ルシールは目を寄せて、自分の目の前にたれている自分の前髪を見ている。自分の髪に血がかかる所を想像しているらしい。

「剣はやめよう。ヘブン、銃をちょうだい」

ルシールはあっさり方針を変更した。彼女が家臣のヘブンに手を差し出すと、ヘブンは自分の銃をルシールに渡した。それをルシールはメレッサに握らせた。

「じゃあ、銃よ。いい」

それを聞いていたミラルス王は立ち上がると、椅子の向きを変えて正面向きにすわりなおした。

「銃なら正面から撃つて下さい」

彼はこれから殺されるというのに落ち着き払っている。むしろ、さつさと殺さない事にいらついているようにさえ見えた。

メレッサはまじまじと銃を見つめた。銃を手にするのは始めてだった。それをミラルス王の方に向けたが、引き金を引く勇氣なんてあるわけがなかった。なんとか、この窮地を抜け出さなくてはならない。

「なにやってるの、撃ちなさい！！」

ルシールが横で怒鳴る。

正直、ルシールがこんなに残酷な人だとは思わなかった。彼女は人を殺す事を何と思っているのだろう。

「無理、出来ない」

メレッサは銃を降ろした。

「いくじなし！！ さあ銃を上げて」

ルシールはきびいし。

「姉さんはできるの？」

試しに聞いてみた、ルシールは平然と人を殺す事が出来るのだろ

うか。

「できないと思っているの？」

彼女は激しくメレッサを睨み付ける。

「かして」

ルシールはメレッサから銃を取り上げ、それをミラルス王に向けた。

あつと言う間だったので簡単に銃をルシールに渡してしまった。撃つっと思つて目をつぶった。

しかし、ルシールは銃を向けたまま撃たない。やがて銃を降ろすと深呼吸をした。そしてキツとなつてメレッサを見た。

「どこを撃とうか、考えていただけよ」

もう一度銃をミラルス王に向けた。しかし、なかなか撃たない。ルシールの額に汗がにじんでいる。やはりルシールにも撃てないのだ。メレッサは心のどこかでホットしていた。

「あたし、自分で殺したことはないの」

ルシールは一旦銃を降ろすと、もう一度狙い直した。しかし、撃てない。

「ルシール姫」

突然、銃で狙いを付けられているのにミラルス王が話し始めた。

「今度の戦いで、あなたは私の船と直接戦ったのにお気づきでしたか？」

「いえ」

不意を付かれて、ルシールは真面目に答えた。

「我々の大群の中に突入してきて、無謀とも言える勇敢な戦い方でした…… 皇帝があなたを軽く見ているのが理解できない」

「私をおだてれば、私が見逃すと思つたら大間違いよ」

ルシールはキツとなつて銃をミラルス王に向けた。

「命乞いなんかしませんよ。ただ、あなたは、もっと自分に自信を持つていい。皇帝の8人の子供の中で、あなたが一番、物事を冷静

に見る目を持っている。そして、今回の戦い方は誰にでもできる事じゃない」

「言いたいことは、それだけ？」

ルシールは冷たく言うつと、銃を握り直した。そして狙いを付けている。でも、もうルシールからは人を殺す気迫が伝わってこなかった。

ルシールが、父から不当に冷たく扱われているのはメレッサも気がついていてた。ルシールはさぞ悔しいだろうと思うと、ルシールが父に反抗的なものもうなずけた。

「姉さん、撃たなくていいよ」

メレッサは銃にそつと手をかけた。

「そうね、父さんの言う通りにすることもないわね」

ルシールはしずかに銃を下ろした。そして、少し考えていたが。

「馬鹿げてる！」

ルシールはいきなり銃を後ろへ、ほおり投げた。

「もう、こんな事やめよう」

ルシールの顔にいつもの表情が戻ってきた。人をバカにした様なあの自信たつぷりの表情だ。父に認めてもらおうとして無理をしていたのだ。

「ねえ、スケートリンク見にいかない。すごく小さなリンクがあるのよ」

「あの艦長、スケートリンクは無理だつて言ったのよ」

「じゃあ艦長を殺す？」

「そうするか」

ルシールはミラルス王など、そこにいないかのように話し始めた。ルシールは父に見栄をはるような人じゃない。自分でもそれを思い出したのだ。父に気に入られようなどと絶対にしないのがルシールなのだ。

部屋を出る時、メレッサはちょっと振り向いてミラルス王に手でお詫びをした。殺されると思って緊張していただろうに。

ルシールとメレッサは思いっきりスケートを楽しんだ。メレッサのスケートリンクがずいぶん小さいのにルシールは満足したみたいだった。

次の日、メレッサは父の所に行った。

病室には一人で入った。父は辛そうにしていたが、メレッサが来ると頭をこちらに向けた。

「大丈夫ですか、何かして欲しいことは？」

「ルシールがしてくれてる」

よかった、ルシール姉さんはやさしいところがあるんだ。

「埋め合わせ券をもう一枚使いたいんですが」

父は少し笑った。

「殺せないか」

「はい」

父は静かにメレッサを眺めている。

「お前の好きにしろ。お前の捕虜だ」

父もメレッサの事を分かってくれている。

「ルシール姉さんにずいぶん怒られたんですが、どうしても出来ませんでした」

「そうか」

父は怒る気力もないようだった。かなりきつそうだ。

父は机の方に手を伸ばす。机の上を見ると言っているようだ。

机の上には書類が2枚あった。

「ミネーラの再興を認める書類だ、署名してある。それと、お前を世継ぎにするとした書類だ」

ビックリである。なぜ、こんな書類を。

「このまま俺がくたばるとまずいと思つてな、さつき作らせた」

ミネーラの再興は母が喜ぶだろう、でも、世継ぎは問題だ。

「お父さん、気持ちはありがたいのですが、私では兄弟を押さえきれません。世継ぎはジヨル兄さんがいいと思います」

「問題はルシールとフオランだろ、逆らったら殺せ」

父は驚く事を言う。

まさか、兄弟を殺すなんて。しかも、父にとってはかわいい我が子なのに。

「俺も兄を殺した…… 仕方のない事だ」

「私は、絶対に兄弟を殺したりしません」

兄弟を殺すくらいなら、帝国が崩壊した方がいい。

「その時がきたらわかる。決断しろ。その時に俺に遠慮する必要はない」

「いやです、だから、ジヨル兄さんがいいと思います」

「ジヨルでは無理だ。お前の気の強さが必要なんだ」

「でも、私はバカです」

父はメレッサを見つめた。

「もつと自分を信用しろ。バカでは戦に勝てるはずがないがお前は2回も勝っている」

父は横を向いた。壁をみている。

「ミネーラの再興の方はルニーの要求だ。あいつ、要求を突きつけやがつてな……」

父は独り言のようにつぶやいた。

メレッサは母が父に突きつけたという要求を思い出した。まさか、あの要求を父が受け入れたので、こうなったのか。

「これは、母が私を世継ぎにと要求しているからですか？」

もし、そうなら、とんでもない間違いだ。母はひどい悪女だ。

父はこちらを見た。

「お前を世継ぎにするのは俺の意志だ、ルニーの要求とは関係ない」

父はメレッサを見つめる。

母は思っていたより悪い女なのかもしれない、自分の子を世継ぎに要求するのはいい事とは思えない。でも、そんな女に騙される父ではないと思った。

それに、もう一つ気になった。確か、母の要求には正式な結婚があつたはずだが……

「正式な結婚の要求はどうなったんですか？」

思わず聞いてしまった。

父は少し照れくさそうに笑った。

「もう、申し込んである」

なんと、父と母が結婚する。

「母が拒んでいるんですか？」

「そうだ、側室を退けると言っただけだ」

なんと愚かな、もう側室くらいいいじゃないか、それに側室だつて可哀想だ。

「私が説得します」

絶対に母を父にくつつける。二人が結婚したらどんな家庭ができるだろう。

しかし、父は手を振った。

「やめとけ、こじれるだけだ」

「絶対に説得してみせます」

メレッサは急に元気が湧いてきた。

「やめとけ。それより、ミネーラはお前が女王になることが条件だ。ルニーではいかん。お前が女王なら帝国の領地と同じことだ」

なるほど、私は両方の血を受け継いでいるから、私が女王になればミネーラが帝国領でもミネーラ領でも同じことになる。

「世継ぎは俺が元気になったら正式に発表する」

父はきつそうに目をつぶった。眠ったのか、じつと動かない。

手に持った世継ぎの書類を見つめたが、もはや、引き受けるしかなかった。

「ありがとうございます、お父さん。期待に応えられるようにがんばります」

メレッサは小さな声で言った。

35・母

艦隊はミラルスの占領を終えて、セダイヤワに帰ってきた。

メレッサは自分の宮殿に戻ってくると、母が出迎えてくれた。

「お母さん、ただいま」

メレッサは母に抱きついた。

「お帰り、戦争の話は聞いたわ。あなたが敵をやつけたんですって」
母はメレッサを抱きしめてくれた。

「なぜ、ミネーラの事、話してくれなかったの？」

メレッサはすぐにミネーラの事を切り出した。なぜ教えてくれなかったのかと腹がたっていた。

「聞いちゃったのね。でも、知っていてもしょうがないと思ったの」

「知らないのは私一人だったのよ、本人なのに、みんなの前で大恥かきちゃった」

「そう、それは悪かったわね。でも、もう遠い昔のことよ」

母はどこか辛そうにしている。

「ミネーラの事、教えて！」

母から正確な事を聞きたかった。しかし、母は下を向いて眉をかめている。

「そうねえ、ミネーラはね……」

母にとって、ミネーラの事を思い出すのは非常に辛いことらしい。そうかもしれない、家族全員殺され、生き残ったのは母だけで、その母も奴隷のように略奪された。だから、母はミネーラの話をする事ができなかったのだ。

「ミネーラは小さな王国だったの……」

母は話し始めたが、辛そうにしている。メレッサは母への怒りは消えてしまった。もう、無理に母から話を聞くことはない。それより、いい話を先にした方がいいかもしれない。

「そうだ、お母さん、これ見て」

メレッサは父からもらった書類を見せた。

「父がミネーラの再興を認めるって」

母は驚いてしばらく書類に手を出さなかった、おずおずと書類を受け取ると食い入るように読んでいる。

「お母さん、よかったね」

母は顔を上げた、涙が浮かんでいる。

「ミネーラは過去の事だと思っていたわ」

「私はミネーラの女王だって」

「あなたが女王」

母は涙を浮かべながら笑った。

「お母さんが女王になりたかった？」

母は首を振った。

「わかってる、あなたが女王だから皇帝が許したのよ」

「いつか、ミネーラに行ってみる？」

「そうねえ、家族のお墓がどうなっているか、見てみたい……」

母はたまらずに泣き出した。

ミネーラには私のおじいちゃんやおばあちゃんのお墓があるのだ、
どんな人だったんだろう。

メレッサの部屋に戻ってきた。やっと落ち着くことができる。

母と一緒に長椅子に座った。

「父さんと結婚するの？」

それとなく聞いてみた。母はビックリしている。

「皇帝から聞いたの？」

メレッサはうなずいた。

「結婚はしないわ」

母は向こうを向いたままつぶやく。

「側室の問題？」

「皇帝がそう言ったの？」

メレッサはもう一度うなずいた。

「関係ないわ。結婚したくないだけ」

「でも、正式な結婚はお母さんの要求じゃなかったの？」
母はわらった。

「あの時の話ね。あれは皇帝に欲しいものはないかと聞かれたので、皇帝が困る事を出まかせに言っただけ。本当に欲しいものは一つしかないわ」

「何が欲しいの？」

欲しいものによっては父を説得できるかもしれないと思った。

でも、母は首をふった。

「秘密よ」

そのゾクツとする冷たい響きに、メレッサは直感した。母が欲しいものは父の命だと。まだ父を怨んでいる、家族を殺された事が忘れられないのだ。

メレッサが固くなっていると、それを察したのか。

「あの日。みんな刑場の柱に縛り付けられて、順番に撃たれていったわ。私は別の場所に縛られてそれを見ていたの」

母は鬼のような顔をして冷たくメレッサを見つめる。

「全部、あなたのお父さんが殺った事なのよ！！」

メレッサは自分が憎い男の子供だという事を始めて自覚した。涙がぽろぽろ出てきて止まらない。

突然、母が抱きしめてきた。

「ごめんなさい。ごめんなさい。あたし、なんて事を」

母は泣きながらメレッサを強く抱きしめてくれる、「ごめんなさい」を何度も何度も繰り返し替えて。

メレッサも母に抱きついた。

侍女が気を使って部屋から出ていった。

広い部屋に二人で抱き合って泣いていた。

やがて、少し落ち着いてきて、母はメレッサを離れた。

「もう忘れたと思っていたのに…… まだ怨んでいたのね」

母はゆっくり話し始めた。

「でも、私は被害者じゃない。私は知らないけれど、父は国民に同じ事をしていたはずよ。だって刑場があるんだもの」

メレッサの髪をなで上げてくれる。

「今の暮らしだって、いつひっくり返るか分からない。この豪華な暮らしの代償をいつか払わなければならない時がくるかもしれない

…… 私の家族をそれを払っただけなの」

母は深呼吸をすると、両手を伸ばして手を強く握り締めた。

「もう、完全に忘れたわ。出直しよ」

母は明るくメレッサの顔を見る。

「顔を洗いましょ、あなた、ひどい顔よ」

メレッサはやつと笑った。母の顔もひどい顔だった。

顔を洗って窓から外を見ていた。幼い日に見た景色だ。母が化粧を直してからやってきて、外をみているメレッサの肩に後ろからそつと手をおいた。

「私に結婚して欲しいの？」

とんでもない、母が嫌な結婚を無理強いするつもりなどない。

「嫌いな人と結婚なんてしないで」

「そうでもないのよ」

母はのんきそうに言う。うそだと思った。さっきの話が母の本心だ。

「私のために、これ以上嫌な事をしないで。今でも充分に嫌な事をしてるんだから」

「平気よ、嫌じゃないわ…… ここをもらった時に覚悟は決めたはずなんだけどね。ウジウジと引きずっていたから、ひどい目にあっちゃった」

ここから逃げ出して、ルビルで貧しい生活をしていた事を言っているらしい。

「今も、そうなのかも、人が見たらうらやむような幸運をあっさり捨てようとしてるのかもしれない」

「そんな理由で結婚しちゃだめよ」

メレッサはそう言ったが、母はじつとメレッサを見ていた。
「わかってる、好きじゃないと結婚はできないわ」

侍女がいないのでテーブルの上のお茶が冷えていて、二人で冷えたお茶を飲んだ。冷えたお茶はルビルを思い出させる。メレッサにとってルビルは楽しい思い出だった。

それから10日ほどたった。父が車椅子で動けるようになったので、戦勝会が催された。ここで世継ぎとミネーラの事を発表する事になっていた。

控え室に母と待機していると、係の人が呼びにきた。

会場は、正面の両脇に兄弟とその母親達が座り、4列のテーブルが縦に伸びていてそこに大勢の家臣が座っていた。

兄弟達は全員すでに座っていた。いつもの席に座ろうと思ったが、そこにはすでにミリーが座っていた。

係の人に案内されて、母は父の横の席にすわった。その席は父と対等の位になっている。

さらに、その横に、メレッサのために父と同格の席が準備されていた。父と同格なんておかしい。

「今日はミネーラ女王としての参加になります」

係の人が説明してくれる。

一つの独立国の君主ならば、立場は父と同格になる。

メレッサがその席に座ると、会場からどよめきが起きた。

父が車椅子で会場に入ってきて、母の横に座った。母はうれしそうに父をみている。

式典が始まった。

父が戦の勝利について話しはじめた。武功があつたものを褒め称

え犠牲者を追悼している。

次に世継ぎの話になった。

「世継ぎはメレッサとする」

父は宣言し、メレッサの方へ手を広げた。メレッサは立ち上がり頭を下げた。

会場から拍手がおきた。

メレッサは兄弟達を見た、ジョルヤルシールも拍手してくれている。納得してくれたのだろうか。フォランはしぶしぶ拍手しているように見えた。

「次に、メレッサのもう一つの血筋であるミネーラ王家の復活を認める。領土も元のままだ。今日よりメレッサがミネーラの女王となる。帝国とミネーラとは同盟関係となる」

同盟関係？ 私はまだ帝国と同盟など結んでいないのだが……。

メレッサが不審に思っていると、父はメレッサの方を見た。

「よろしいですね、ミネーラ女王」

「もちろんです」

メレッサは答えた。

会場からは先ほどの何倍もの拍手がおきた。メレッサは拍手の中を席に座った。

「さらに」と父は続けた「私は、妻を迎えることにした」

会場から大きなどよめきがおきた。

「数々の要求を突きつけられたが。今回それをすべてクリアして結婚できることになった」

父は母の要求を本気にしている、じゃあ側室も退けることにしたのか。

父は、母との結婚の話を珍しく雄弁に話していた。

母はそれでよかったのだろうか。

父の紹介が終わり、母が立ち上がって頭を下げた。ものすごい拍手がおきた。

式典は終わり、食事が始まった。

メレッサは椅子を滑らして母の横に行った。母も顔を寄せてくれる。

「それでよかったの？」

メレッサは心配したが、母は平気な顔をしている。

「望まれる結婚が一番幸せかなと思ったの。それに、あなたに弟が妹ができるわよ」

母はうれしそうだった。

35・母（後書き）

長い話を読んでいただき、ありがとうございました。

この話は楽しく書けました。

テンポを早くして、物語として、楽しく読めるようにしたかったのですが、うまくいたのかわかりません。

だれか、下読みをしてくれる人がいるといいのですが……

今、次の構想を考えています。できたら、また投稿しますから、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3396r/>

独裁者の姫君

2011年9月21日03時34分発行